

# 福祉のまちづくりに 関する都民の意識

平成 16 年度  
東京都社会福祉基礎調査報告書

## ま え が き

東京都では、社会福祉施策推進の基礎資料とするため、毎年「東京都社会福祉基礎調査」を実施しています。

平成16年度は、平成11年度に続き、「福祉のまちづくりに関する都民の意識」をテーマに実施しました。

東京都は、平成7年3月に「東京都福祉のまちづくり条例」を制定して以来、同条例に基づく東京都福祉のまちづくり推進計画「ハートフル東京推進プラン」の策定や、ハートビル条例の制定等、「やさしいまち東京」の実現に向けて取り組んでまいりました。

さらに、平成16年7月には、東京都福祉のまちづくり推進協議会から、高齢者や障害者を含むすべての人が利用しやすい都市環境の創造という視点に基づく、ユニバーサルデザインの考え方に立った福祉のまちづくりの重要性について提言がありました。

本調査は、こうした動きを踏まえ、ハード（道路・交通・建築物などの整備）、ソフト（心のバリアフリー）の両面から都民の意識を調査しました。

この結果、東京のバリアフリー化の現状や、福祉のまちづくりを進めていく上での課題等に関する基礎資料を得ることができました。

この報告書が新たな社会福祉施策推進のために、関係機関及び関係者の方々に広く御活用いただければ幸いです。

また、本調査の実施に当たりましては、日本大学教授野村歡氏、淑徳大学教授坂巻熙氏に調査票の設計、結果の分析等の御指導をいただきました。深く感謝申し上げます。

最後に、調査に御協力いただきました都民の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成17年12月

東京都福祉保健局

# 目 次

## 第1 調査の概要

1	調査の目的	1
2	調査の対象	1
3	標本の抽出	1
4	調査基準日	1
5	調査事項	1
6	調査方法	2
7	調査の機構	2
8	根拠例規	2
9	調査検討会の設置	2
10	集計の対象	3
11	用語の説明	3
12	利用上の注意	7

## 第2 調査結果の概要

### 1 調査対象者の基本的属性

(1)	性・年齢階級	11
(2)	現在の就労状況	12
(3)	地域	14
(4)	東京都に住んでいる年数（都外への転出期間を除く）	15
(5)	住宅の種類	16
(6)	外出時の状況等	17

### 2 ハード面（道路・交通・建築物など）の整備状況

(1)	現在住んでいる住宅でのバリア（障壁）	20
①	現在住んでいる住宅でのバリア（障壁）の有無	20
②	一戸建てのバリア（障壁）の箇所	24
③	共同住宅の共用部分のバリア（障壁）の箇所	27
(2)	日常よく出かけるところに着くまでのバリア（障壁）	31
①	日常よく出かけるところに着くまでのバリア（障壁）の有無	31
②	日常よく出かけるところに着くまでのバリア（障壁）の箇所	34
③	道路で整備が必要なこと	38

④	公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）で整備が必要なこと	42
⑤	公共交通機関（電車・バス等の車両）で整備が必要なこと	46
⑥	公園・緑地・庭園等で整備が必要なこと	50
(3)	建築物の整備状況	56
①	官公庁施設（区・市役所など）	56
②	病院や診療所	58
③	飲食店	60
④	コンビニエンスストア	62
⑤	建築物相互間の比較	64
(4)	施設等を整備するための費用負担	70
3 ソフト面（心のバリアフリー）		
(1)	外出時に誰かの手助けをした経験	72
①	困っている人を見かけたり、出会ったりした経験の有無	72
②	困っている人を見かけたときに自分がとった行動	75
③	困っている人にした手助けの内容	80
④	困っている人を見かけたときに何もしなかった理由	82
(2)	外出時に誰かの手助けを必要と感じた経験	86
①	外出時に誰かの手助けを必要と感じた経験の有無	86
②	誰かの手助けを必要と感じたときに、必要とした手助けの内容	89
(3)	ボランティア活動の経験	94
(4)	困ったときに近所に相談したり、頼ったりできる人	98
4 住民参加と行政		
(1)	「福祉のまちづくり」への理解を深めるために必要なこと	105
(2)	「福祉のまちづくり」の推進のために重点をおいて取り組むべきもの	109
(3)	外国人が生活する上で必要なこと	114
5 情報バリアフリー		
6 ユニバーサルデザイン		
(1)	ユニバーサルデザインの認知度	120
(2)	ユニバーサルデザインについて行政が取り組むべきテーマ	123
7 自由意見		

### 第3 付属資料

1	調査票と単純集計結果	129
2	調査対象者配付資料「ユニバーサルデザインとは」	148
3	東京都福祉のまちづくり条例	149
4	東京都社会福祉基礎調査の実施状況（過去10年間）	155

※本書のほかに、より詳しいクロス集計結果を掲載した『福祉のまちづくりに関する都民の意識』平成16年度東京都社会福祉基礎調査（統計編）＜冊子版およびCD-ROM版＞があります。本書と併せてご活用ください。

# 第 1 調査の概要

## 第1 調査の概要

### 1 調査の目的

都民の日常生活におけるハード、ソフト両面のバリアフリーに関する意識を調査し、今後の福祉のまちづくり推進のための基礎資料とする。

### 2 調査の対象

調査基準日現在、東京都内に居住する18歳以上の者のうち、住民基本台帳から無作為に抽出した6,000人。

### 3 標本の抽出

無作為抽出した都内150地区を調査地区とし、調査地区から住民基本台帳により各地区40人を系統抽出して調査客体とした。(社会福祉施設入所者は除く)

### 4 調査基準日

平成16年11月1日

### 5 調査事項

本テーマによる調査は平成11年度に続くものだが、今回調査は、住宅から目的地までの日常生活全般にわたるバリア(障壁)を明らかにし、「福祉のまちづくり」の面的な整備を進めるために必要な以下の事項を調査した。また、「情報バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」について、取り組むべき内容を明らかにした。

#### (1) 基本的属性

#### (2) ハード面の整備

- ① 現在住んでいる住宅のバリア(障壁)
- ② 日常よく出かけるところに着くまでのバリア(障壁)
- ③ 建築物の整備状況
- ④ 施設等を整備するための費用負担

#### (3) ソフト面(心のバリアフリー)

- ① 外出時に誰かの手助けをした経験等
- ② 外出時に誰かの手助けを必要と感じた経験等
- ③ ボランティア活動の経験
- ④ 困った時に近所に相談したり、頼ったりできる人

#### (4) 住民参加と行政

- ① 「福祉のまちづくり」への理解を深めるために必要な事項
- ② 「福祉のまちづくり」の推進のために重点をおいて取り組むべきもの
- ③ 外国人が生活する上で必要なこと

#### (5) 情報バリアフリー

#### (6) ユニバーサルデザイン

- ① ユニバーサルデザインの認知度
- ② ユニバーサルデザインについて行政が取り組むべきテーマ

#### (7) 自由意見

## 6 調査方法

調査員が調査対象者を訪問し、面接聞き取りの上調査票を作成する。(面接他計式)

## 7 調査の機構

### (1) 福祉保健局長

管下の職員を指揮監督し、調査の企画、実施及び結果の公表を行う。

### (2) 調査員

福祉保健局統計調査員設置要綱に基づき、知事が任命する。

## 8 根拠例規

(1) 東京都統計調査条例(昭和 32 年 4 月 1 日東京都条例第 15 号)

(2) 東京都統計調査条例施行規則(平成 2 年 12 月 21 日東京都規則第 213 号)

(3) 東京都統計調査条例に基づく都指定統計調査の指定等に関する規則(平成 3 年東京都規則第 25 号)

(4) 東京都社会福祉基礎調査要綱(平成 16 年 8 月 1 日付 16 福保総企第 124 号)

## 9 調査検討会の設置

調査の実施にあたっては、平成 16 年 5 月に学識経験者及び都関係各部署職員からなる検討会を設置し、調査票の設計、結果の分析等について検討を行った。

調査検討会の委員は以下のとおりである。

### 平成 16 年度 東京都社会福祉基礎調査検討会委員

学識経験者	
野村 歡	日本大学理工学部教授
坂巻 熙	淑徳大学社会学部教授

行政関係者
東京都福祉保健局総務部企画課長
東京都福祉保健局総務部副参事(区市町村連絡調整担当)
東京都福祉保健局生活福祉部計画課長
東京都福祉保健局生活福祉部副参事(地域支援担当)
東京都福祉保健局高齢社会対策部計画課長
東京都福祉保健局少子社会対策部計画課長
東京都福祉保健局障害者施策推進部計画課長
東京都都市整備局市街地建築部市街地企画課長
東京都都市整備局都市基盤部交通企画課長
東京都建設局道路管理部安全施設課長
東京都建設局公園緑地部公園建設課長



## 10 集計の対象

(単位：人、%)

調査の客体	集計対象 (回収率)	調査不能				
		転出	不在	拒否	その他	
6,000	4,242 (70.7)	1,758 (29.3)	35 (0.6)	725 (12.1)	885 (14.8)	113 (1.9)

## 11 用語の説明

### ○地域

区市町村を次のように分類した。

区部中央部	千代田区 中央区 港区 新宿区 文京区 台東区 墨田区 江東区 渋谷区 豊島区 荒川区
区部東部・北部	北区 板橋区 足立区 葛飾区 江戸川区
区部西部・南部	品川区 目黒区 大田区 世田谷区 中野区 杉並区 練馬区
多摩東部	武蔵野市 三鷹市 調布市 小金井市 小平市 東村山市 国分寺市 狛江市 清瀬市 東久留米市 西東京市
多摩中央部北	立川市 青梅市 昭島市 福生市 東大和市 武蔵村山市 羽村市 あきる野市 瑞穂町 日の出町
多摩中央部南	八王子市 府中市 町田市 日野市 国立市 多摩市 稲城市
多摩西部	檜原村 奥多摩町
島しょ	大島町 利島村 新島村 神津島村 三宅村 御蔵島村 八丈町 青ヶ島村 小笠原村

### ○就労状況

#### (1) 常用勤労者

会社員、工員、公務員、団体職員、個人商店の従業員、住み込みの家事手伝いなどで、雇用期間について別段の定めがないかあるいは1年を超える期間を定めて他で雇われている人で、役員も含む。

#### (2) 自営業者

商店、工場、開業医、弁護士など、一定の店舗、工場、事務所などにおいて事業を行っている人。なお、個人商店などは会社組織になってもここに含める。

#### (3) 臨時・パート・アルバイトなど

日々または、1年以内の期間を定めて雇われている人

## ○世帯

- (1) ひとり世帯  
単身で暮らしている人のみの世帯
- (2) 核家族世帯  
夫婦若しくは夫婦とその子がいる世帯
- (3) 高齢者（65歳以上）のみの世帯  
65歳以上の高齢者で単身若しくは、65歳以上の高齢者の夫婦のみの世帯

## ○住宅の種類

- (1) 持家（一戸建て）  
世帯主又は世帯員名義の住宅で、1建物1住宅であるもの。店舗付併用住宅も1建物1住宅であればこれに含む。
- (2) 持家（分譲マンション等）  
一戸建て以外で、分譲の民間共同住宅や分譲の公社・公団（平成16年7月より都市再生機構）住宅
- (3) 間借り  
他の世帯が住んでいる住宅の一部を借りて住んでいる場合をいう。
- (4) 社宅など給与住宅  
会社・官公庁などの所有又は管理で、職務上の都合又は給与の一部として従業員を居住させている住宅
- (5) 高齢者向け住宅  
高齢者が安心して居住できるよう、バリアフリー化や緊急時対応サービスが義務付けられた低廉な家賃で入居できる住宅

## ○外出時の状況（問7）

- (1) 外出時の福祉機器の利用  
「外出時、つえ（視覚障害者用を除く）やまっば杖を利用するか」、「外出時、手押し車やシルバーカートを利用するか」、「外出時、車いすを利用するか」のいずれかひとつ以上の設問で「はい」と回答したものの合計をいう。
- (2) 障害者手帳等の有無  
「身体障害者手帳の有無」、「愛の手帳の有無」、「精神障害者保健福祉手帳の有無」のいずれかひとつ以上の設問で「はい」と回答したものの合計をいう。
- (3) 福祉機器・付き添い利用グループ  
「外出時、つえ（視覚障害者用を除く）やまっば杖を利用するか」、「外出時、手押し車やシルバーカートを利用するか」、「外出時、車いすを利用するか」、「外出時、補聴器や手話通訳者などの聴覚の手助けが必要か」、「外出時、視覚障害者用のつえやガイドヘルパーなどの視覚の手助けが必要か」、「身体障害者手帳の有無」、「愛の手帳の有無」、「精神障害者保健福祉手帳の有無」のいずれかひとつ以上の設問で「はい」と回答したものの合計をいう。
- (4) ベビーカー・乳幼児グループ  
「ベビーカーを押して外出することがあるか」、「乳幼児を連れて外出することがあるか（ベビーカーを除く）」のいずれかひとつ以上の設問で「はい」と回答したものの合計

をいう。

#### ○ガイドヘルパー（問7ほか）

重度の視覚障害者の外出時の付き添い。

#### ○身体障害者手帳（問7）

身体障害者（児）が各種の援護を受けるために必要な手帳として交付される。1級から6級の等級がある。2つ以上の重複障害の場合は、重複する障害の合計指数により決定される。

#### ○愛の手帳（問7）

知的障害者（児）が各種の援護を受けるために必要な手帳として、都が独自に設けている。なお、国の制度としては療育手帳があり、「愛の手帳」はこの制度の適用を受けている。1度から4度の等級がある。

#### ○精神障害者保健福祉手帳（問7）

一定の精神障害の状態にあることを証する手帳を交付することにより、手帳の交付を受けた人に対し各方面の協力を得て各種の支援策を講じやすくし、精神障害者の社会復帰の促進と自立と社会参加の促進を図ることを目的として交付する。

#### ○民生・児童委員（問11）

地域社会の中で社会福祉関係について問題を抱えている人の把握、相談、助言、その他の援助にあたり、福祉事務所や児童相談所など各種関係機関への橋渡しなど、必要な支援活動を行っている。民生委員は児童委員を兼ねる。

#### ○ケアマネージャー（問11）

介護保険のサービスを利用する方などからの相談に応じ、利用者の希望や心身の状態等を考慮して、適切な在宅又は施設のサービスができるように区市町村、サービス事業者、介護保険施設等との連絡調整を行っている。

#### ○情報バリアフリー（問12）

情報通信分野におけるあらゆるバリア（障壁）を取り除き、障害者や高齢者も健常者と同様に情報通信を利用できるようにすること。

バリアフリーとは、障害を持つ人などが社会生活をしていく上で、バリアとなるものを除去するという意味だが、単に物理的なバリアだけではなく、より広い意味で、障害者の社会参加を困難にしている社会的、制度的、心理的、情動的なバリアを除去していくことにも用いる。

#### ○ユニバーサルデザイン（問17）

年齢、性別、国籍、個人の能力に関わらず、はじめからできるだけ多くの人が利用可能なように、利用者本位、人間本位の考えに立って都市施設や製品・サービスなどをデザインすること。

《ユニバーサルデザインの7原則》

- ① だれにでも公平に利用できること（公正性の原則）
- ② 利用者に応じた使い方ができること（柔軟性の原則）
- ③ 使い方が簡単ですぐにわかること（単純性と直感性の原則）
- ④ 使い方を間違えても、重大な結果にならないこと（安全性の原則）
- ⑤ 必要な情報がすぐに理解できること（認知性の原則）
- ⑥ 無理な姿勢をとることなく、少ない力でも楽に使えること（効率性の原則）
- ⑦ 利用者に応じたアクセスのしやすさと十分な空間が確保されていること（快適性の原則）

\*東京都福祉のまちづくり推進協議会「福祉のまちづくりの新たな展開」（平成16年7月）より

#### ○視覚障害者用の音声誘導装置（問20）

本調査では、視覚障害者が安全に道路を横断できるようにするため、信号の状態を音声や音響で知らせ、誘導する装置をいう。

#### ○視覚障害者誘導用（点字）ブロック（問20ほか）

本調査では、視覚障害者が安全に移動できるようにするため、建築物の通路や道路・公園などに設置された、突起のある床材をいう。黄色のものが多い。

#### ○だれもが使いやすいトイレ（問20ほか）

本調査では、車いすの人のみならずそれ以外の高齢者や障害のある人なども円滑に利用できるように手すり等が設置されていたり、乳幼児のおむつ替えスペース等が整備されたトイレをいう。

#### ○障害者用の駐車スペース（問20ほか）

本調査では、自動車のドアを全開にした状態で、車いすから自動車へ容易に乗降できる幅が確保されているなど、障害者等が利用しやすいように配慮された駐車スペースをいう。

#### ○車両運行状況の表示装置（問20-5）

本調査では、バス等の現在位置や到着予定時刻等をリアルタイム（即時）に表示する装置をいう。

#### ○ノンステップバス（問20-6）

高齢者や車いすの人など、だれでも乗降しやすいように、床を低くして乗降口の階段をなくしたバスをいう。

#### ○コミュニティバス（問20-6）

地域内の生活拠点を結ぶなど、地域の必要目的に合わせて運行する、小型で利用しやすいバスをいう。

#### ○「整備の必要を感じない」（問21）

整備されていないが、特に整備する必要性を感じない場合をいう。

## ○「身体障害者補助犬法」(問 21)

身体障害者補助犬法の制定・施行(平成14年10月)、全面施行(平成15年10月)により、庁舎、図書館、病院、公共交通機関など公共施設等だけでなく、不特定多数の者が利用するあらゆる民間施設でも、身体障害者が「補助犬」を同伴し利用できるようになった。

身体障害者補助犬(補助犬)とは、国家公安委員会又は厚生労働大臣が指定した法人から認定を受けた犬で、視覚障害者、肢体不自由者、聴覚障害者のために働く盲導犬、介助犬、及び聴導犬をいう。

## 12 利用上の注意

- (1) 比率の単位は「%」、実数の単位は「人」である。
- (2) 統計表の百分率については、小数点以下第2位を四捨五入してあるため、総数と内訳の合計は必ずしも一致しない。
- (3) 統計表中、用いた記号は次のとおりである。  
「0.0」 …… 四捨五入により数値を丸めた結果、表示すべき最下位の桁の1に達しない場合の単位未満の数値  
「—」 …… 皆無又は該当数字なし
- (4) 表側では、「無回答」及び「その他」等の母数の少ないデータは一部省略した。
- (5) 『11年調査』とは、「平成11年度 東京都社会福祉基礎調査(福祉のまちづくりに関する都民の意識)」をいう。
- (6) 「調査結果の概要」中、調査票の回答肢を引用する際、紙面の都合上、次ページ「表記省略一覧表」のように省略した。

表記省略一覧表

設問番号	項目	本文中の表記	調査票の表記
問7	外出時の状況	外出時、つえ（視覚障害者用を除く）やまっば杖を利用するか	あなたは、外出の際につえ（視覚障害者用のつえを除く）やまっば杖を利用しますか
		外出時、手押し車やシルバーカートを利用するか	あなたは、外出の際に手押し車やシルバーカートを利用しますか
		外出時、車いすを利用するか	あなたは、外出の際に車いすを利用しますか
		外出時、補聴器や手話通訳者などの聴覚の手助けが必要か	あなたは、外出の際に補聴器を利用するか、または手話通訳者、家族の付き添いなどの聴覚の手助けが必要ですか
		外出時、視覚障害者用のつえやガイドヘルパーなどの視覚の手助けが必要か	あなたは、外出の際に視覚障害者用のつえを利用するか、またはガイドヘルパーや家族の付き添いなどの視覚の助けとなるものが必要ですか
		身体障害者手帳の有無	あなたは、身体障害者手帳を持っていますか
		愛の手帳の有無	あなたは、愛の手帳を持っていますか
		精神障害者保健福祉手帳の有無	あなたは、精神障害者保健福祉手帳を持っていますか
		ベビーカーを押して外出することがあるか	あなたは、ベビーカーを押して外出することがありますか
		乳幼児を連れて外出することがあるか（ベビーカーを除く）	あなたは、乳幼児を連れて外出することがありますか（ベビーカーを除く）
		現在出産を控えているか、過去半年間で出産を経験したか	あなたは、現在出産を控えていますか。または、過去半年間で、出産を経験しましたか
介護保険の要介護認定の有無	あなたは、介護保険の要介護認定を受けていますか		
問12	外出時の建物への案内標示や駅での乗り換え標示等の整備	案内表示等で、視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用する。	案内表示等で、視覚障害者（色覚障害）が、混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字などを併用し表示する
問13	「福祉のまちづくり」への理解を深めるために必要なこと	学校などの教育場面で、バリアを理解し体験する機会を設ける	学校などの教育場面で、まちで移動をする際のバリア（障壁）を理解したり、体験したりする機会を設ける
		近所や町内などの集まりで、バリアを理解し体験する機会を設ける	近所や町内などの集まりで、まちを移動する際のバリア（障壁）を理解したり、体験したりする機会を設ける
		職場などで、バリアを理解し体験する研修などをする	職場などで、まちを移動する際のバリア（障壁）を理解したり、体験したりする研修などをする
		家庭などで、バリアを理解するための教育や話し合いをする	家庭などで、まちを移動する際のバリア（障壁）を理解するための教育や話し合いをする

設問番号	項目	本文中の表記	調査票の表記
問14	「福祉のまちづくり」の推進のため重点を置いて取り組むべきもの	福祉のまちづくりへの理解が得られるよう普及、推進に努めること	シンポジウムの開催やパンフレットの作成によって、福祉のまちづくりへの理解と協力を得られるよう普及、推進に努めること
		当事者の意見を反映することができる仕組みを作ること	都民・事業者・行政が、それぞれに連絡調整や情報交換を行う場を設けるなど、当事者の意見を反映することができる仕組みを作ること
		道路と歩道を分離したり、歩道の段差を少なくし幅を広げるなどの道路の整備	道路と歩道を分離したり、歩道の段差を少なくしたり、幅を広げるなどの道路の整備
		駅舎にエレベーターを設置するなど、公共交通施設や公共交通機関の整備	駅舎にエレベーターを設置したり、電車とホームのすき間や段差を解消したり、乗り降りしやすいバスを導入するなどの、公共交通施設や公共交通機関の整備
		多くの人が利用する建物内の整備やわかりやすい案内標示の整備	多くの人が利用する建物（金融機関、スーパーマーケット、デパート、飲食店等）の出入口を自動ドアにしたり、通路の幅を広げたり、段差を解消するなどの建物内の整備やわかりやすい案内標示の整備
		個々の施設の整備だけでなく、地域における連続的・一体的な整備	人々が生活する際に利用する身近な建物、道路、公園、公共交通施設や公共交通機関等を個々に整備するだけでなく、地域で、連続的に一体的に計画的に進めること
問20-3	道路で整備が必要なこと	信号の時間を改善したり、信号に視覚障害者用音声誘導装置等を設置する	歩行者が安全に渡れるように、信号の時間を改善したり、信号に視覚障害者用の音声誘導装置などを設置する
		視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した標識等の整備	視覚障害者（色覚障害）が、混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字などを併用した標識等の整備をする
問20-4	公園・緑地・庭園等で整備が必要なこと	視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した案内等の整備	視覚障害者（色覚障害）が、混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字などを併用した案内等を整備する
問20-5	公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）で整備が必要なこと	視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字などを併用した案内等の整備	視覚障害者（色覚障害）が、混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字などを併用した案内等を整備する
問20-6	公共交通機関（電車・バス等）で整備が必要なこと	乗り降りしやすいノンステップバスの整備	乗降口の階段がなく、車いすなどでも乗り降りしやすい、ノンステップバスの整備
		電光掲示板などの案内標示がついている、電車やバスの整備	車内に、停車駅や停留所等を表示する、電光掲示板などの案内標示がついている、電車やバスの整備
		地域の生活拠点等を結ぶコミュニティバスの整備	地域の生活拠点等を結ぶ、小型で利用しやすいコミュニティバスの整備
		リフト付きタクシーの整備	車いすなどのまま乗り降りができる、リフト付きタクシーの整備
		視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した案内等の整備	視覚障害者（色覚障害）が、混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字などを併用した案内等の整備

設問番号	項目	本文中の表記	調査票の表記
問21	建築物の整備状況に関する都民の意識	官公庁施設（区・市役所など）	都庁舎、区・市役所、町・村役場（お住まいの近くの官公庁含む）
		飲食店	飲食店（喫茶店や食堂、ファミリーレストランなど）
		道路から建物の出入口までの通路	道路から建物の出入口に至るまでの通路の整備（段差をなくす、幅を広げる）
		建物の出入口	建物の出入口の整備（段差をなくす、幅を広げる、自動ドアを設置する等）
		建物内の通路	建物内の通路の整備（段差をなくす、幅を広げる等）
		階段	階段の整備（手すりを設置する、床に滑り止めをつける等）
		エレベーターやエスカレーター	だれもが利用しやすいエレベーターや、エスカレーターの整備
		だれもが使いやすいトイレ	車いすの人や乳幼児を連れた人など、だれもが使いやすいトイレの整備
		案内標示や視覚障害者誘導用（点字）ブロック	わかりやすい案内標示や、視覚障害者誘導用（点字）ブロックの整備
		視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した表示	視覚障害者（色覚障害）が混同しやすいような色の組み合わせを避けた、絵や文字などを併用した表示の整備
		障害者用の駐車スペース	車いすの人などに配慮した、障害者用の駐車スペースの整備
		補助犬と同伴での入室の配慮	補助犬と同伴での入室の配慮（身体障害者補助犬法の施行による）



## 第2 調査結果の概要

## 第2 調査結果の概要

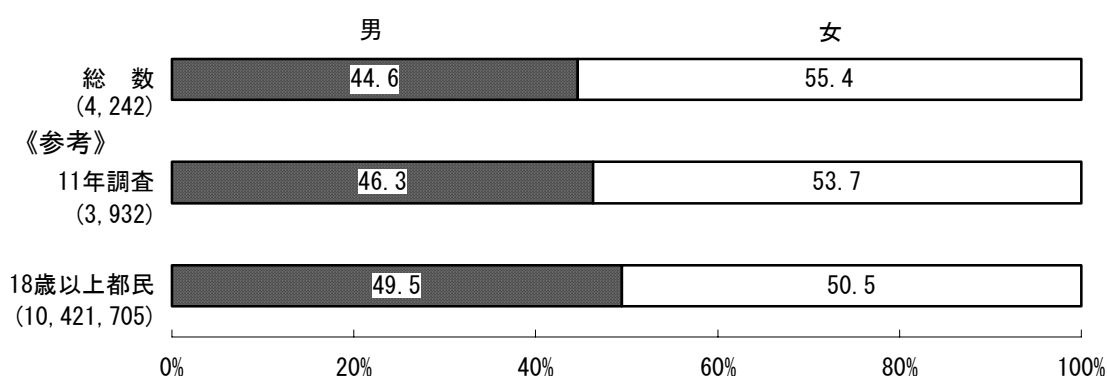
### 1 調査対象者の基本的属性

#### (1) 性・年齢階級

本調査集計対象者の性別は、男性 44.6%、女性 55.4%となっている。(図 1-1)

年齢階級は、「30～39 歳」が最も多く 21.1%となっている。「18 歳以上都民」と比べると、「18～29 歳」では 5.8 ポイント低く、「65 歳以上」では 2.5 ポイント高くなっている。(表 1-1)

図 1-1 性別－11 年調査との比較



(注) 「18歳以上都民」は、「住民基本台帳による東京都の世帯と人口(平成17年1月1日現在)」より作成

表 1-1 年齢階級－性別、11 年調査との比較

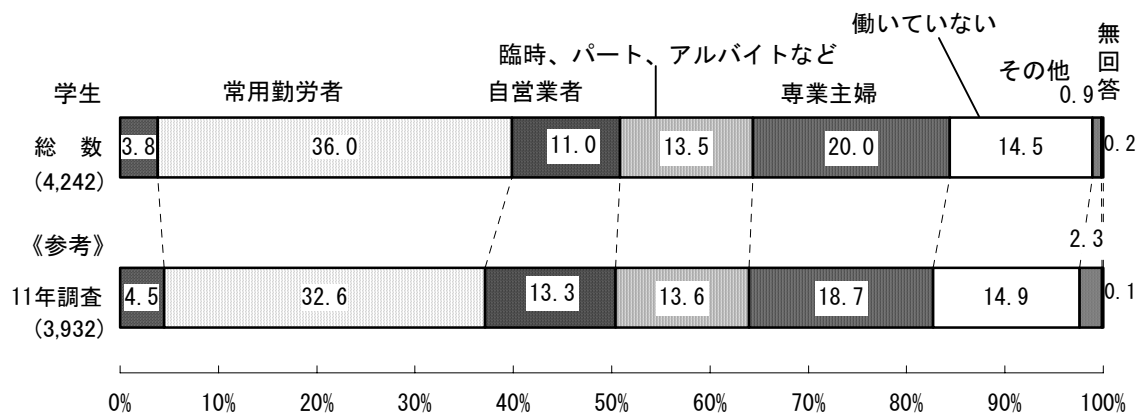
	総数	18歳	20歳	29歳	30歳	39歳	40歳	49歳	50歳	59歳	60歳以上	(再掲) 65歳以上
		歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳		
本調査	総数 (4,242)	100.0	13.9	21.1	16.1	16.7	16.5	11.9	3.9	23.4		
	男 (1,892)	100.0	14.6	20.3	15.9	16.7	17.4	12.1	3.0	22.7		
	女 (2,350)	100.0	13.4	21.7	16.2	16.6	15.7	11.8	4.6	23.9		
《参考》 11年調査	総数 (3,932)	100.0	17.3	17.7	14.7	19.6	16.8	┌13.9┐		21.7		
	男 (1,819)	100.0	17.6	17.7	14.8	20.5	16.8	┌12.6┐		20.5		
	女 (2,113)	100.0	17.0	17.7	14.5	18.9	16.8	┌15.0┐		22.8		
都18歳以上	総数 (10,421,705)	100.0	19.7	20.6	14.8	16.2	14.4	9.6	4.7	20.9		
	男 (5,156,967)	100.0	20.6	21.7	15.6	16.6	13.9	8.5	3.1	17.8		
	女 (5,264,738)	100.0	18.7	19.6	14.1	15.8	14.9	10.7	6.3	23.9		

(注) 「18歳以上都民」は、「住民基本台帳による東京都の世帯と人口(平成17年1月1日現在)」より作成

## (2) 現在の就労状況

「常用勤労者」が36.0%と最も多く、次いで「専業主婦」20.0%、「働いていない」14.5%と続く。(図 1-2)

図 1-2 現在の就労状況－11年調査との比較



性・年齢階級別にみると、男性の70歳未満では「常用勤労者」、70歳以上では「働いていない」が最も多くなっている。女性の18～29歳では「常用勤労者」、30～79歳では「専業主婦」、80歳以上では「働いていない」が最も多くなっている。(表1-2)

表1-2 現在の就労状況－性・年齢階級別

	総数	学生	常用勤労者	自営業者	臨時、パートなど	専業主婦	働いていない	その他	無回答
総数	100.0 (4,242)	3.8	36.0	11.0	13.5	20.0	14.5	0.9	0.2
男 総数	100.0 (1,892)	4.3	54.2	16.2	5.9	0.2	17.9	0.9	0.4
男 18～29歳	100.0 (276)	28.6	50.0	3.3	14.9	0.4	2.5	0.4	—
男 30～39歳	100.0 (384)	0.8	84.4	8.3	4.7	—	1.6	0.3	—
男 40～49歳	100.0 (301)	—	75.7	18.3	2.3	—	1.7	1.0	1.0
男 50～59歳	100.0 (316)	—	68.0	21.8	2.2	—	5.7	1.3	0.9
男 60～69歳	100.0 (330)	—	32.7	29.4	7.9	—	29.1	0.6	0.3
男 70～79歳	100.0 (228)	—	4.8	17.1	5.7	0.4	70.6	1.3	—
男 80歳以上	100.0 (57)	—	3.5	8.8	—	1.8	80.7	5.3	—
男 65歳以上 (再掲)	100.0 (429)	—	9.6	19.1	6.5	0.5	62.5	1.9	—
女 総数	100.0 (2,350)	3.4	21.2	6.8	19.7	36.0	11.8	1.0	0.1
女 18～29歳	100.0 (314)	25.2	37.9	2.5	17.2	10.8	5.1	1.3	—
女 30～39歳	100.0 (511)	0.2	33.3	3.5	19.2	39.9	3.1	0.6	0.2
女 40～49歳	100.0 (381)	—	27.8	6.8	30.2	33.3	1.3	0.5	—
女 50～59歳	100.0 (391)	—	21.0	11.0	30.4	31.2	5.4	1.0	—
女 60～69歳	100.0 (369)	—	5.4	10.3	14.4	53.7	15.2	0.8	0.3
女 70～79歳	100.0 (277)	—	0.7	8.7	7.9	46.6	33.9	1.8	0.4
女 80歳以上	100.0 (107)	—	—	1.9	0.9	30.8	64.5	1.9	—
女 65歳以上 (再掲)	100.0 (562)	—	1.2	8.2	7.1	47.5	34.5	1.2	0.2

### (3) 地域

「区部」は69.0%、「市町村部」は31.0%となっている。

「区部」では、「区部西部・南部」が31.1%と最も多くなっている。

「市町村部」では、「多摩中央部南」が12.3%と最も多くなっている。(表1-3)

表1-3 地域

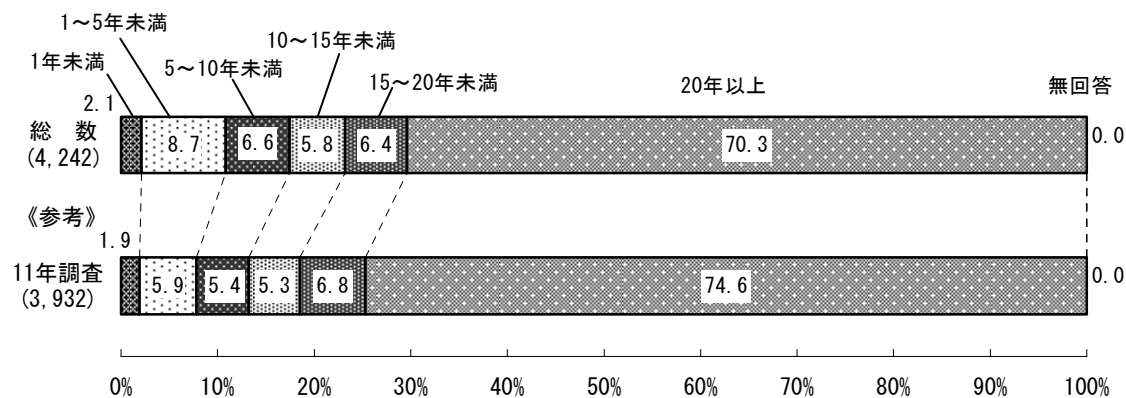
	総数	区部			市町村部	多摩東部	多摩中央部北	多摩中央部南	多摩西部	島しょ	
		区部中央部	区部東部・北部	区部西部・南部							
総数	100.0 (4,242)	69.0 (2,929)	19.8 (840)	18.1 (769)	31.1 (1,320)	31.0 (1,313)	10.7 (455)	7.9 (337)	12.3 (521)	— (—)	— (—)

(注) 本調査の調査地区で、「多摩西部」と「島しょ」の該当はない。

#### (4) 東京都に住んでいる年数（都外への転出期間を除く）

「20年以上」が70.3%と最も多く、「1～5年未満」8.7%、「5～10年未満」6.6%と続く。11年調査と比べると、「1～5年未満」は2.8ポイント増加しているが、「20年以上」は4.3ポイント減少している。（図1-3）

図1-3 東京都に住んでいる年数（都外への転出期間を除く）－11年調査との比較



地域別で見ると、「20年以上」は、区部が68.8%、市町村部が73.7%と、市町村部の割合が高くなっている。「1～5年未満」は、区部が9.7%、市町村部が6.5%と、区部の割合が高くなっている。（表1-4）

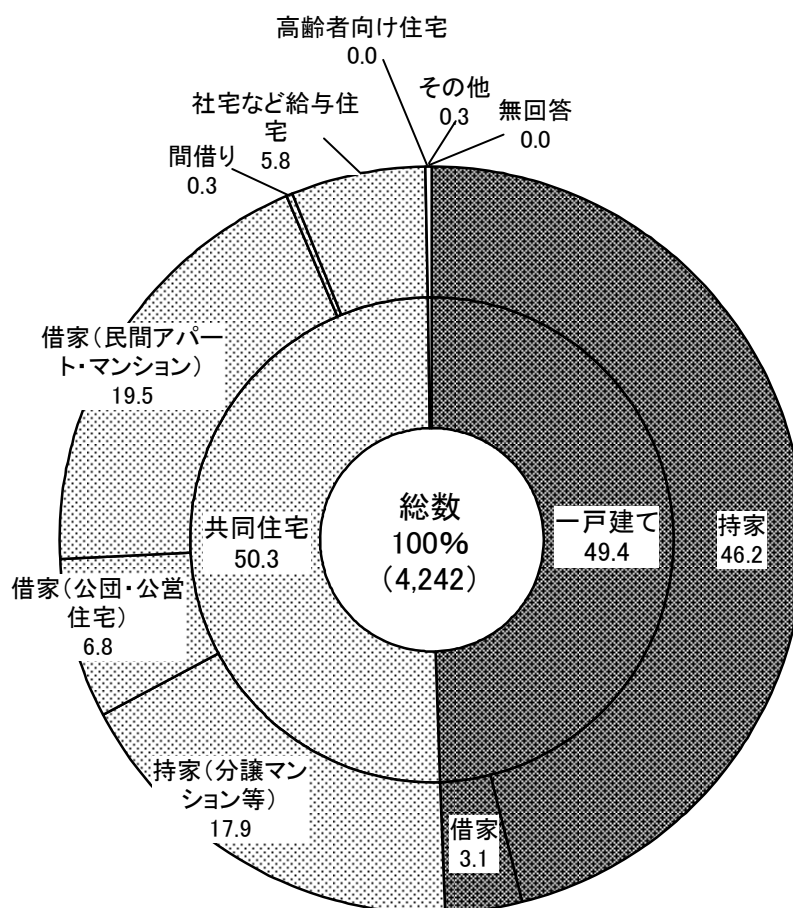
表1-4 東京都に住んでいる年数（都外への転出期間を除く）－地域別

	総数	1年未満	1～5年未満	5～10年未満	10～15年未満	15～20年未満	20年以上	無回答
総数	100.0 (4,242)	2.1	8.7	6.6	5.8	6.4	70.3	0.0
区部	100.0 (2,929)	2.5	9.7	7.1	5.8	6.1	68.8	0.0
区部中央部	100.0 (840)	2.1	8.6	7.1	5.6	5.1	71.4	—
区部東部・北部	100.0 (769)	3.9	10.0	7.4	5.1	5.2	68.3	0.1
区部西部・南部	100.0 (1,320)	2.0	10.2	6.9	6.4	7.2	67.3	—
市町村部	100.0 (1,313)	1.2	6.5	5.6	5.6	7.2	73.7	0.1
多摩東部	100.0 (455)	1.8	7.5	4.2	4.6	6.4	75.6	—
多摩中央部北	100.0 (337)	0.9	3.6	3.9	3.3	6.2	81.9	0.3
多摩中央部南	100.0 (521)	1.0	7.7	8.1	7.9	8.6	66.8	—

## (5) 住宅の種類

現在住んでいる住宅の種類について聞いたところ、「一戸建て」が49.4%、「共同住宅」(分譲マンション、公団・公営住宅、民間アパート・マンションなど)が50.3%と、ほぼ半数ずつの割合となっている。(図1-4)

図1-4 住宅の種類



## (6) 外出時の状況等

外出時の状況、障害者手帳等の所持状況及び介護保険の要介護認定の有無など、12項目について聞いたところ、「はい」との答えが多かった項目は、「乳幼児を連れて外出することがあるか(ベビーカーを除く)」9.6%、「ベビーカーを押して外出することがあるか」7.2%となっている。(表1-5)

表1-5 外出時の状況等 (12区分)

	総 数	は い	い い え	無 回 答		
福祉機器・付き添い利用 グループ(239人)とした。 (表1-6参照)	外出時、つえ(視覚障害 者用を除く)やまっば杖 を利用するか	100.0 (4,242)	2.8 (117)	97.1 (4,120)	0.1 (5)	
	外出時、手押し車やシル バーカートを利用するか	100.0 (4,242)	1.2 (52)	98.7 (4,187)	0.1 (3)	
	外出時、車いすを利用す るか	100.0 (4,242)	0.8 (36)	99.1 (4,203)	0.1 (3)	
	外出時、補聴器や手話通 訳者などの聴覚の手助け が必要か	100.0 (4,242)	0.9 (40)	99.0 (4,199)	0.1 (3)	
	外出時、視覚障害者用の つえやガイドヘルパーなど の視覚の手助けが必要か	100.0 (4,242)	0.5 (22)	99.4 (4,217)	0.1 (3)	
	身体障害者手帳の有無	100.0 (4,242)	2.4 (100)	97.6 (4,139)	0.1 (3)	
	愛の手帳の有無	100.0 (4,242)	0.1 (5)	99.8 (4,233)	0.1 (4)	
	精神障害者保健福祉手帳 の有無	100.0 (4,242)	0.0 (2)	99.9 (4,236)	0.1 (4)	
	ベビーカー・乳幼児 グループ(435人)とした。 (表1-6参照)	ベビーカーを押して外出 することがあるか	100.0 (4,242)	7.2 (305)	92.7 (3,934)	0.1 (3)
		乳幼児を連れて外出する ことがあるか(ベビー カーを除く)	100.0 (4,242)	9.6 (406)	90.3 (3,832)	0.1 (4)
現在出産を控えている か、過去半年間で出産を 経験したか		100.0 (4,242)	1.2 (52)	98.7 (4,188)	0.0 (2)	
介護保険の要介護認定の 有無		100.0 (4,242)	2.1 (90)	97.8 (4,149)	0.1 (3)	

(注) { } で示している、グループの人数は、それぞれの該当する項目のいずれかひとつ以上に「はい」と答えたものの合計である。



また、外出時の状況を2つに区分したところ、「福祉機器・付き添いの必要や障害者手帳保有の有無」について「はい」と答えた人は、239人で総数の5.6%であり、「ベビーカー使用や乳幼児との外出の有無」について「はい」と答えた人は、435人で総数の10.3%となっている。(表1-6)

表1-6 外出時の状況(グループ比較)(2区分)

	総 数	は い	い い え	無 回 答
福祉機器・付き添いの必要や障害者手帳保有の有無 (「はい」と答えた人を「福祉機器・付き添い利用グループ」とした。)	100.0 (4,242)	5.6 (239)	94.3 (4,000)	0.1 (3)
ベビーカー使用や乳幼児の外出の有無 (「はい」と答えた人を「ベビーカー・乳幼児グループ」とした。)	100.0 (4,242)	10.3 (435)	89.7 (3,804)	0.1 (3)

「福祉機器・付き添い利用グループ」239人中、男性は97人、女性は142人と女性のほうが多くなっている。

性・年齢階級別で見ると、65歳以上の割合が72.4%を占めているが、男性の65歳以上の割合が63.9%なのに対し、女性の65歳以上の割合は78.2%と、年齢が高い層での女性の割合が高くなっている。(表1-7)

表1-7 福祉機器・付き添い利用グループ—性・年齢階級別

	総数	18~29歳	30~39歳	40~49歳	50~59歳	60~69歳	70~79歳	80歳以上	65歳以上 (再掲)
総数	100.0 (239)	3.8 (9)	3.3 (8)	4.2 (10)	9.6 (23)	14.2 (34)	31.0 (74)	33.9 (81)	72.4 (173)
男	100.0 (97)	4.1 (4)	6.2 (6)	3.1 (3)	13.4 (13)	18.6 (18)	28.9 (28)	25.8 (25)	63.9 (62)
女	100.0 (142)	3.5 (5)	1.4 (2)	4.9 (7)	7.0 (10)	11.3 (16)	32.4 (46)	39.4 (56)	78.2 (111)

「ベビーカー・乳幼児グループ」435人中、男性は173人、女性は262人と、女性の方が多くなっている。

年齢階級別でみると、30～39歳でグループ総数の55.9%を占め最も多く、次いで40～49歳の14.0%、18～29歳の13.6%となっている。18～29歳と30～39歳の割合は、女性の方が男性よりもそれぞれ4.3ポイント、3.5ポイント高く、女性の方が男性に比較して低い年齢の割合が高くなっている。(表1-8)

表1-8 ベビーカー・乳幼児グループ—性・年齢階級別

	総数	18～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80歳以上	65歳以上 (再掲)
総数	100.0 (435)	13.6 (59)	55.9 (243)	14.0 (61)	6.2 (27)	8.5 (37)	1.6 (7)	0.2 (1)	5.3 (23)
男	100.0 (173)	11.0 (19)	53.8 (93)	17.3 (30)	4.0 (7)	9.8 (17)	4.0 (7)	— (—)	8.7 (15)
女	100.0 (262)	15.3 (40)	57.3 (150)	11.8 (31)	7.6 (20)	7.6 (20)	— (—)	0.4 (1)	3.1 (8)

## 2 ハード面（道路・交通・建築物など）の整備状況

### (1) 現在住んでいる住宅でのバリア（障壁）

住宅でバリアを感じる人は約3割。

バリアの箇所は、住宅の出入り口や出入り口までの通路、階段が多くなっている。

#### ① 現在住んでいる住宅でのバリア（障壁）の有無

現在住んでいる住宅で、日常生活をする上でバリア（障壁）になっているところが「ある」と答えた人を、住宅の種類別にみると、「一戸建て」29.7%、「共同住宅」32.3%といずれも3割前後であった。

一戸建てでは、「持家」29.2%よりも、「借家」36.8%の方が高くなっている。共同住宅では、「借家（公団・公営住宅）」40.4%等の割合が高くなっている。（表2-1）

表2-1 現在住んでいる住宅でのバリアの有無－住宅の種類別

	総数	ある	ない	無回答
一戸建て	100.0 (2,094)	29.7	70.2	0.2
持家（一戸建て）	100.0 (1,961)	29.2	70.6	0.2
借家（一戸建て）	100.0 (133)	36.8	63.2	—
共同住宅	100.0 (2,135)	32.3	67.6	0.1
持家（分譲マンション等）	100.0 (760)	30.1	69.9	—
借家（公団・公営住宅）	100.0 (287)	40.4	58.9	0.7
借家（民間アパート・マンション）	100.0 (829)	31.4	68.5	0.1
間借り	100.0 (14)	42.9	57.1	—
社宅など給与住宅	100.0 (244)	32.0	68.0	—
高齢者向け住宅	100.0 (1)	—	100.0	—

性別にみると、一戸建てでは、「ある」との答えた人は、男性 28.0%、女性 30.9%となっている。(表 2-2)

表 2-2 現在住んでいる住宅（一戸建て）でのバリアの有無—性・年齢階級別

	総 数	あ る	な い	無 回 答
総数	100.0 (2,094)	29.7	70.2	0.2
男 総数	100.0 (911)	28.0	71.9	0.1
男 18～29歳	100.0 (113)	21.2	78.8	—
男 30～39歳	100.0 (105)	38.1	61.9	—
男 40～49歳	100.0 (132)	26.5	73.5	—
男 50～59歳	100.0 (167)	29.9	69.5	0.6
男 60～69歳	100.0 (199)	26.6	73.4	—
男 70～79歳	100.0 (152)	26.3	73.7	—
男 80歳以上	100.0 (43)	30.2	69.8	—
男 65歳以上 (再掲)	100.0 (286)	27.3	72.7	—
女 総数	100.0 (1,183)	30.9	68.8	0.3
女 18～29歳	100.0 (124)	25.0	75.0	—
女 30～39歳	100.0 (164)	29.9	70.1	—
女 40～49歳	100.0 (172)	34.3	65.1	0.6
女 50～59歳	100.0 (225)	35.1	64.9	—
女 60～69歳	100.0 (227)	27.3	72.2	0.4
女 70～79歳	100.0 (195)	32.3	67.2	0.5
女 80歳以上	100.0 (76)	30.3	69.7	—
女 65歳以上 (再掲)	100.0 (378)	29.4	70.4	0.3

性別でみると、共同住宅では、男性 28.7%、女性 35.2%と女性の方が高くなっている。(表 2-3)

表 2-3 現在住んでいる住宅（共同住宅）でのバリアの有無—性・年齢階級別

	総 数	あ る	な い	無 回 答
総数	100.0 (2,135)	32.3	67.6	0.1
男 総数	100.0 (971)	28.7	71.3	—
男 18～29歳	100.0 (158)	22.2	77.8	—
男 30～39歳	100.0 (277)	29.6	70.4	—
男 40～49歳	100.0 (168)	31.0	69.0	—
男 50～59歳	100.0 (149)	27.5	71.8	0.7
男 60～69歳	100.0 (131)	29.0	71.0	—
男 70～79歳	100.0 (74)	32.4	67.6	—
男 80歳以上	100.0 (14)	50.0	50.0	—
男 65歳以上 (再掲)	100.0 (141)	31.2	68.8	—
女 総数	100.0 (1,164)	35.2	64.6	0.2
女 18～29歳	100.0 (189)	31.7	68.3	—
女 30～39歳	100.0 (347)	40.3	59.7	—
女 40～49歳	100.0 (208)	34.6	65.4	—
女 50～59歳	100.0 (165)	32.7	66.1	1.2
女 60～69歳	100.0 (142)	33.1	66.9	—
女 70～79歳	100.0 (82)	31.7	68.3	—
女 80歳以上	100.0 (31)	35.5	64.5	—
女 65歳以上 (再掲)	100.0 (184)	33.2	66.8	—

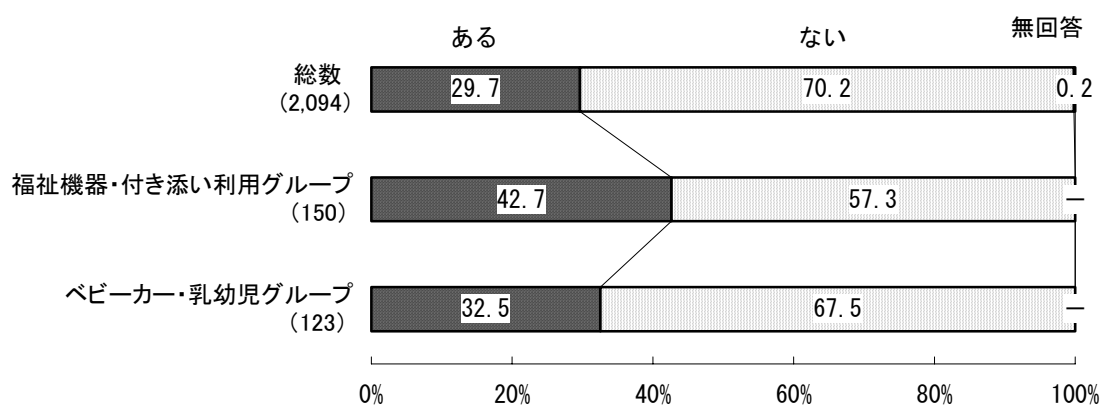
外出時の状況（グループ比較）別にみると、一戸建てでは、福祉機器・付き添い利用グループは、総数と比べて、「ある」と答えた人の割合は13.0ポイント高くなっている。

（図2-1）

共同住宅では、ベビーカー・乳幼児グループは、総数と比べて12.9ポイント高くなっている。（図2-2）

図2-1 現在住んでいる住宅（一戸建て）でのバリアの有無

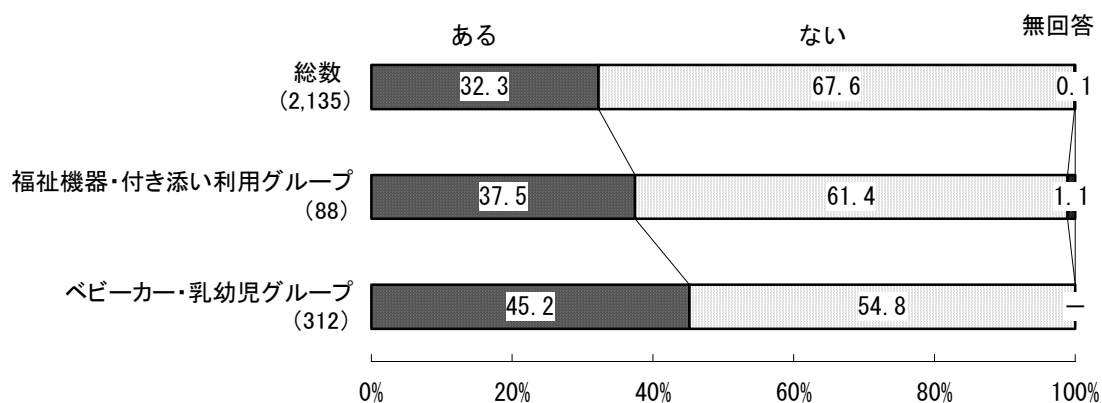
－外出時の状況（グループ比較）別



（注）福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表1-5のそれぞれのグループ総数のうち、現在、一戸建てに住んでいる人の人数である。

図2-2 現在住んでいる住宅（共同住宅）でのバリアの有無

－外出時の状況（グループ比較）別

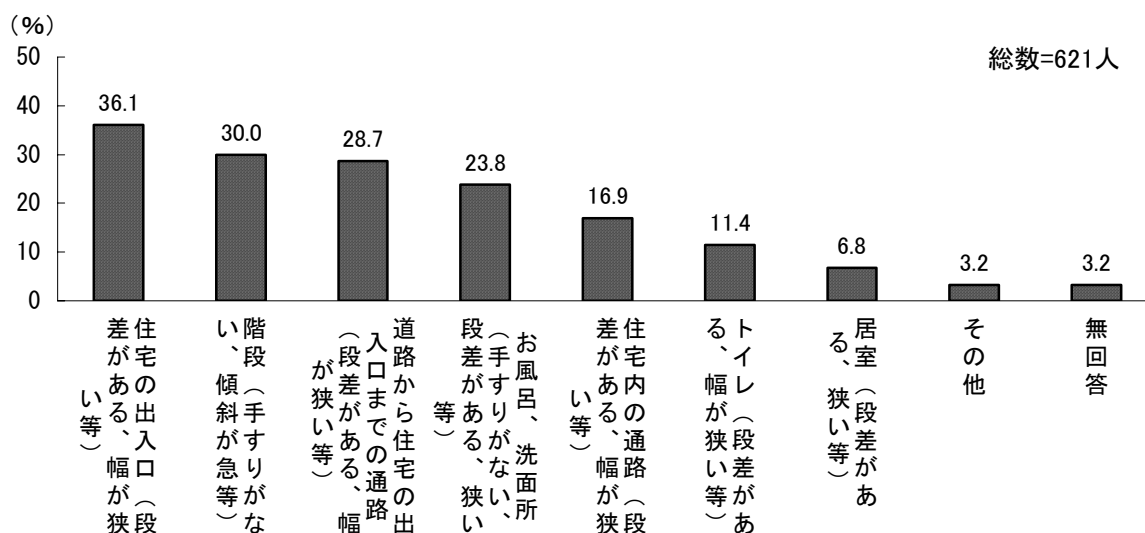


（注）福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表1-5のそれぞれのグループ総数のうち、現在、共同住宅に住んでいる人の人数である。

## ② 一戸建てのバリア（障壁）の箇所

現在、一戸建てに住んでいる人で、日常生活をする上でバリア（障壁）になっているところが「ある」と答えた人に、バリアの箇所を聞いたところ、「住宅の出入り口」36.1%が最も多く、次いで、「階段」30.0%、「道路から住宅の出入り口までの通路」28.7%となっている。（図 2-3）

図 2-3 一戸建てのバリアの箇所（2 つ以内の複数回答）



年齢階級別にみると、「住宅の出入り口」、「階段」、「道路から住宅の出入り口までの通路」の割合は、80歳未満で上位にあげられているが、80歳以上では、「お風呂、洗面所」38.9%、「トイレ」22.2%の割合が他の年齢階級に比べて高くなっている。（表2-4）

表2-4 一戸建てのバリアの箇所（2つ以内の複数回答）—性、年齢階級別

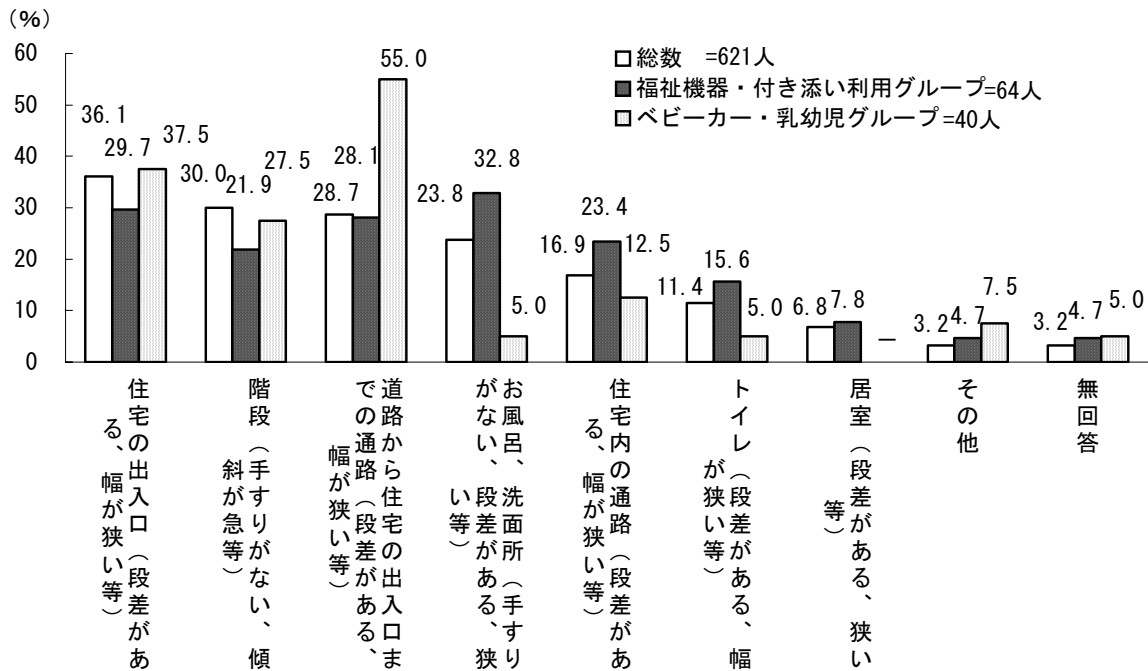
		総 数	等 が 住 宅 の 出 入 り 口 （ 段 差 が 狭 い ）	い 階 段 （ 手 す り が 急 な 傾 斜 ）	等 が あ る 道 路 か ら 住 宅 の 出 入 り 口 ま で の 通 路 （ 段 差 が 狭 い ）	あ る す り が 狭 い 道 路 か ら 住 宅 の 出 入 り 口 ま で の 通 路 （ 段 差 が 狭 い ）	お 風 呂 、 洗 面 所 （ 手 す り が 狭 い ）	等 が あ る 住 宅 内 の 通 路 （ 段 差 が 狭 い ）	る ト イ レ （ 段 差 が 狭 い ）	狭 居 室 （ 段 差 が あ る ）	そ の 他	無 回 答
総 数		100.0 (621)	36.1	30.0	28.7	23.8	16.9	11.4	6.8	3.2	3.2	
性 別	男	100.0 (255)	37.6	27.5	24.7	25.1	18.4	12.2	5.5	2.4	4.3	
	女	100.0 (366)	35.0	31.7	31.4	23.0	15.8	10.9	7.7	3.8	2.5	
年 齢 階 級 別	18～29歳	100.0 (55)	36.4	34.5	29.1	20.0	20.0	14.5	5.5	5.5	1.8	
	30～39歳	100.0 (89)	34.8	27.0	39.3	21.3	14.6	10.1	2.2	2.2	3.4	
	40～49歳	100.0 (94)	45.7	30.9	21.3	14.9	21.3	12.8	3.2	1.1	3.2	
	50～59歳	100.0 (129)	42.6	36.4	23.3	27.1	14.7	10.1	7.8	0.8	3.9	
	60～69歳	100.0 (115)	34.8	29.6	29.6	25.2	15.7	8.7	6.1	3.5	2.6	
	70～79歳	100.0 (103)	26.2	27.2	35.0	25.2	17.5	10.7	11.7	7.8	1.9	
	80歳以上	100.0 (36)	22.2	13.9	19.4	38.9	16.7	22.2	13.9	2.8	8.3	
	65歳以上 (再掲)	100.0 (189)	30.7	24.9	31.2	27.5	18.0	11.6	10.1	5.3	3.2	



外出時の状況（グループ比較）別にみると、ベビーカー・乳幼児グループでは、「道路から住宅の出入り口までの通路」が総数と比べて26.3ポイント高くなっている。福祉機器・付き添い利用グループでは、「お風呂、洗面所」が総数に比べて9.0ポイント高くなっている。（図2-4）

図2-4 一戸建てのバリアの箇所（2つ以内の複数回答）

－外出時の状況（グループ比較）別

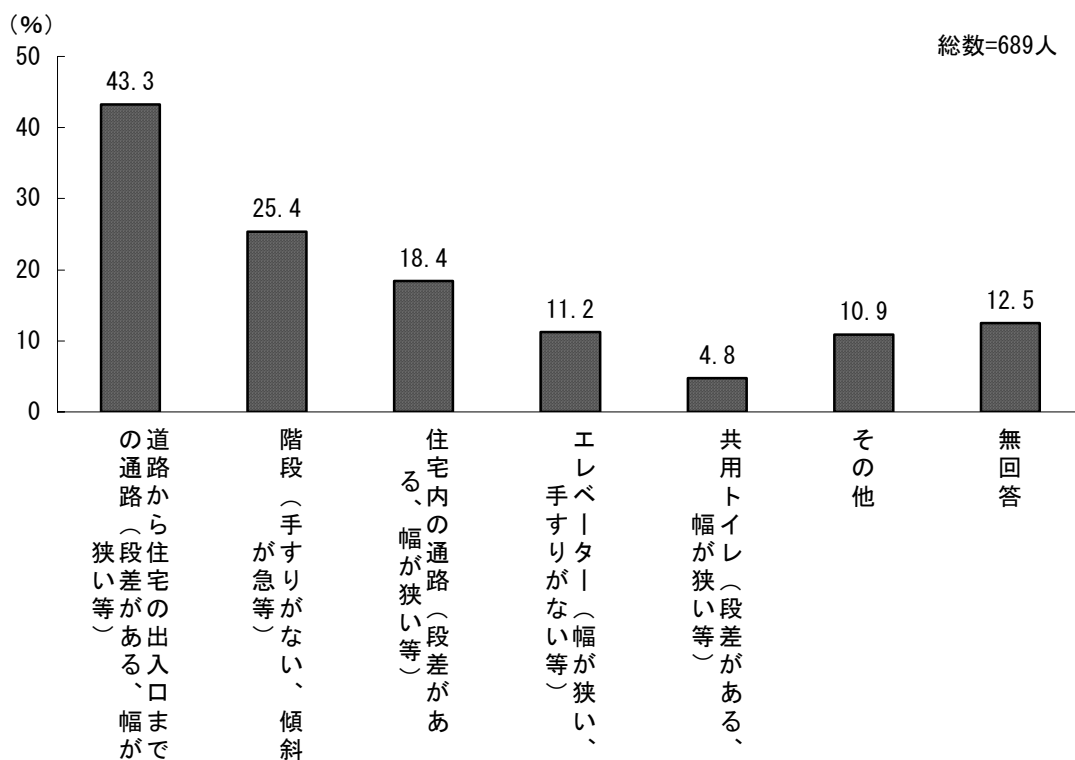


(注) 福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表1-5のそれぞれのグループ総数のうち、現在、一戸建てに住んでいて、その住宅で日常生活をする上でバリアがあると答えた人の人数である。

### ③ 共同住宅の共用部分のバリア（障壁）の箇所

現在、共同住宅に住んでいる人で、日常生活をする上でバリア（障壁）になっているところが「ある」と答えた人に、共同住宅の共有部分のバリアの箇所を聞いたところ、「道路から住宅の出入り口までの通路」43.3%が最も多く、次いで、「階段」25.4%、「住宅内の通路」18.4%となっている。（図 2-5）

図 2-5 共同住宅の共用部分のバリアの箇所（2 つ以内の複数回答）



（注）本調査では、共同住宅の共用部分のバリアの箇所として、「共用のお風呂、洗面所（手すりがない、段差がある、狭い等）」を選択肢に含め聞いたが、現在の共同住宅の設備の実態を考慮し、結果数値は掲載していない。

性別にみると、「階段」は、男性 22.6%、女性 27.3%と女性の割合の方が高い一方で、「住宅内の通路」は、男性 21.9%、女性 16.1%と男性の割合の方が高くなっている。

年齢階級別にみると、「道路から住宅の出入り口までの通路」は 40～49 歳で 52.4%、「階段」は 70～79 歳で 32.0%、「住宅内の通路は」50～59 歳で 27.4%と、それぞれ最も割合が高くなっている。(表 2-5)

表 2-5 共同住宅の共用部分のバリアの箇所 (2 つ以内の複数回答) ー性、年齢階級別

		総 数	る、ま道 幅、で路 がの通 狭から い住宅 等)の 段出 が入 あ口	傾 階 段 (手 すり が ない、 急等)	あ 住 宅 内 の 通 路 (段 差 が 狭 い 等)	い、エ レ ベ ー タ ー (幅 が 狭 い 等)	る、共 用 ト イ レ (段 差 が 狭 い 等)	そ の 他	無 回 答
総 数		100.0 (689)	43.3	25.4	18.4	11.2	4.8	10.9	12.5
性 別	男	100.0 (279)	44.1	22.6	21.9	12.2	5.4	10.4	12.2
	女	100.0 (410)	42.7	27.3	16.1	10.5	4.4	11.2	12.7
年 齢 階 級 別	18～29歳	100.0 (95)	41.1	26.3	14.7	10.5	4.2	7.4	18.9
	30～39歳	100.0 (222)	44.6	25.7	19.4	10.4	3.6	10.8	11.7
	40～49歳	100.0 (124)	52.4	22.6	17.7	12.9	2.4	9.7	11.3
	50～59歳	100.0 (95)	37.9	24.2	27.4	8.4	4.2	9.5	11.6
	60～69歳	100.0 (85)	45.9	25.9	16.5	12.9	7.1	15.3	5.9
	70～79歳	100.0 (50)	30.0	32.0	12.0	12.0	12.0	16.0	18.0
	80歳以上	100.0 (18)	27.8	22.2	11.1	16.7	11.1	11.1	16.7
	65歳以上 (再掲)	100.0 (105)	34.3	25.7	13.3	11.4	10.5	17.1	14.3

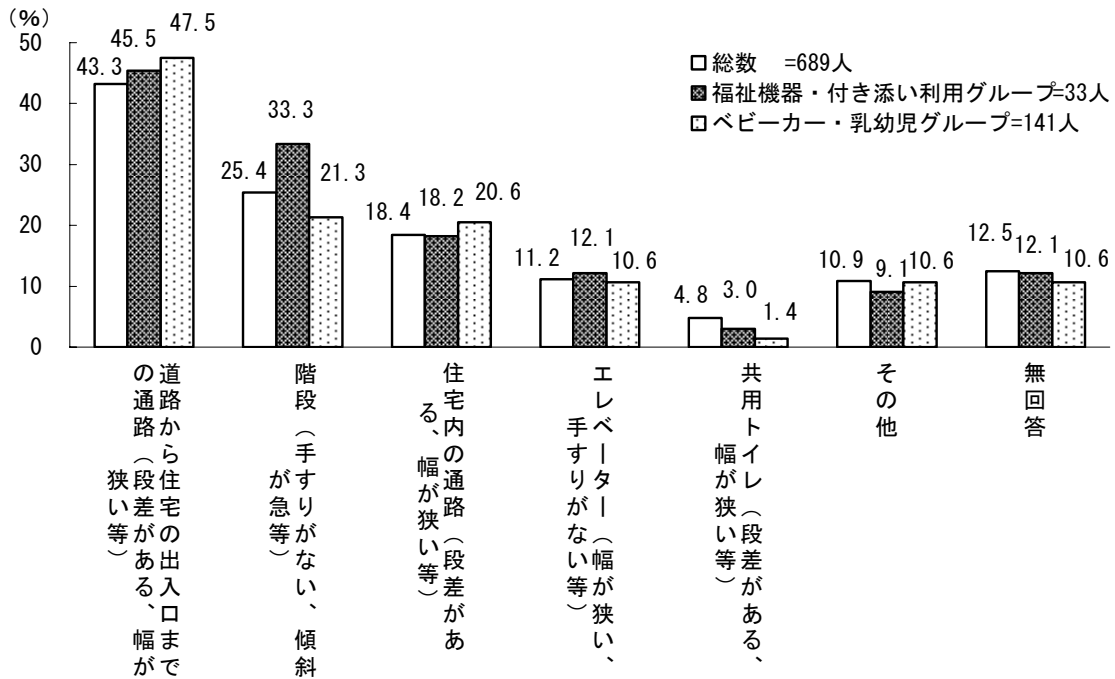
(注) 本調査では、共同住宅の共用部分のバリアの箇所として、「共用のお風呂、洗面所(手すりがない、段差がある、狭い等)」を選択肢に含め聞いたが、現在の共同住宅の設備の実態を考慮し、結果数値は掲載していない。

外出時の状況（グループ比較）別にみると、福祉機器・付き添い利用グループでは、「階段」が総数に比べて7.9ポイント高くなっている。ベビーカー・乳幼児グループでは「道路から住宅の出入り口までの通路」が総数と比べて4.2ポイント高くなっている。

(図 2-6)

図 2-6 共同住宅の共用部分のバリアの箇所（2 つ以内の複数回答）

－外出時の状況（グループ比較）別



(注 1) 本調査では、共同住宅の共用部分のバリアの箇所として、「共用のお風呂、洗面所（手すりがない、段差がある、狭い等）」を選択肢に含め聞いたが、現在の共同住宅の設備の実態を考慮し、結果数値は掲載していない。

(注 2) 福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表 1-5 のそれぞれのグループ総数のうち、現在、共同住宅に住んでいて、その住宅で日常生活をする上でバリアがあると答えた人の人数である。

住宅の種類別にみると、「道路から住宅の通路出入り口までの通路」、「階段」の割合は、ほぼすべての住宅の種類で上位を占めている。「道路から住宅の通路出入り口までの通路」では、借家（民間アパート・マンション）の割合が50.4%と最も高くなっている。

（表 2-6）

表 2-6 共同住宅の共用部分のバリアの箇所（2 つ以内の複数回答）－住宅の種類別

	総 数	道 路 か ら 住 宅 の 出 入 り 口 ま で の 通 路  ( 段 差 が あ る 、 幅 が 狭 い 等 )	階 段  ( 手 す り が な い 、 傾 斜 が 急 等 )	住 宅 内 の 通 路  ( 段 差 が あ る 、 幅 が 狭 い 等 )	エ レ ベ ー タ ー  ( 幅 が 狭 い 、 手 す り が な い 等 )	共 用 ト イ レ  ( 段 差 が あ る 、 幅 が 狭 い 等 )	そ の 他	無 回 答
総数	100.0 (689)	43.3	25.4	18.4	11.2	4.8	10.9	12.5
持家 (分譲マンション等)	100.0 (229)	42.8	18.8	17.0	15.3	1.3	13.1	17.9
借家 (公団・公営住宅)	100.0 (116)	33.6	21.6	15.5	12.1	12.9	14.7	9.5
借家 (民間アパート・マンション)	100.0 (260)	50.4	33.5	20.0	7.7	5.0	7.7	8.5
間借り	100.0 (6)	16.7	33.3	33.3	16.7	—	—	33.3
社宅など給与住宅	100.0 (78)	37.2	23.1	20.5	9.0	2.6	10.3	12.8

(注) 本調査では、共同住宅の共用部分のバリアの箇所として、「共用のお風呂、洗面所（手すりがない、段差がある、狭い等）」を選択肢に含め聞いたが、現在の共同住宅の設備の実態を考慮し、結果数値は掲載していない。

## (2) 日常よく出かけるところに着くまでのバリア（障壁）

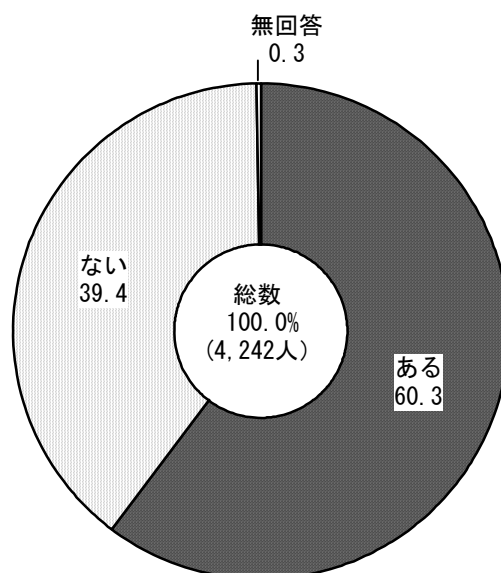
外出時の移動の際に、6割の人がバリアを感じている。  
子育てをしている世代では、特に割合が高くなっている。

### ① 日常よく出かけるところに着くまでのバリア（障壁）の有無

日常よく出かけるところ（職場、学校、買い物先など）に着くまでに、道路や駅、交通機関（電車やバス等）などでバリア（障壁）になっているところはあるか聞いたところ、「ある」と感じている人は60.3%、「ない」と感じている人は39.4%となっている。

（図 2-7）

図 2-7 日常よく出かけるところに着くまでのバリアの有無



性別にみると、バリア（障壁）が「ある」と感じている人は、男性 55.3%、女性 64.4%であり、女性の割合の方が高くなっている。

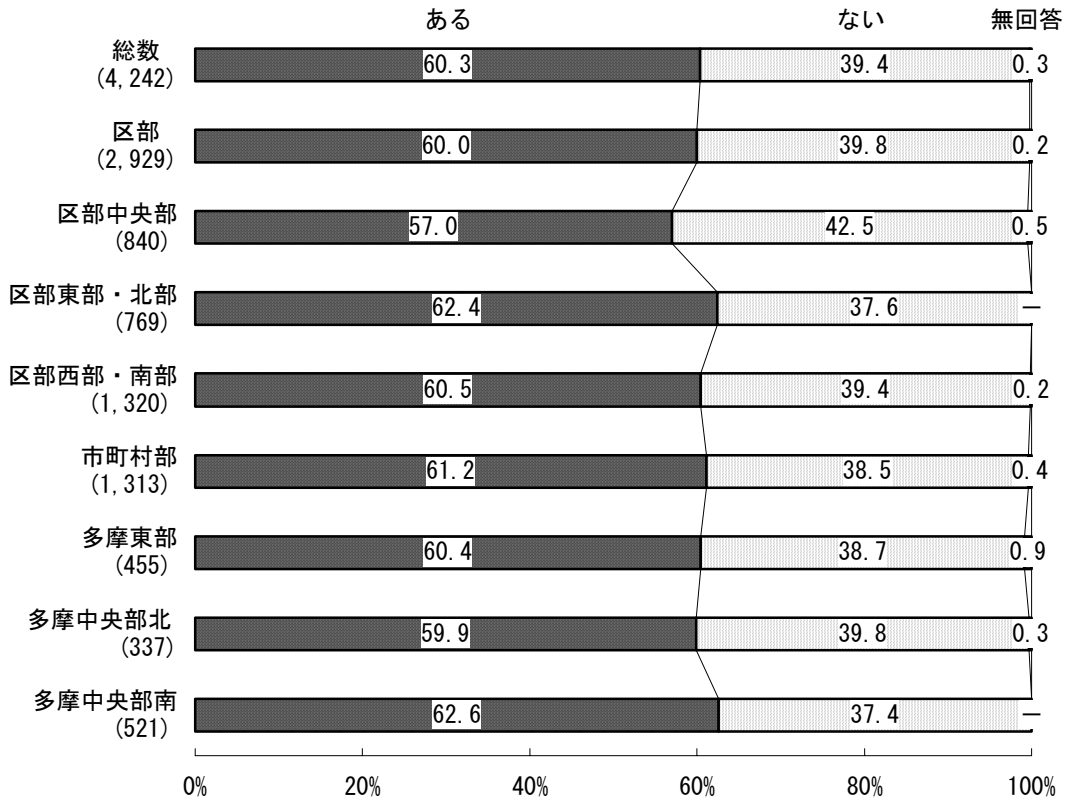
年齢階級別にみると、男性の 30～39 歳 60.2%、女性の 40～49 歳 74.3%、30～39 歳 72.2%と、男女ともに子育てをしている人が多いと思われる世代での割合が高くなっている。一方、65 歳以上をみると、男性が 50.1%、女性が 50.7%と比較的低い割合となっている。（表 2-7）

表 2-7 日常よく出かけるところに着くまでのバリアの有無一性・年齢階級別

	総数	ある	ない	無回答
総数	100.0 (4,242)	60.3	39.4	0.3
男 総数	100.0 (1,892)	55.3	44.4	0.3
男 18～29歳	100.0 (276)	52.5	47.1	0.4
男 30～39歳	100.0 (384)	60.2	39.8	—
男 40～49歳	100.0 (301)	56.5	43.5	—
男 50～59歳	100.0 (316)	56.0	43.7	0.3
男 60～69歳	100.0 (330)	54.2	45.8	—
男 70～79歳	100.0 (228)	49.6	49.1	1.3
男 80歳以上	100.0 (57)	56.1	43.9	—
男 65歳以上 (再掲)	100.0 (429)	50.1	49.2	0.7
女 総数	100.0 (2,350)	64.4	35.4	0.3
女 18～29歳	100.0 (314)	65.6	34.1	0.3
女 30～39歳	100.0 (511)	72.2	27.8	—
女 40～49歳	100.0 (381)	74.3	25.7	—
女 50～59歳	100.0 (391)	64.2	35.3	0.5
女 60～69歳	100.0 (369)	56.9	42.8	0.3
女 70～79歳	100.0 (277)	49.1	50.9	—
女 80歳以上	100.0 (107)	54.2	43.9	1.9
女 65歳以上 (再掲)	100.0 (562)	50.7	48.9	0.4

地域別にみると、バリア（障壁）が「ある」と感じている人の割合は、区部 60.0%、と市町村部 61.2%では大きな差はみられないが、それぞれの地域（エリア）別にみると、多摩中央部南が 62.6%と最も多く、区部中央部が 57.0%と最も少ないなどの違いがみられる。（図 2-8）

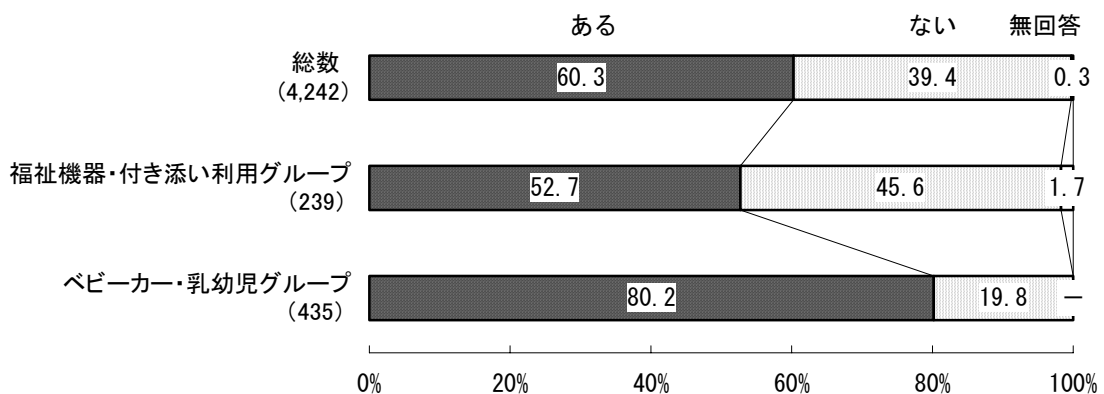
図 2-8 日常よく出かけるところに着くまでのバリアの有無－地域別



外出時の状況（グループ比較）別にみると、バリア（障壁）が「ある」と感じている人の割合は、ベビーカー・乳幼児グループが 80.2%と、総数よりも 19.9 ポイント高くなっている。（図 2-9）

図 2-9 日常よく出かけるところに着くまでのバリアの有無

－外出時の状況（グループ比較）別



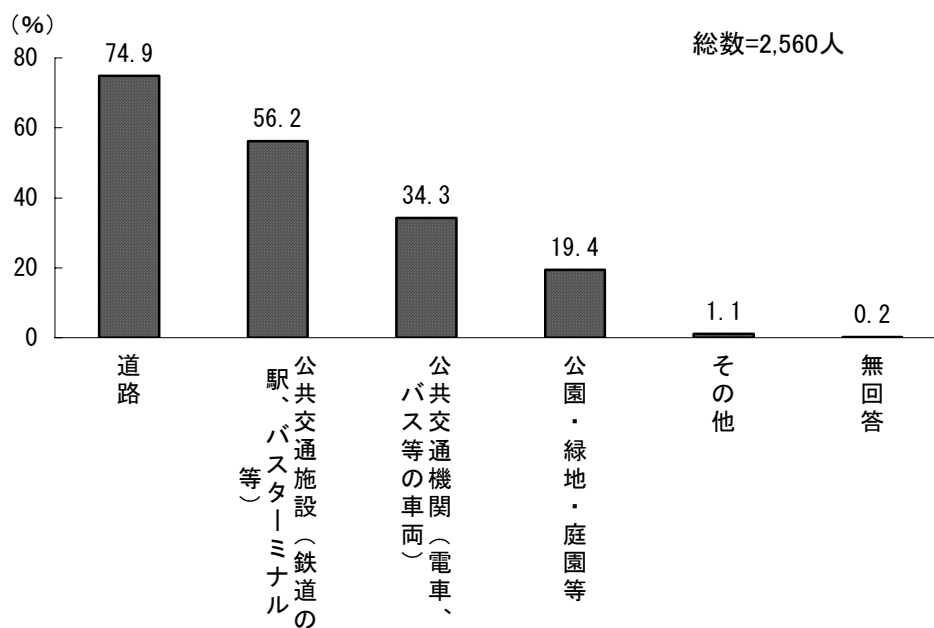
（注）福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表 1-5 を参照。



## ② 日常よく出かけるところに着くまでのバリア（障壁）の箇所

日常よく出かけるところに着くまでに、バリア（障壁）があると答えた人に、そのバリアの箇所を聞いたところ、「道路」が74.9%と最も多く、次いで、「公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）」56.2%、「公共交通機関（電車、バス等の車両）」34.3%となっている。（図2-10）

図2-10 日常よく出かけるところに着くまでのバリアの箇所（複数回答）



性・年齢階級別にみると、すべての性・年齢階級で、項目の順位は同じになっている。

「道路」については、男性では50～59歳81.4%と、80歳以上78.1%で多くなっており、女性では50～59歳80.5%、60～69歳79.5%、40～49歳78.4%で、それぞれ8割前後と多くなっている。(表2-8)

表2-8 日常よく出かけるところに着くまでのバリアの箇所(複数回答)

—性・年齢階級別

	総数	道路	ルの公 等) 駅、交 バ通施 ス施設 タ―(鉄 ミナ道	車、公 バ交 ス通機 等関 の車(電	公園・ 緑地・ 庭園等	その他	無回答
総数	100.0 (2,560)	74.9	56.2	34.3	19.4	1.1	0.2
男 総数	100.0 (1,047)	74.0	55.7	31.2	21.0	1.1	0.3
男 18～29歳	100.0 (145)	73.1	54.5	29.7	15.9	1.4	1.4
男 30～39歳	100.0 (231)	69.7	64.5	32.5	21.2	1.7	—
男 40～49歳	100.0 (170)	73.5	50.6	29.4	24.7	1.8	—
男 50～59歳	100.0 (177)	81.4	57.6	34.5	22.6	1.1	—
男 60～69歳	100.0 (179)	75.4	56.4	32.4	23.5	0.6	—
男 70～79歳	100.0 (113)	69.9	45.1	29.2	17.7	—	0.9
男 80歳以上	100.0 (32)	78.1	46.9	21.9	12.5	—	—
男 65歳以上 (再掲)	100.0 (215)	73.0	49.3	29.3	19.5	—	0.5
女 総数	100.0 (1,513)	75.5	56.5	36.4	18.2	1.1	0.1
女 18～29歳	100.0 (206)	69.4	62.1	39.8	13.1	—	—
女 30～39歳	100.0 (369)	73.2	58.3	39.6	23.0	1.1	—
女 40～49歳	100.0 (283)	78.4	54.8	32.9	15.2	1.4	—
女 50～59歳	100.0 (251)	80.5	58.6	36.3	16.3	1.6	—
女 60～69歳	100.0 (210)	79.5	48.1	32.9	21.0	1.9	—
女 70～79歳	100.0 (136)	74.3	63.2	38.2	19.9	—	—
女 80歳以上	100.0 (58)	65.5	39.7	31.0	15.5	1.7	1.7
女 65歳以上 (再掲)	100.0 (285)	74.7	51.9	34.4	20.4	0.4	0.4

地域別に見ると、すべての地域で、項目の順位は同じになっている。

「道路」では、区部 72.4%よりも、市町村部 80.4%の割合の方が高くなっている。これに対し、「公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）」では区部 59.5%、市町村部 48.9%、「公共交通機関（電車、バス等の車両）」では区部 35.3%、市町村部 32.1%と、それぞれ区部の割合の方が高くなっている。（表 2-9）

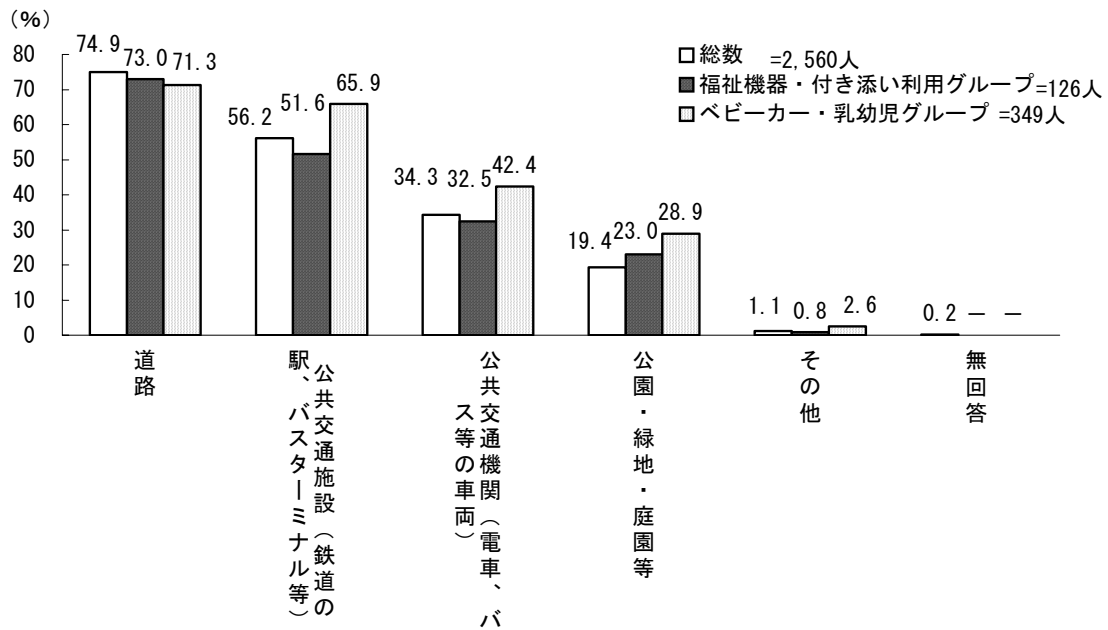
表 2-9 日常よく出かけるところに着くまでのバリアの箇所（複数回答）－地域別

	総 数	道 路	の公 共交 通施 設 （鉄 道 の 駅 、 バ ス タ ー ミ ナ ル 等 ）	車、公 共交 通機 関 の 車 両 （ 電 車 、 バ ス 等 ）	公 園 ・ 緑 地 ・ 庭 園 等	そ の 他	無 回 答
総数	100.0 (2,560)	74.9	56.2	34.3	19.4	1.1	0.2
区部	100.0 (1,757)	72.4	59.5	35.3	19.4	1.2	0.2
区部中央部	100.0 (479)	72.4	60.1	36.5	21.1	1.0	0.2
区部東部・北部	100.0 (480)	76.5	57.9	36.5	22.7	1.0	—
区部西部・南部	100.0 (798)	69.9	60.0	33.8	16.3	1.4	0.3
市町村部	100.0 (803)	80.4	48.9	32.1	19.4	1.0	0.1
多摩東部	100.0 (275)	80.0	48.7	32.7	20.4	1.8	—
多摩中央部北	100.0 (202)	81.2	44.6	33.2	17.8	1.5	0.5
多摩中央部南	100.0 (326)	80.4	51.8	31.0	19.6	—	—

外出時の状況（グループ比較）別にみると、ベビーカー・乳幼児グループでは、総数と比べて、「公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）」は、9.7ポイント、「公園・緑地・園庭等」は9.5ポイント、「公共交通機関（電車、バス等の車両）」は8.1ポイント高くなっている。（図2-11）

図2-11 日常よく出かけるところに着くまでのバリアの箇所（複数回答）

－外出時の状況（グループ比較）別



（注）福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表1-5のそれぞれのグループ総数のうち、日常よく出かけるところに着くまでに、バリアがあると答えた人の人数である。

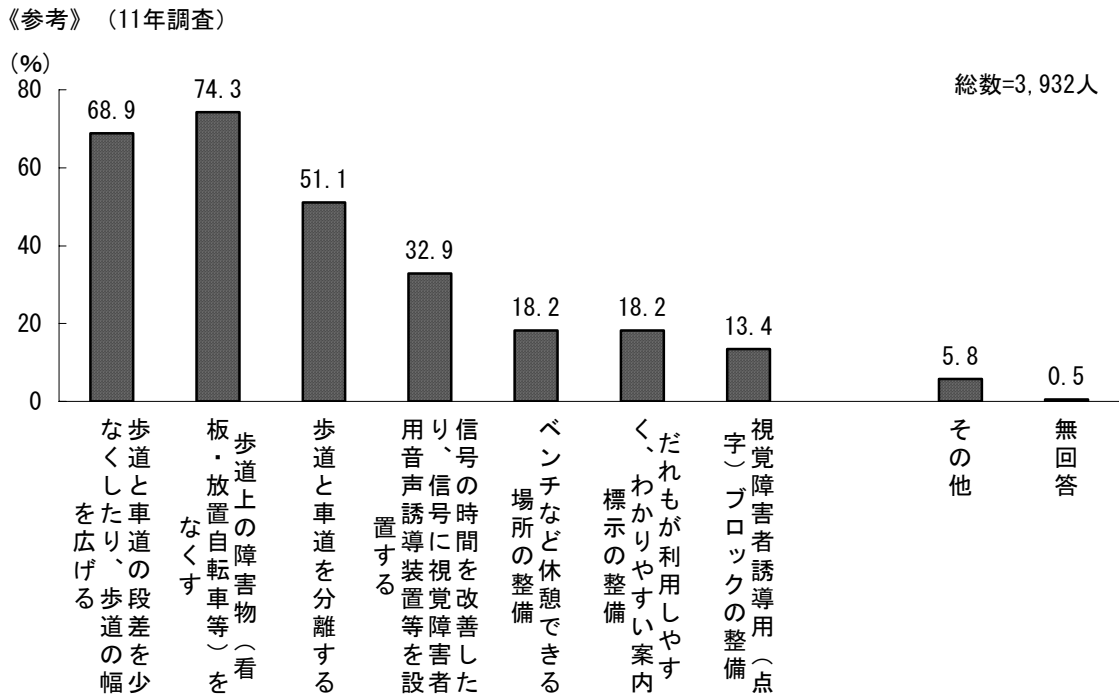
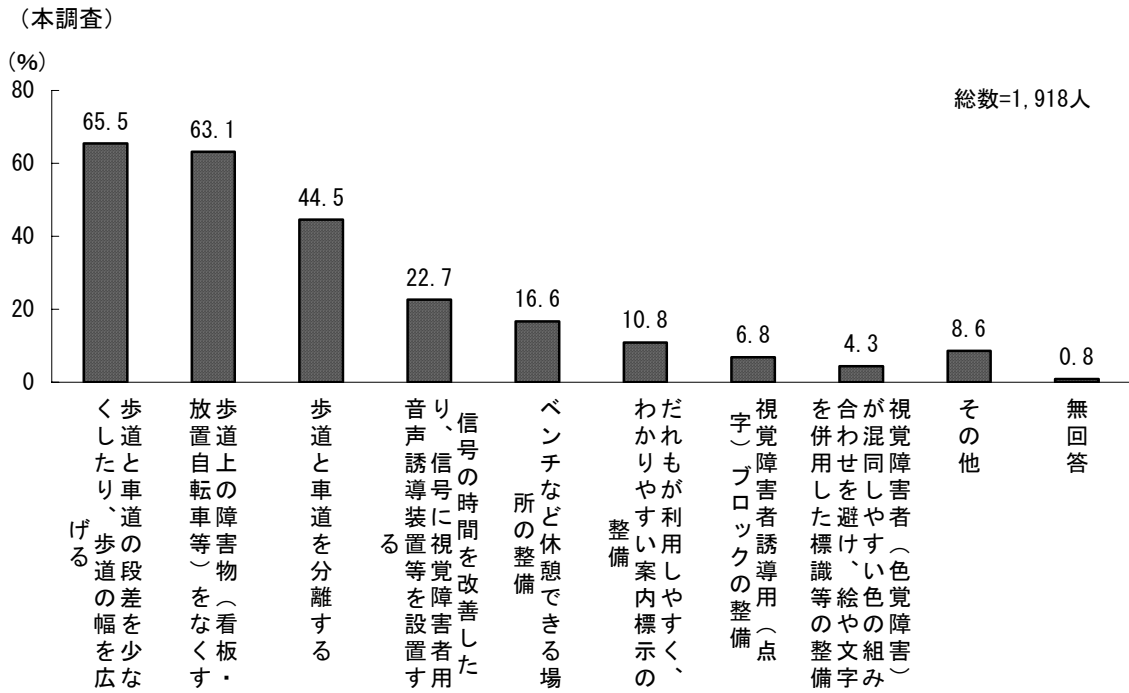
### ③ 道路で整備が必要なこと

道路にバリア（障壁）があると答えた人に、高齢者・障害のある方・妊産婦・乳幼児を連れた方などが、道路を利用しやすくするために、どのような整備が必要か聞いたところ、「歩道と車道の段差を少なくしたり、歩道の幅を広げる」65.5%、「歩道上の障害物（看板・放置自転車等）をなくす」63.1%がともに6割以上と多く、次いで「歩道と車道を分離する」44.5%となっている。

「その他」としては、「歩道を走行する自転車のマナーの徹底」、「歩道内の舗装を整える」などが多くあった。

11年調査と比較すると、1位と2位の項目が入れ替わった以外は、同様の順位となっている。（図 2-12）

図 2-12 道路で整備が必要なこと（3 つ以内の複数回答）－11 年調査との比較



(注 1) 11 年調査では、「視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した標識等の整備」は未調査である。

(注 2) 11 年調査では、調査対象者全員に回答を求めている。

年齢階級別でみると、50～59歳と60～69歳では「歩道上の障害物（看板・放置自転車等）をなくす」が最も多く、その他の年齢階級では「歩道と車道の段差を少なくしたり、歩道の幅を広げる」が最も多くなっている。（表2-10）

表2-10 道路で整備が必要なこと（3つ以内の複数回答）－性、年齢階級別

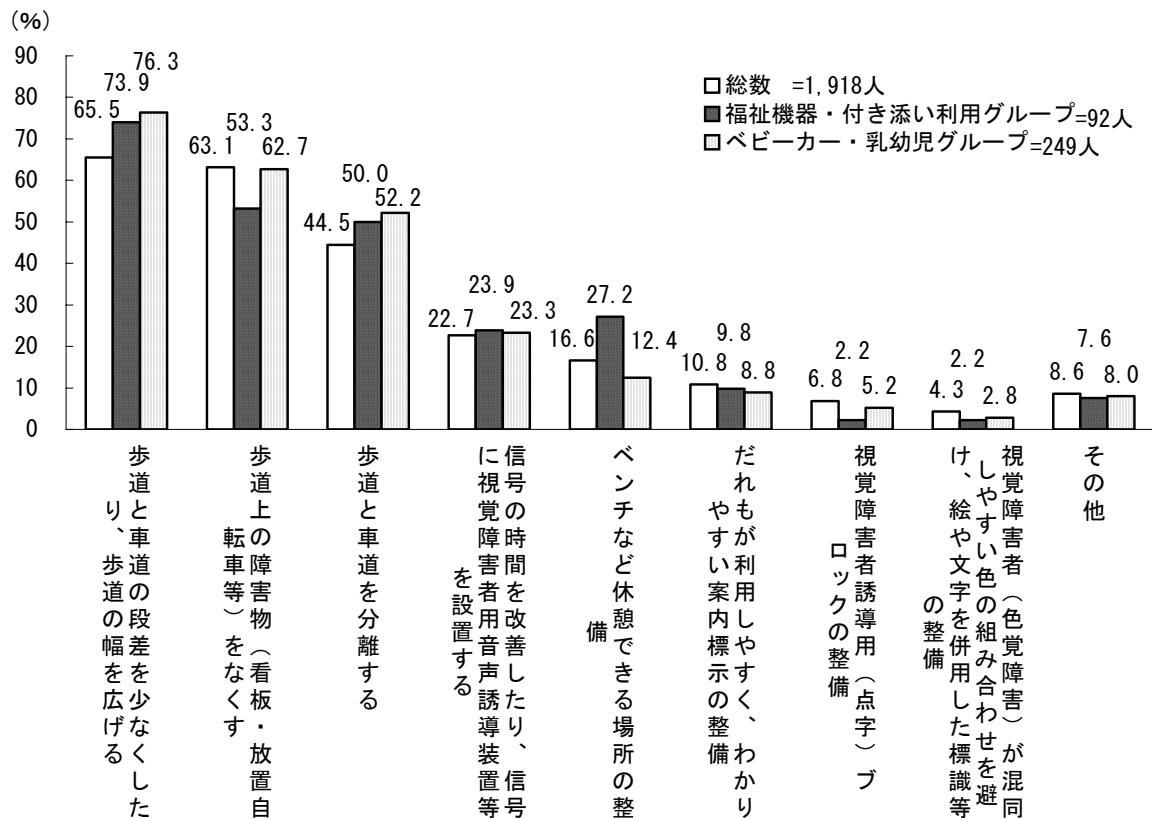
	総数	歩道と車道の幅を広げる	歩道上の障害物（看板・放置自転車等）をなくす	歩道と車道を分離する	視覚障害者用音声誘導装置等を設置する	信号の時間を改善したり、信号にベンチなど休憩できる場所の整備	すだれもが利用しやすく、わかりやすい案内標示の整備	視覚障害者誘導用（点字）ブロッ	やさしい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した標識等の整備	視覚障害者（色覚障害）が混同し	その他	無回答
総数	100.0 (1,918)	65.5	63.1	44.5	22.7	16.6	10.8	6.8	4.3	8.6	0.8	
性別	男	100.0 (775)	61.9	60.6	46.7	21.2	16.4	13.4	6.6	3.9	9.0	1.0
	女	100.0 (1,143)	67.9	64.8	43.0	23.8	16.7	9.1	7.0	4.5	8.2	0.6
年齢階級別	18～29歳	100.0 (249)	64.3	57.8	48.6	30.1	20.1	9.2	7.2	4.0	7.2	—
	30～39歳	100.0 (431)	70.8	60.1	46.9	23.9	12.8	9.5	9.0	3.5	8.6	0.5
	40～49歳	100.0 (347)	69.2	68.3	43.2	19.3	16.7	8.9	7.2	4.0	8.1	0.6
	50～59歳	100.0 (346)	60.7	68.2	42.8	22.8	15.6	13.0	7.8	8.1	7.5	1.4
	60～69歳	100.0 (302)	60.3	63.9	44.7	18.2	15.2	17.5	5.0	4.0	8.6	1.3
	70～79歳	100.0 (180)	64.4	60.0	40.0	22.2	22.8	5.6	3.9	1.7	10.6	0.6
	80歳以上	100.0 (63)	68.3	54.0	39.7	27.0	22.2	7.9	—	—	15.9	1.6
	65歳以上 (再掲)	100.0 (370)	63.0	61.1	43.2	20.8	20.0	9.5	3.8	2.2	9.5	0.8

外出時の状況（グループ比較）別にみると、福祉機器・付き添い利用グループでは、「歩道と車道の段差を少なくしたり、歩道の幅を広げる」、「ベンチなど休憩できる場所の整備」で、総数に比べてそれぞれ8.4ポイント、10.6ポイント高くなっている。

ベビーカー・乳幼児グループでは、「歩道と車道の段差を少なくしたり、歩道の幅を広げる」で、総数に比べて10.8ポイント高くなっている。（図 2-13）

図 2-13 道路で整備が必要なこと（3つ以内の複数回答）

－外出時の状況（グループ比較）別



（注）福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表1-5のそれぞれのグループ総数のうち、道路にバリアがあると答えた人の人数である。



#### ④ 公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）で整備が必要なこと

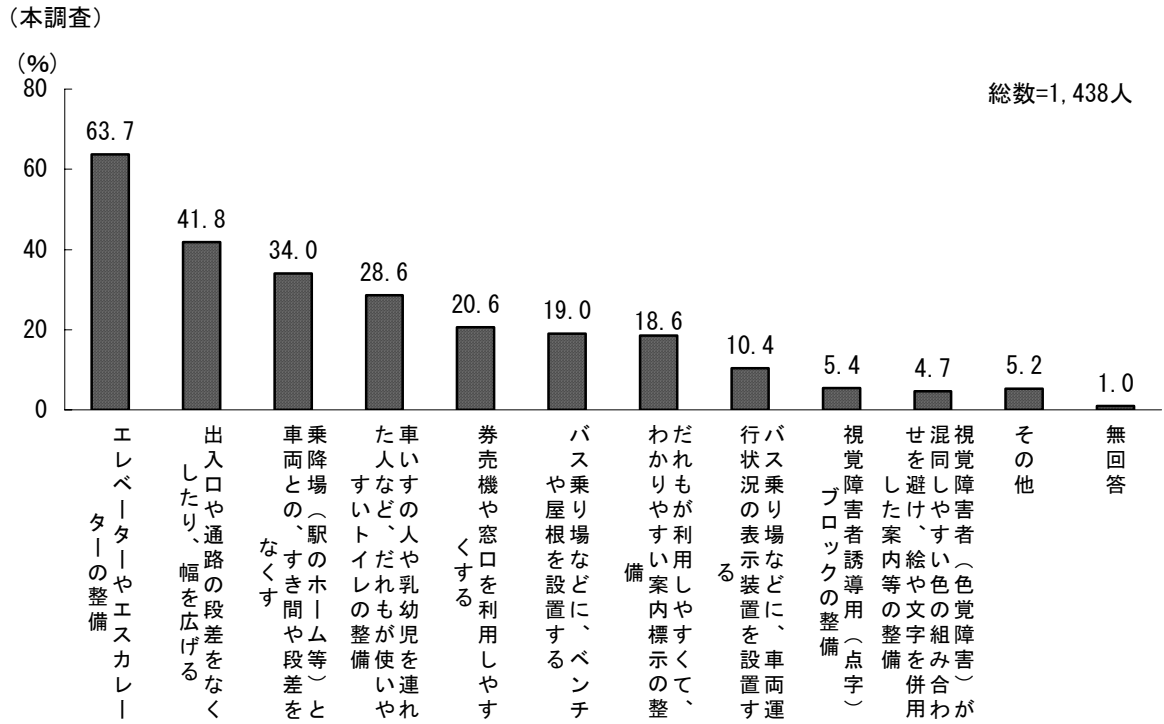
公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）にバリア（障壁）があると答えた人に、高齢者・障害のある方・妊産婦・乳幼児を連れた方などが、公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）を利用しやすくするために、どのような整備が必要か聞いた。

「エレベーターやエスカレーターの整備」63.7%が最も多く、次いで「出入口や通路の段差をなくしたり、幅を広げる」41.8%、「乗降場（駅のホーム等）との車両との、すき間や段差をなくす」34.0%となっている。

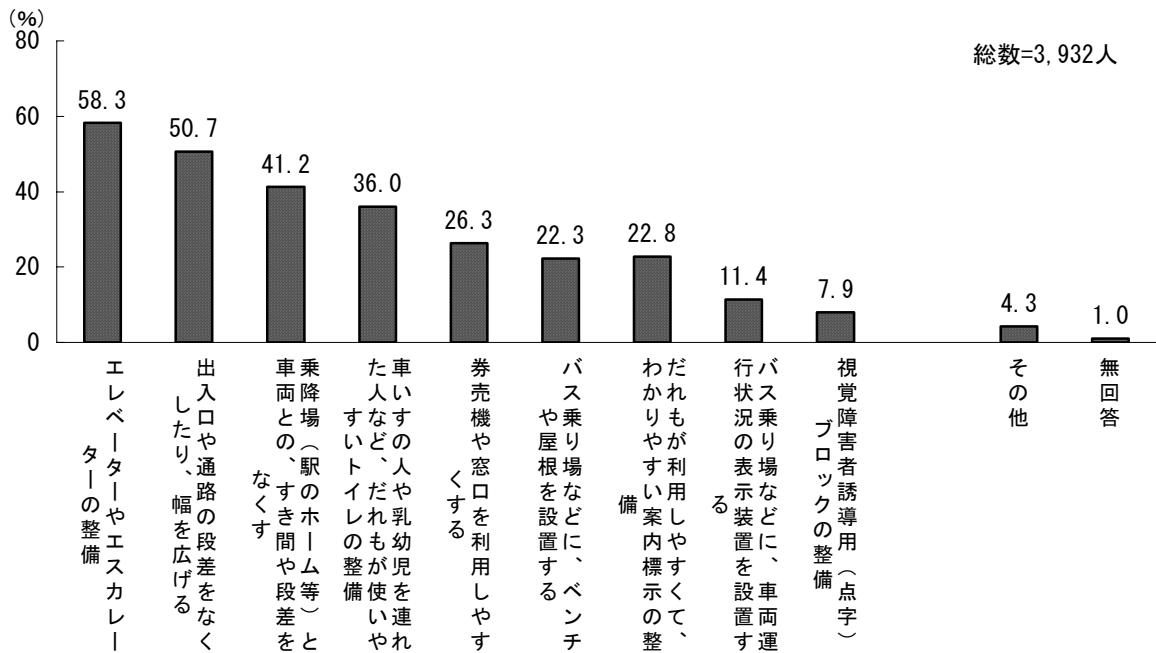
11年調査と比較すると、順位はほぼ同様となっているが、「エレベーターやエスカレーターの整備」が他の項目に比べて特に多くなっている。（図2-14）

図 2-14 公共交通施設（鉄道駅の駅、バスターミナル等）で整備が必要なこと

（3つ以内の複数回答）－11年調査との比較



《参考》（11年調査）



(注1) 11年調査では、「視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した案内等の整備」は未調査である。

(注2) 11年調査では、調査対象者全員に回答を求めている。

年齢階級別にみると、すべての年齢階級で、「エレベーターやエスカレーターの整備」の割合が特に多くなっている。

30～39歳では、「エレベーターやエスカレーターの整備」72.0%、「出入口や通路の段差をなくしたり、幅を広げる」48.1%、「車いすの人や乳幼児を連れた人など、だれもが使いやすいトイレの整備」35.2%が、他の年齢階級に比べそれぞれ最も多くなっている。

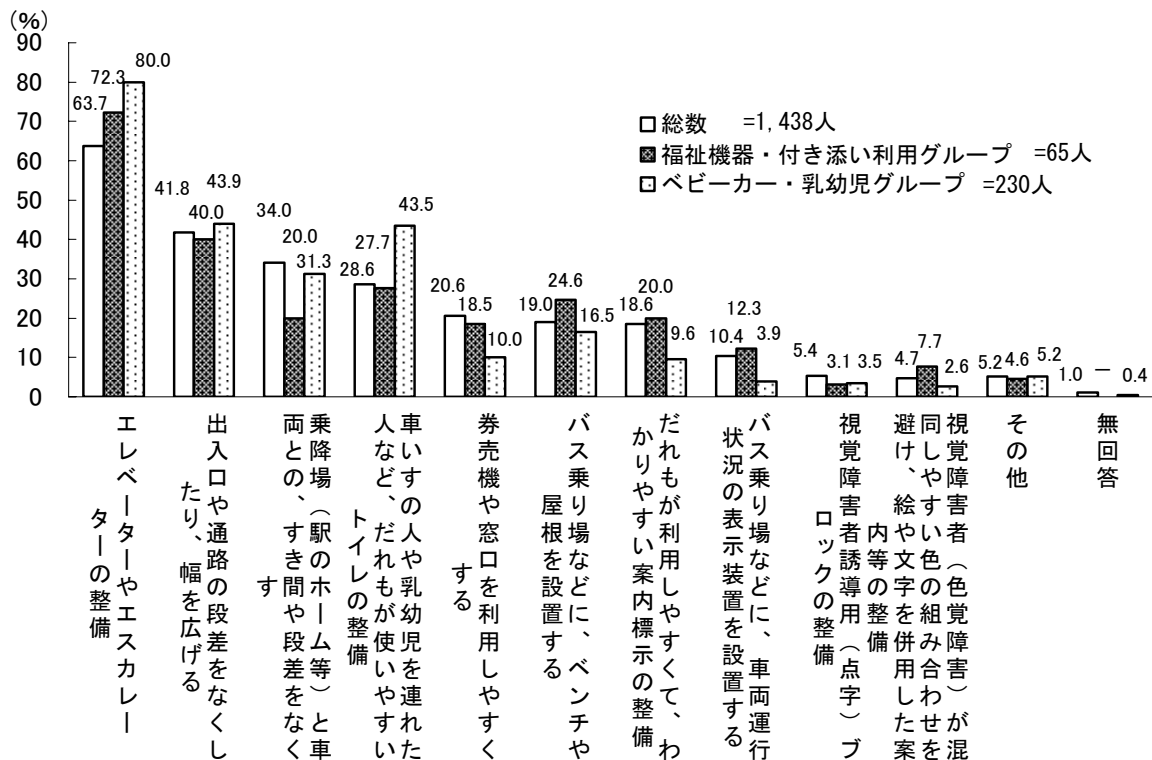
また、「乗降場（駅のホーム等）と車両との、すき間や段差をなくす」は18～29歳が44.4%と最も多い一方で、「バス乗り場などに、ベンチや屋根を設置する」と「だれもが利用しやすく、わかりやすい案内標示の整備」は、70～79歳がそれぞれ最も多くなっている等の年齢による違いがみられる。（表2-11）

表2-11 公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）で整備が必要なこと  
（3つ以内の複数回答）一性、年齢階級別

	総数	エレベーターやエスカレーターの整備	出入口や通路の段差をなくしたり、幅を広げる	乗降場（駅のホーム等）と車両との、すき間や段差をなくす	車いすの人や乳幼児を連れた人など、だれもが使いやすいトイレの整備	券売機や窓口を利用しやすくする	バス乗り場などに、ベンチや屋根を設置する	だれもが利用しやすく、わかりやすい案内標示の整備	バス乗り場などに、車両運行状況の表示装置を設置する	視覚障害者誘導用（点字）ブロックの整備	視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した案内等の整備	その他	無回答
総数	100.0 (1,438)	63.7	41.8	34.0	28.6	20.6	19.0	18.6	10.4	5.4	4.7	5.2	1.0
性別	男	100.0 (583)	60.7	39.3	30.4	26.9	21.1	18.4	21.6	12.2	5.1	6.0	1.0
	女	100.0 (855)	65.7	43.5	36.5	29.7	20.2	19.4	16.5	9.1	5.5	4.7	1.1
年齢階級別	18～29歳	100.0 (207)	63.3	40.6	44.4	31.9	22.2	18.8	16.4	9.2	1.9	2.9	0.5
	30～39歳	100.0 (364)	72.0	48.1	35.7	35.2	16.5	11.8	11.0	7.1	4.7	6.3	0.8
	40～49歳	100.0 (241)	61.8	42.3	33.2	27.4	22.4	20.3	18.7	12.0	7.5	6.6	0.8
	50～59歳	100.0 (249)	59.0	40.6	34.1	28.9	22.1	23.3	22.5	11.6	8.0	3.6	1.6
	60～69歳	100.0 (202)	54.5	36.6	28.2	27.7	24.8	19.8	25.7	14.4	6.4	4.0	2.0
	70～79歳	100.0 (137)	66.4	35.8	23.4	14.6	17.5	27.0	26.3	10.9	3.6	7.3	0.7
	80歳以上	100.0 (38)	68.4	42.1	34.2	7.9	18.4	18.4	10.5	5.3	—	7.9	—
65歳以上 （再掲）	100.0 (254)	62.6	35.0	26.4	20.1	19.7	23.2	25.2	13.0	3.9	5.9	1.2	

外出時の状況（グループ比較）別にみると、「エレベーターやエスカレーターの整備」では、福祉機器・付き添い利用グループが総数と比べて8.6ポイント、ベビーカー・乳幼児グループが16.3ポイント高くなっている。また、「車いすの人や乳幼児を連れた人などだれもが使いやすいトイレの整備」では、ベビーカー・乳幼児グループが総数と比べて、14.9ポイント高くなっている。（図2-15）

図2-15 公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）で整備が必要なこと  
（3つ以内の複数回答）－外出時の状況（グループ比較）別



（注）福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表1-5のそれぞれのグループ総数のうち、公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）にバリアがあると答えた人の人数である。

**⑤ 公共交通機関（電車・バス等の車両）で整備が必要なこと**

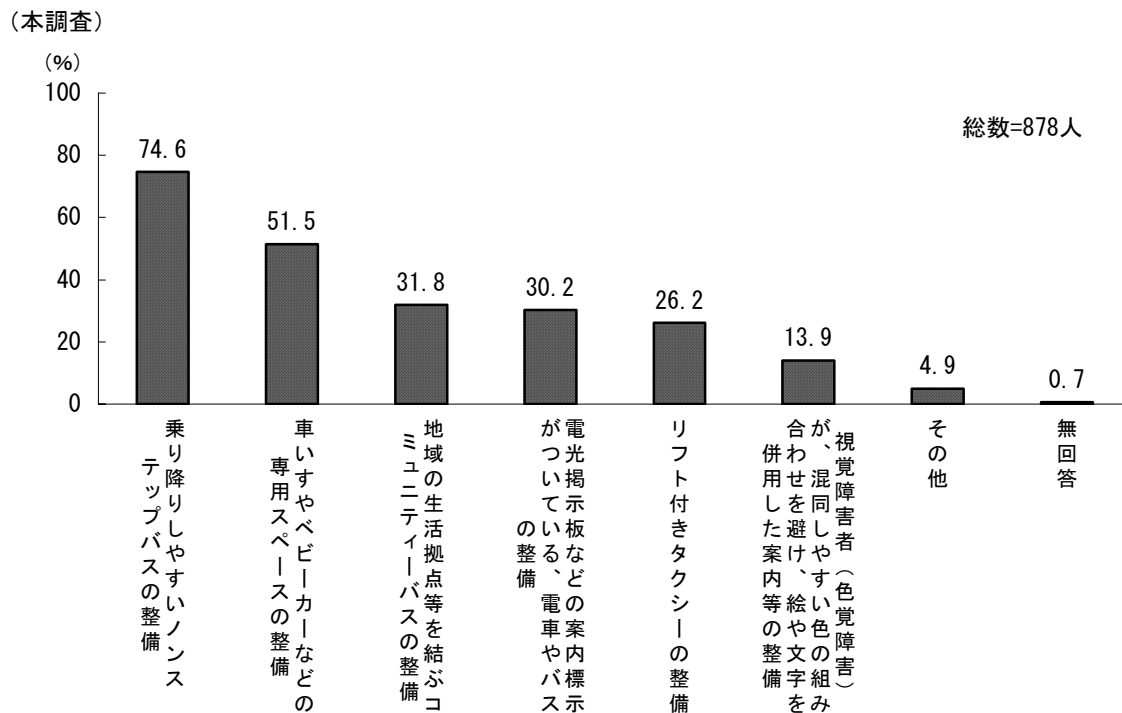
公共交通機関（電車・バス等の車両）にバリア（障壁）があると答えた人に、高齢者・障害のある方・妊産婦・乳幼児を連れた方などが、公共交通機関（電車・バス等の車両）を利用しやすくするために、どのような整備が必要か聞いた。

「乗り降りしやすいノンステップバスの整備」74.6%が最も多く、次いで「車いすやベビーカーなどの専用スペースの整備」51.5%となっている。

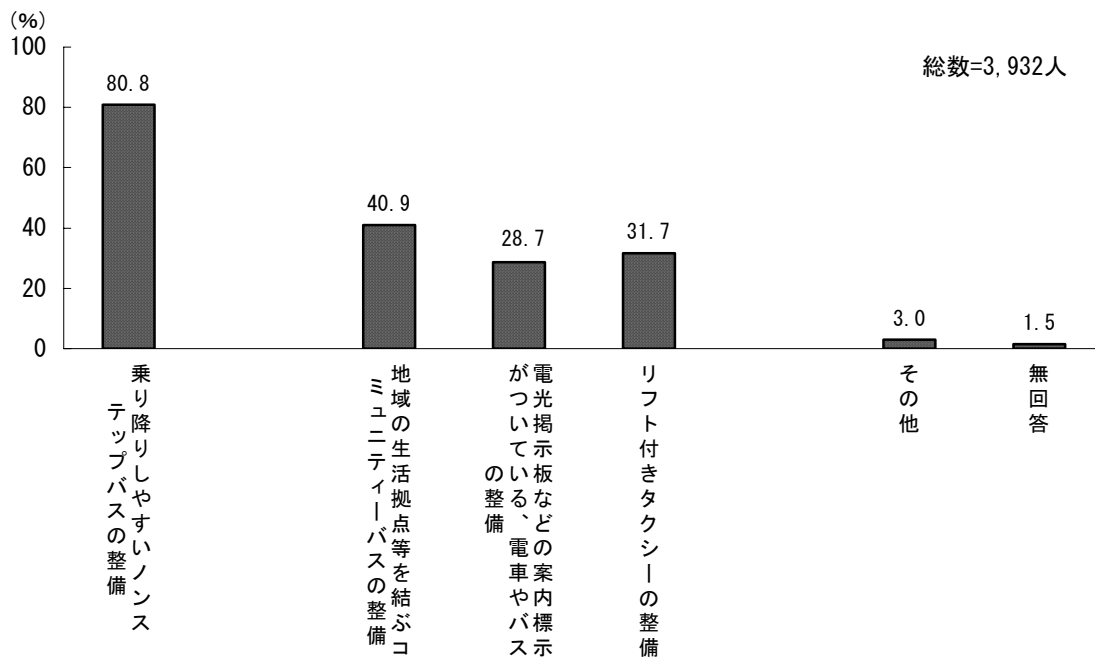
11年調査と同様に、「乗り降りしやすいノンステップバスの整備」が特に多くなっている。（図 2-16）

図 2-16 公共交通機関（電車・バス等の車両）で整備が必要なこと

（3 つ以内の複数回答）－11 年調査との比較



《参考》（11年調査）



（注 1） 11 年調査では、「車いすやベビーカーなどの専用スペースの整備」「視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した案内等の整備」は未調査である。

（注 2） 11 年調査では、調査対象者全員に 2 つ以内の複数回答として回答を求めている。

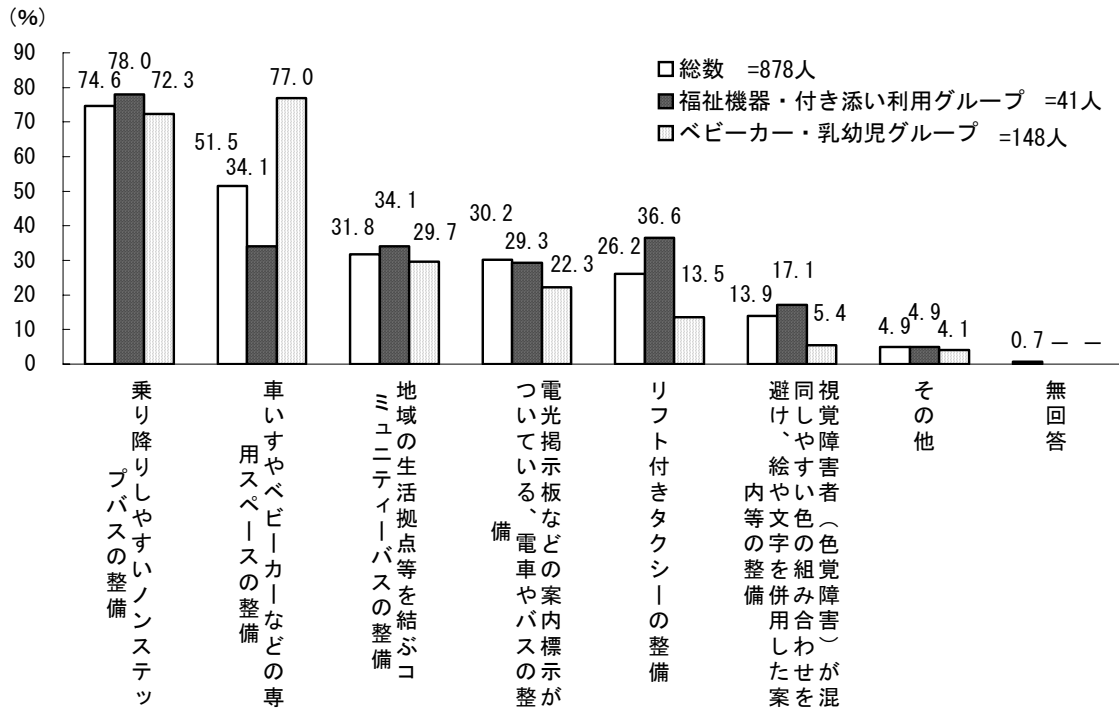
年齢階級別でみると、すべての年齢階級で、「乗り降りしやすいノンステップバスの整備」の割合が最も高くなっている。「車いすやベビーカーなどの専用スペースの整備」は、30～39歳 63.8%、18～29歳 60.0%の割合が高くなっている一方で、60歳以上では低い割合となっている。「電光掲示板などの案内標示がついている、電車やバスの整備」は、60～69歳が 41.7%と、最も高い割合となっている。(表 2-12)

表 2-12 公共交通機関（電車・バス等の車両）で整備が必要なこと  
(3つ以内の複数回答) 一性、年齢階級別

	総数	乗降しやすいノンステップバスの整備	車いすやベビーカーなどの専用スペースの整備	地域の生活拠点等を結ぶコミュニティバスなどの整備	電光掲示板などの案内標示がついている、電車やバスの整備	リフト付きタクシーの整備	混雑を避け、絵や文字を併用した案内等の整備	視覚障害者（色覚障害）の混同しやすい色の組み合わせ	その他	無回答
総数	100.0 (878)	74.6	51.5	31.8	30.2	26.2	13.9	4.9	0.7	
性別	男	100.0 (327)	72.2	51.7	34.9	30.9	26.0	13.1	4.6	0.6
	女	100.0 (551)	76.0	51.4	29.9	29.8	26.3	14.3	5.1	0.7
年齢階級別	18～29歳	100.0 (125)	79.2	60.0	33.6	31.2	31.2	11.2	2.4	—
	30～39歳	100.0 (221)	72.9	63.8	28.5	27.1	19.9	10.9	5.9	1.8
	40～49歳	100.0 (143)	72.7	54.5	32.9	26.6	26.6	10.5	2.8	—
	50～59歳	100.0 (152)	77.0	50.7	34.2	28.9	28.9	21.7	5.3	—
	60～69歳	100.0 (127)	73.2	37.8	33.1	41.7	27.6	21.3	5.5	0.8
	70～79歳	100.0 (85)	78.8	34.1	30.6	29.4	28.2	10.6	5.9	1.2
	80歳以上	100.0 (25)	56.0	16.0	28.0	24.0	24.0	—	12.0	—
	65歳以上(再掲)	100.0 (161)	72.7	31.7	32.9	36.0	25.5	12.4	8.1	0.6

外出時の状況（グループ比較）別にみると、「車いすやベビーカーなどの専用スペースの整備」では、ベビーカー・乳幼児グループが総数と比べて、25.5ポイント高くなっている。「リフト付きタクシーの整備」では、福祉機器・付き添い利用グループが総数に比べて、10.4ポイント高くなっている。（図 2-17）

図 2-17 公共交通機関（電車・バス等の車両）で整備が必要なこと  
（3つ以内の複数回答）－外出時の状況（グループ比較）別



(注) 福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表1-5のそれぞれのグループ総数のうち、公共交通機関（電車・バス等の車両）にバリアがあると答えた人の人数である。



## ⑥ 公園・緑地・庭園等で整備が必要なこと

公園・緑地・庭園等にバリア（障壁）があると答えた人に、高齢者・障害のある方・妊産婦・乳幼児を連れた方などが、公園・緑地・庭園等を利用しやすくするために、どのような整備が必要か聞いた。

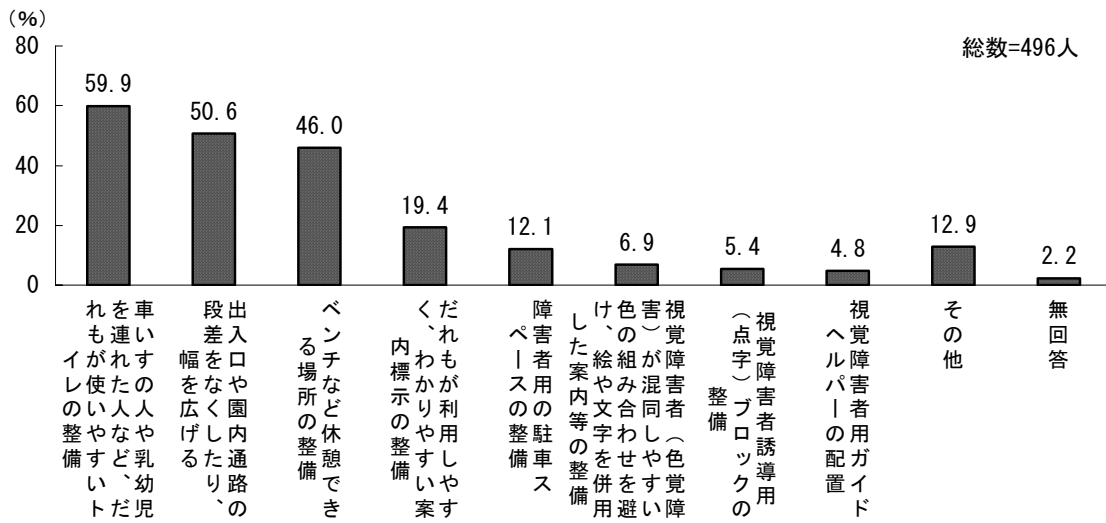
「車いすの人や乳幼児を連れた人など、だれもが使いやすいトイレの整備」59.9%が最も多く、次いで「出入口や園内通路の段差をなくしたり、幅を広げる」50.6%、「ベンチなど休憩できる場所の整備」46.0%となっている。

11年調査と同様に、上位3項目の割合が他に比べて高くなっている。（図 2-18）

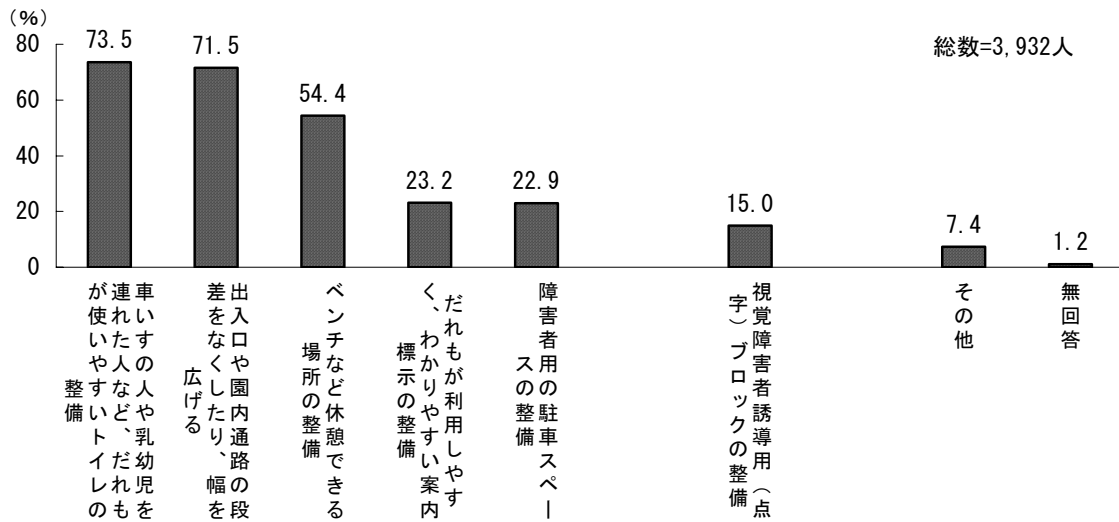
図 2-18 公園・緑地・庭園等で整備が必要なこと（3つ以内の複数回答）

－11年調査との比較

(本調査)



《参考》（11年調査）



(注1) 11年調査では、「視覚障害者（色覚障害）が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した案内等の整備」「視覚障害者用ガイドヘルパーの配置」は未調査である。

(注2) 11年調査では、調査対象者全員に回答を求めている。

性別でみると、上位3項目とも、女性の方が男性よりも割合が高くなっている。

年齢階級別でみると、「車いすの人や乳幼児を連れた人など、だれもが使いやすいトイレの整備」は、40～49歳が65.9%、30～39歳が64.2%と多くなっている。「ベンチなど休憩できる場所の整備」は、年齢が高くなるにつれて、割合が高くなる傾向がみられる。

(表 2-13)

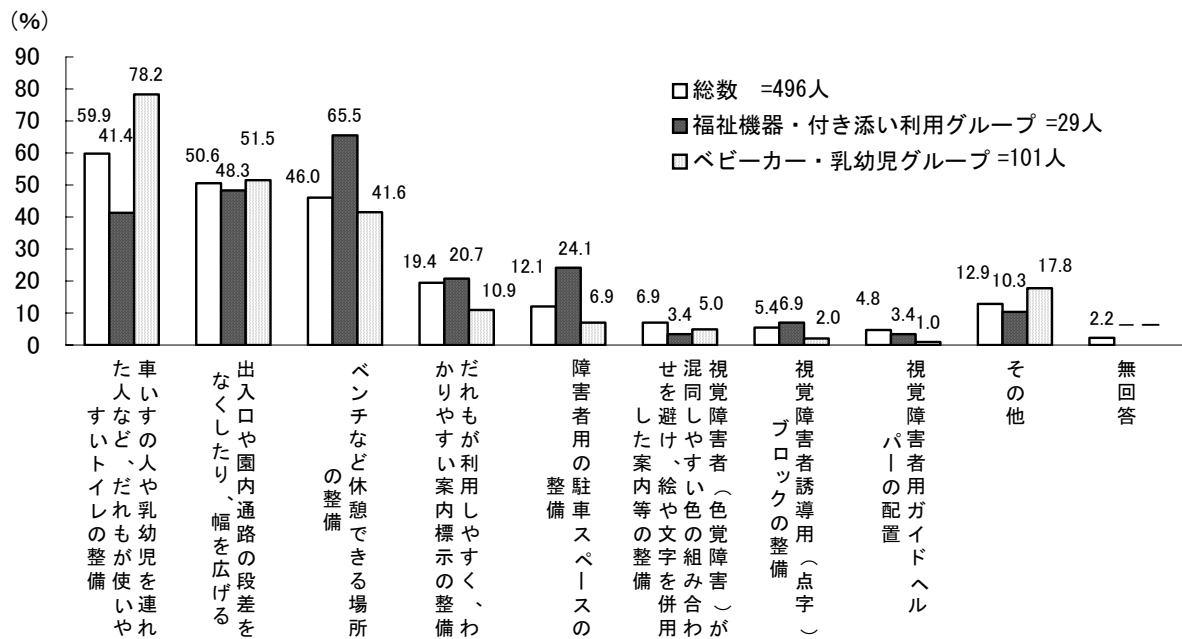
表 2-13 公園・緑地・庭園等で整備が必要なこと (3つ以内の複数回答)

—性、年齢階級別

	総 数	ど 車い すの だれ もが 使い やす い 人 の な り の 整 備	た り 入 口 や 幅 を 広 げ る の 整 備	ベ ン チ な ど 休 憩 で き る 場 所 の 整 備	す だ れ も が 利 用 し やす く 、 わ かり やす い の 整 備	障 害 者 用 の 駐 車 ス ペ ー ス の 整 備	や や や す い 色 の 組 み 合 わ せ を 避 け 、 絵 の 整 備	視 覚 障 害 者 (色 覚 障 害) が 混 同 し 、 視 覚 障 害 者 誘 導 用 (点 字) ブ ロ ツ の 整 備	置 視 覚 障 害 者 用 ガ イ ド ヘ ル パ ー の 配 置	そ の 他	無 回 答	
総 数	100.0 (496)	59.9	50.6	46.0	19.4	12.1	6.9	5.4	4.8	12.9	2.2	
性 別	男	100.0 (220)	55.0	45.0	44.5	23.6	13.2	6.8	5.9	3.6	15.5	2.7
	女	100.0 (276)	63.8	55.1	47.1	15.9	11.2	6.9	5.1	5.8	10.9	1.8
年 齢 階 級 別	18～29歳	100.0 (50)	58.0	58.0	40.0	24.0	14.0	4.0	8.0	—	10.0	2.0
	30～39歳	100.0 (134)	64.2	53.0	41.0	13.4	7.5	3.0	3.7	3.7	17.2	2.2
	40～49歳	100.0 (85)	65.9	50.6	37.6	17.6	14.1	11.8	7.1	5.9	10.6	2.4
	50～59歳	100.0 (81)	56.8	53.1	45.7	18.5	18.5	8.6	8.6	7.4	9.9	2.5
	60～69歳	100.0 (86)	58.1	45.3	52.3	22.1	11.6	11.6	3.5	5.8	14.0	3.5
	70～79歳	100.0 (47)	53.2	44.7	61.7	25.5	10.6	2.1	2.1	4.3	10.6	—
	80歳以上	100.0 (13)	38.5	38.5	76.9	38.5	7.7	—	7.7	7.7	15.4	—
	65歳以上 (再掲)	100.0 (100)	52.0	42.0	60.0	27.0	12.0	6.0	4.0	5.0	14.0	1.0

外出時の状況（グループ比較）別にみると、「車いすの人や乳幼児を連れた人など、だれもが使いやすいトイレの整備」では、ベビーカー・乳幼児グループが総数と比べて、18.3ポイント高くなっている。「ベンチなど休憩できる場所の整備」「障害者用の駐車スペースの整備」では、福祉機器・付き添い利用グループが総数に比べて、それぞれ19.5ポイント、12.0ポイント高くなっている。（図2-19）

図2-19 公園・緑地・庭園等で整備が必要なこと（3つ以内の複数回答）  
 -外出時の状況（グループ比較）別



(注) 福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表1-5のそれぞれのグループ総数のうち、公園・緑地・庭園等にバリアがあると答えた人の人数である。

日常よく出かけるところに着くまでのバリアについての主な意見は、以下のとおりであった。(自由意見欄の記述より)

## 1 道路

- 歩道の幅が狭くて、自転車で歩道を通る人が来ると、止まって待っていなければならない。バス停のところで待っている人はほとんど、狭い歩道に上がって待っているため、自転車はもちろん歩行者も通りにくい。(女性・30代)
  
- 現在自分は自転車で通勤しています。自転車通勤を始めて、なんて走りづらい道だろうと強く感じました。自分は健康で自転車に乗っているが、それでも道路の悪さを思わざるを得ない。この道路でも歩道でも、車いすなどではまったく通れないだろうと強く感じています。病院、官公庁はもちろん最優先に考えなければいけないだろうが、そこに行くまでの道路のことも優先して考えてください。(女性・50代)
  
- 歩道は段差もなくなり歩きやすくなっているが、商店街は放置自転車も多く、店も自分の店の一部のように商品を出して並べている。以前、車いすの方を押して歩いていたが、車道に出なくてはならずとても恐い思いをした。(女性・70代)
  
- 道路の整備が遅れている。歩道が狭い所に標識があり、歩行者及び自転車が通るとき支障があります。電柱も歩行者の障害になっていることもあります。下水施設がない道路は雨で水たまりがひどく、歩行が大変です。(男性・50代)
  
- まだまだ障害者の人たちが住みやすいまちになっていないような気がする。特に、点字ブロックの上に自転車などが止めてあるのをよく見かける。(男性・50代)
  
- 今年けがをして、まっば杖を使用して1ヶ月生活しましたが、改めて道路の歩きにくさを感じました。道路の凹凸や側溝側への傾斜のきつさ。また、道路補修箇所では通ることができないこともありました。ほんのしばらくの間でも不便を感じるが多かったので、体が不自由な方やベビーカーを使用している方にはもっと切実なのは、と思いました。(女性・40代)
  
- ヘルパーの仕事をしており、障害者の方のお世話をしているので、いろいろな場面で困ることが多い。例えば、工事現場の近くを車いすで通ると、大変危険に感じることもある。(女性・50代)
  
- 歩行者用信号の時間を余裕あるものにしたい。スクランブル信号の歩行者用の時間と車両用の時間のバランスが悪い所が多い。(男性・70代)

## 2 公共交通施設（鉄道の駅、バスターミナル等）

- 駅で昇りのエスカレーターは設置されているが、降りのエスカレーターが設置されていないところがあるようだが、高齢者などで膝が悪い人は、昇りより降りが大変だと良く話を聞くので、降りのエスカレーターを設置してほしい。スペース的に無理なら、エレベーターを各駅に設置すべきだと思う。（女性・50代）
- 駅のエレベーターについて、ひと駅に1箇所1基しか設置されていないことが多く、改札口によっては端から端まで延々と歩くことになり、不便を感じている。（女性・20代）
- 車いすの人が駅を利用するときに、エスカレーターを全面ストップすることに申し訳なく感じ、外出を控える方もいると聞いている。エスカレーターとエレベーターが両方必要と思う。（男性・30代）
- 自分が子どもを連れてまちに出て歩くようになり、日々不便を感じている。出かけるにも一人ならまだしも小さい子を二人連れて、ベビーカーを持って電車に乗るにも、駅には長い階段があり、一人を抱いて一人の手を引っ張ってベビーカーを担ぐのは無理なので、どこの駅にもエレベーターがあればと思います。（女性・30代）

## 3 公共交通機関（電車・バス等の車両）

- ノンステップバスが増えているが、實際上障害者や車いすの人が利用しているところを見たことがない。乗降時に時間がかかるとの理由で遠慮して、バスよりタクシーを利用している人が多い。（女性・40代）
- 路線バスが少なくなっているように思う。地域バスをもっと走らせてほしい。年をとると時間はかかってもバスの方が利用しやすい。（女性・60代）
- 私の乗る電車は、いつも車いすの女性が乗り合わせます。彼女一人を助けるために、わざわざ駅員が3人も待機して、鉄製の板をホームにかけ、車いすを乗せている。こんなに人手を使わなくても、簡単に乗れる方法はないものかと思う。人件費がどうのこうのと言いたいのではなく、車いすの彼女が恐縮しているのが気の毒なのだ。（女性・30代）

## 4 公園・緑地・庭園等

- 公園のトイレは、車いすの人や乳幼児を連れた人には使いにくい。誰もが使いやすいトイレを整備してほしい。（女性・30代）
- 小さい公園が地域に所々にあるがベンチがない。一休みしたいときがあるので1か所ぐらいは置いてほしい。（男性・70代）

### (3) 建築物の整備状況

**この5年間で、建築物のバリアフリーは着実に進んだが、日常よく利用する飲食店・コンビニエンスストアの整備には課題が残る。**

以下の①～④までの建築物について、調査基準日（平成16年11月1日）から過去1年ほどの間に「利用したことがある」人に、それぞれの施設が高齢者や障害のある方・妊産婦・乳幼児を連れた方などに利用しやすいように整備されているかを聞いた。

- ① 官公庁施設（区・市役所など）
- ② 病院や診療所
- ③ 飲食店
- ④ コンビニエンスストア

（注） 本問で、「どちらかといえば整備されている」とは、「整備されている」と「やや整備されている」の合計を表し、「どちらかといえば整備されていない」とは、「整備されていない」と「あまり整備されていない」の合計を表す。

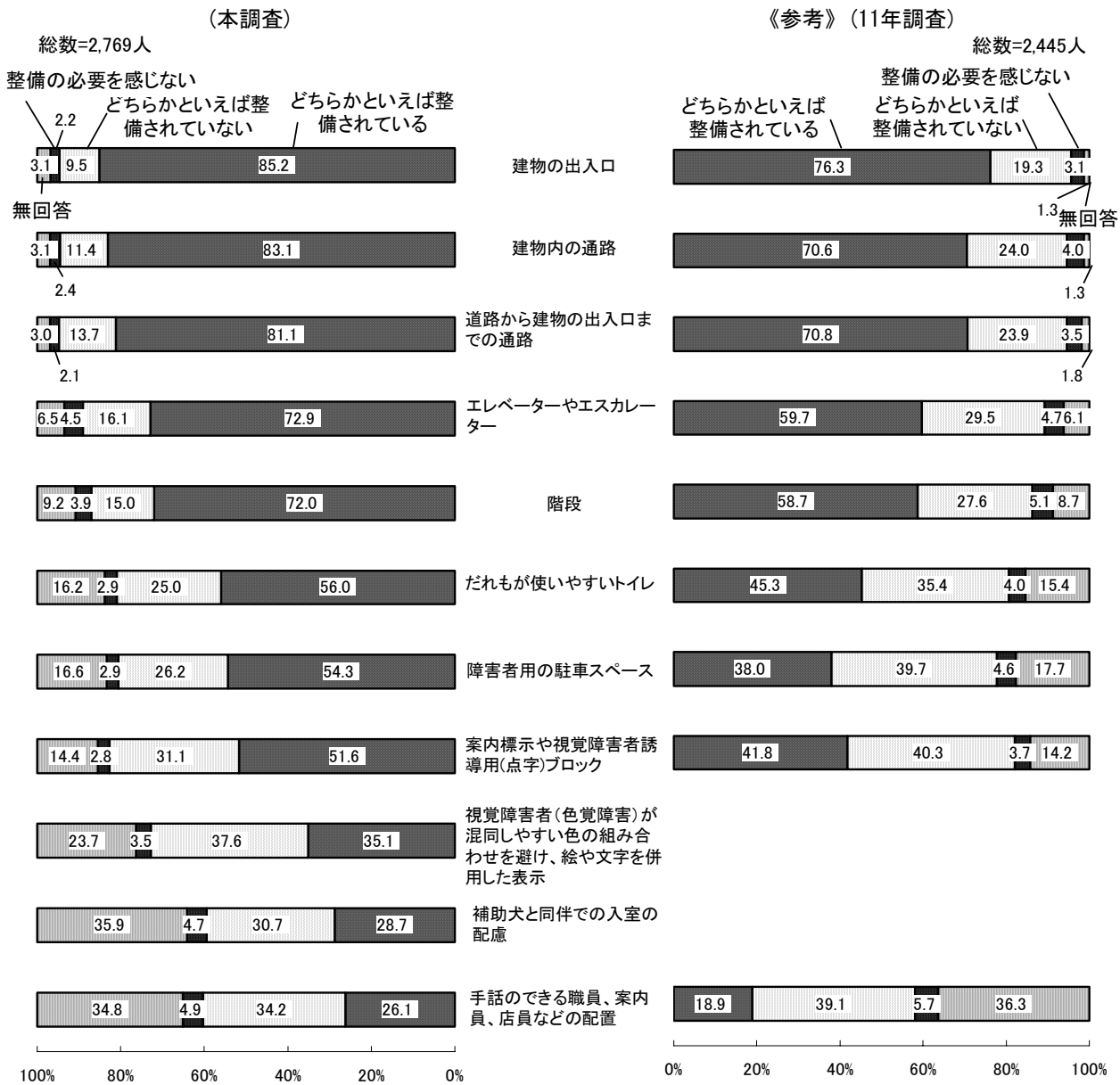
#### ① 官公庁施設（区・市役所など）

本調査では、11項目中8項目で「どちらかといえば整備されている」の割合が5割以上となっている。11年調査と比較すると、「障害者用の駐車スペース」が16.3ポイント、「階段」が13.3ポイント増加する等、すべての項目で「どちらかといえば整備されている」の割合が増加している。（図2-20）

※その他の意見（計82件）としてあげられた主なものは、以下のとおりである。

- ・あまり、利用したり意識したことがないのでわからない。（13件）
- ・庁舎内の案内標示等がわかりにくい。（12件）
- ・トイレ、授乳スペース等を整備してほしい。（10件）
- ・職員の対応が不親切である。（10件）
- ・施設により違いがあり、古い建物は整備されていない。（8件）
- ・窓口がわかりにくい、手続きが煩雑である。（7件）
- ・建物までの道路が整備されていない。（6件）

図 2-20 官公庁施設（区・市役所など）の整備状況－11年調査との比較



(注 1) 「どちらかといえば整備されている」とは、「整備されている」と「やや整備されている」の合計を表し、「どちらかといえば整備されていない」とは、「整備されていない」と「あまり整備されていない」の合計を表す。

(注 2) 11年調査では、「視覚障害者(色覚障害)が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した表示」「補助犬と同伴での入室の配慮」は未調査である。



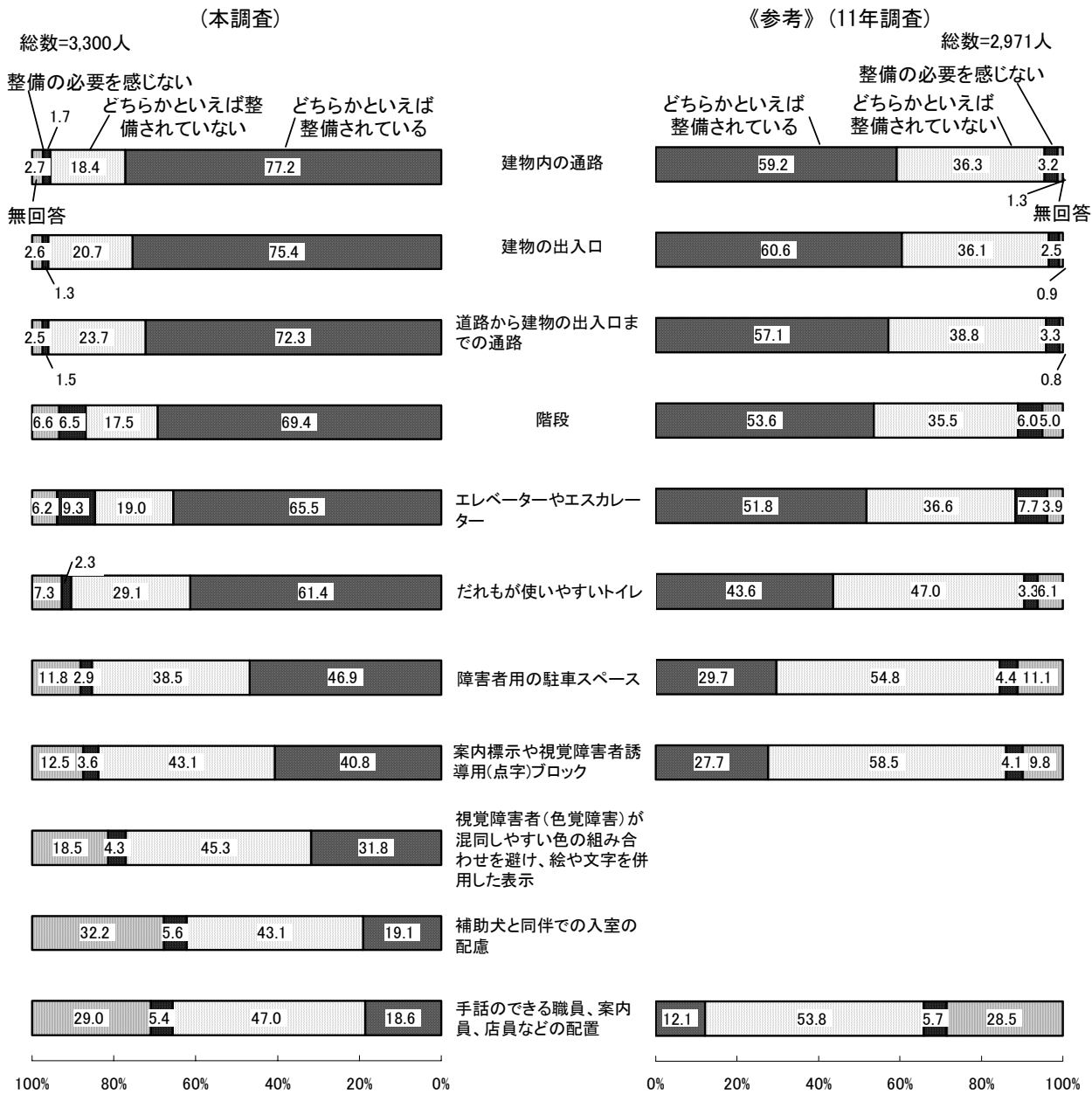
## ② 病院や診療所

本調査では、11項目中6項目で「どちらかといえば整備されている」の割合が6割以上となっている。11年調査と比較すると、「建物内の通路」が18.0ポイント（11年調査59.2%→本調査77.2%）、「だれもが使いやすいトイレ」が17.8ポイント（11年調査43.6%→本調査61.4%）増加する等、すべての項目で「どちらかといえば整備されている」の割合が増加している。（図2-21）

※その他の意見（計82件）としてあげられた主なものは、以下のとおりである。

- ・規模の大きい病院は整備されているが、個人病院はあまり整備されていない。  
(21件)
- ・受診する人の立場にたった職員の対応が必要。(7件)
- ・待ち時間が長いので改善すべき。(7件)
- ・あまり意識したことがないのでわからない。(6件)
- ・出入り口の階段やスロープが利用しにくい。(5件)
- ・トイレを使いやすく整備してほしい。(3件)

図 2-21 病院や診療所の整備状況－11年調査との比較



(注1) 「どちらかといえば整備されている」とは、「整備されている」と「やや整備されている」の合計を表し、「どちらかといえば整備されていない」とは、「整備されていない」と「あまり整備されていない」の合計を表す。

(注2) 11年調査では、「視覚障害者(色覚障害)が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した表示」「補助犬と同伴での入室の配慮」は未調査である。

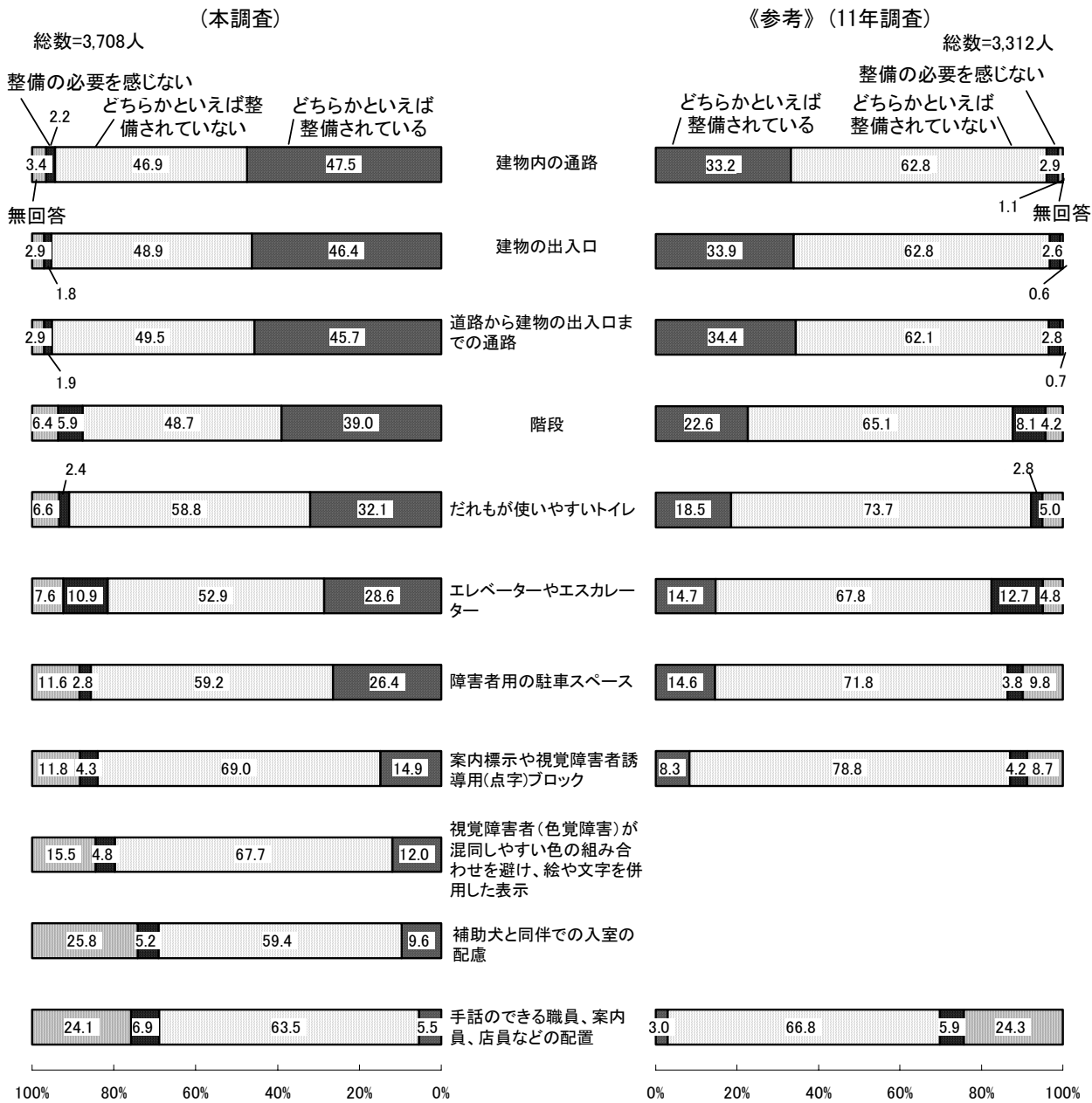
### ③ 飲食店

本調査では、11項目すべての項目で「どちらかといえば整備されている」の割合が5割以下となっている。しかし、11年調査と比較すると、「階段」で16.4ポイント（11年調査22.6%→本調査39.0%）、「建物内の通路」で14.3ポイント（11年調査33.2%→本調査47.5%）増加する等、すべての項目で「どちらかといえば整備されている」の割合が増加している。（図2-22）

※その他の意見（計72件）としてあげられた主なものは、以下のとおりである。

- ・店の規模や経営主体、立地場所によって整備状況に差がある（10件）
- ・店内の分煙が不十分（9件）
- ・ファミリーレストランは2階にあるところが多く、階段が利用しにくい。（8件）
- ・全体に、高齢者や障害者への配慮が不十分。（7件）
- ・トイレを使いやすく整備してほしい。（4件）
- ・店内のスペースにゆとりがほしい。（4件）

図 2-22 飲食店の整備状況－11 年調査との比較



(注1) 「どちらかといえば整備されている」とは、「整備されている」と「やや整備されている」の合計を表し、「どちらかといえば整備されていない」とは、「整備されていない」と「あまり整備されていない」の合計を表す。

(注2) 11年調査では、「視覚障害者(色覚障害)が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した表示」「補助犬と同伴での入室の配慮」は未調査である。

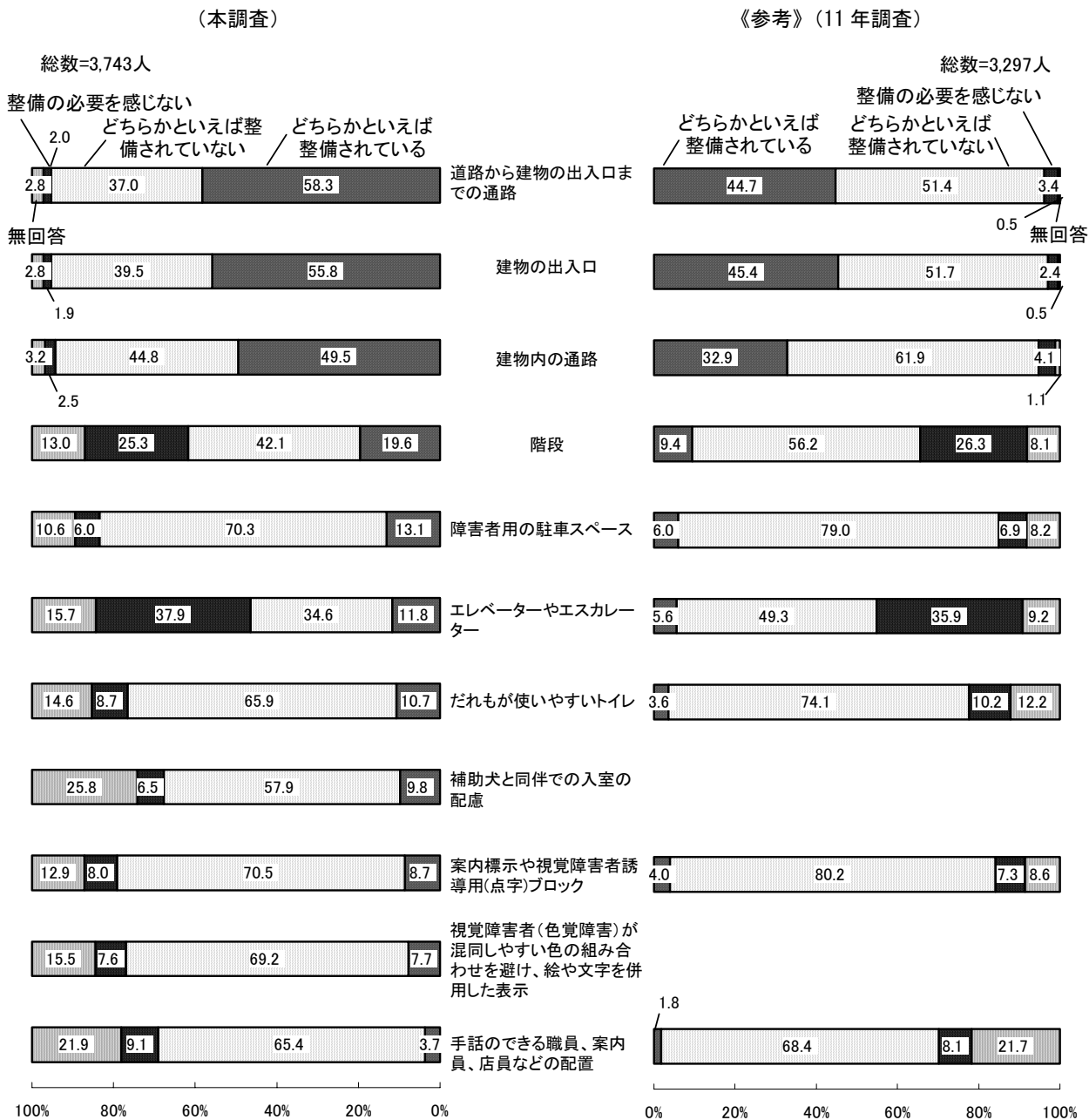
#### ④ コンビニエンスストア

本調査では、11 項目中 3 項目で「どちらかといえば整備されている」の割合がほぼ 5 割以上となっているが、他の項目では 2 割以下となっている。しかし、11 年調査と比較すると、「建物内の通路」が 16.6 ポイント（11 年調査 32.9%→本調査 49.5%）、「道路から建物の出入口までの通路」が 13.6 ポイント（11 年調査 44.7%→本調査 58.3%）増加する等、すべての項目で「どちらかといえば整備されている」の割合が増加している。（図 2-23）

※その他の意見（計 41 件）としてあげられた主なものは、以下のとおりである。

- ・店内が狭く、ベビーカーや車いすを使う人には利用しにくい。（9 件）
- ・出入り口のドアが利用しにくい。（特に車いす等の利用者にとって）（8 件）
- ・全体に、高齢者や障害者への配慮が不十分。（6 件）
- ・コンビニエンスストアにこのような整備を求めるのは難しい。（4 件）

図 2-23 コンビニエンスストアの整備状況－11年調査との比較



(注1) 「どちらかといえば整備されている」とは、「整備されている」と「やや整備されている」の合計を表し、「どちらかといえば整備されていない」とは、「整備されていない」と「あまり整備されていない」の合計を表す。

(注2) 11年調査では、「視覚障害者(色覚障害)が混同しやすい色の組み合わせを避け、絵や文字を併用した表示」「補助犬と同伴での入室の配慮」は未調査である。

## ⑤ 建築物相互間の比較

各項目ごとに、「どちらかといえば整備されている」と答えた人の割合をみると、「道路から建物の出入り口までの通路」「建物の出入り口」「建物内の通路」の3項目では、①～④の建築物ともに約5割か、それ以上の割合となっている。(図2-24～図2-26)

これに対して、「案内標示や視覚障害者誘導用(点字)ブロック」「絵や文字を併用した表示」「障害者用の駐車スペース」「手話のできる職員、案内員、店員等の配置」「補助犬と同伴での入室の配慮」の5項目では、①～④の建築物とも約5割か、それ以下の割合となっている。(図2-30～図2-34)

また、建築物相互間で比較すると、「どちらかといえば整備されている」と答えた人の割合は、官公庁施設(区・市役所など)・病院や診療所の方が、飲食店・コンビニエンスストアよりもすべての項目で上回っている。特に官公庁施設(区・市役所など)では、「誰でも使いやすいトイレ」を除くすべての項目で最も多くなっている。

これに対して、飲食店・コンビニエンスストアでは、すべての項目で「どちらかといえば整備されている」の割合が、官公庁施設(区・市役所など)・病院や診療所を下回っており、コンビニエンスストアの「道路から建物の出入り口までの通路」「建物の出入り口」の2項目を除くと、いずれも5割に達していない。(図2-24～図2-34)

図2-24 道路から建物の出入口までの通路の整備－建築物別

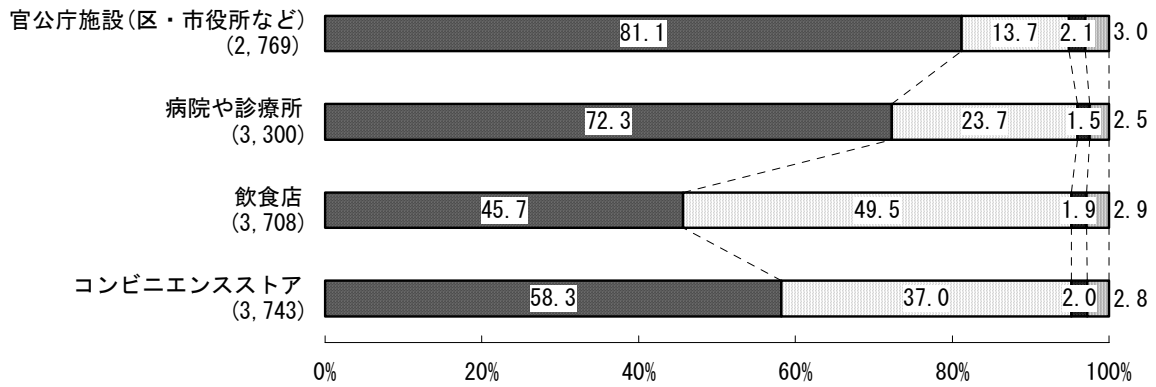


図2-25 建物の出入口の整備－建築物別

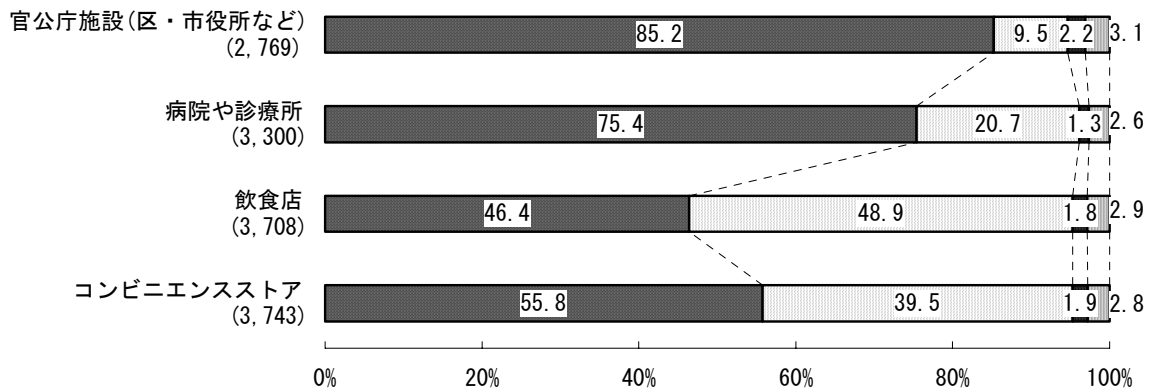
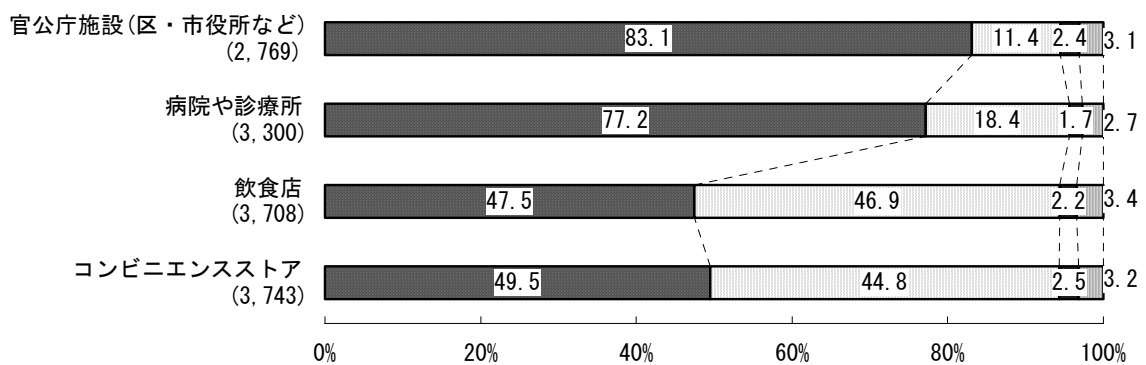


図2-26 建物内の通路の整備－建築物別



■どちらかといえば整備されている □どちらかといえば整備されていない ■整備の必要を感じない □無回答



図2-27 階段整備－建築物別

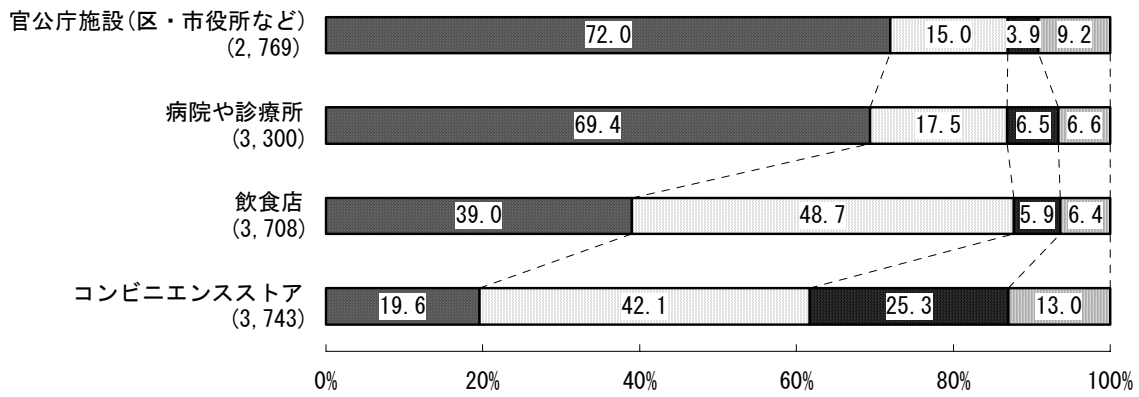


図2-28 エレベーターやエスカレーターの整備－建築物別

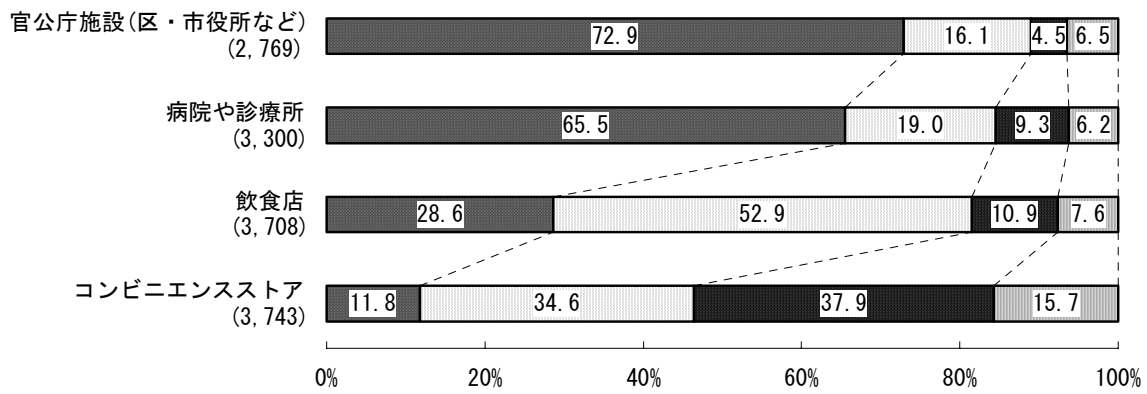
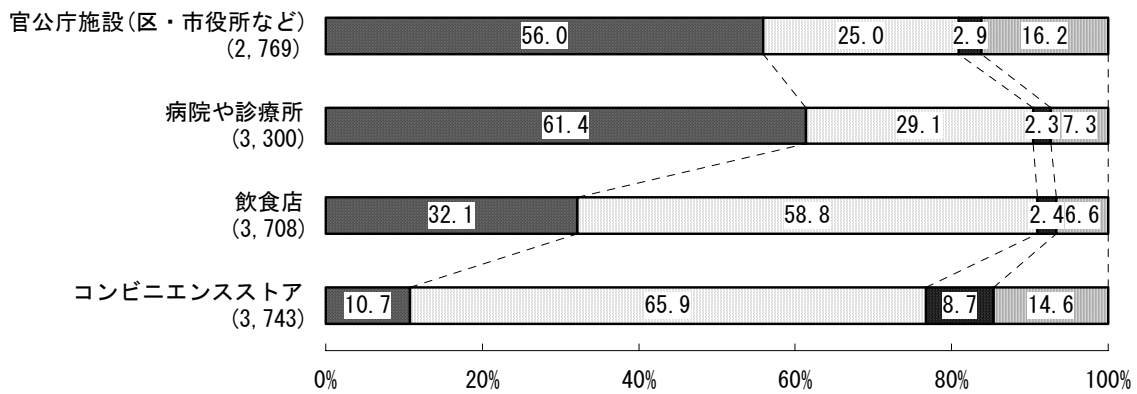


図2-29 だれもが使いやすいトイレの整備－建築物別



■ どちらかといえば整備されている □ どちらかといえば整備されていない ■ 整備の必要を感じない □ 無回答

図2-30 案内標示や視覚障害者誘導用(点字)ブロックの整備－建築物別

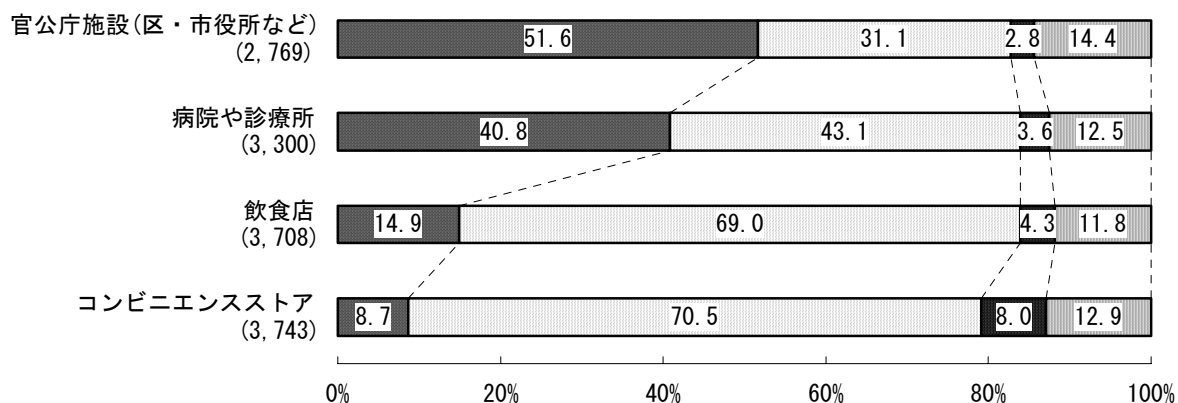


図2-31 絵や文字を併用した表示の整備－建築物別

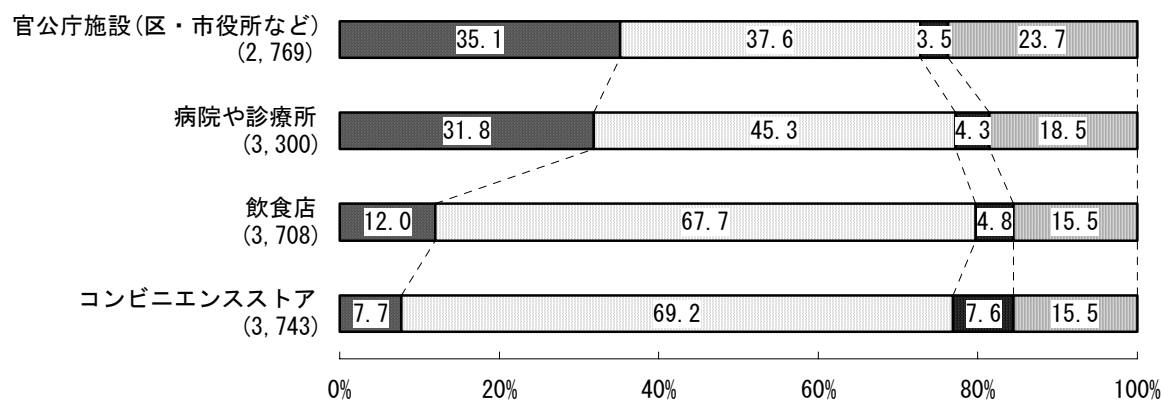
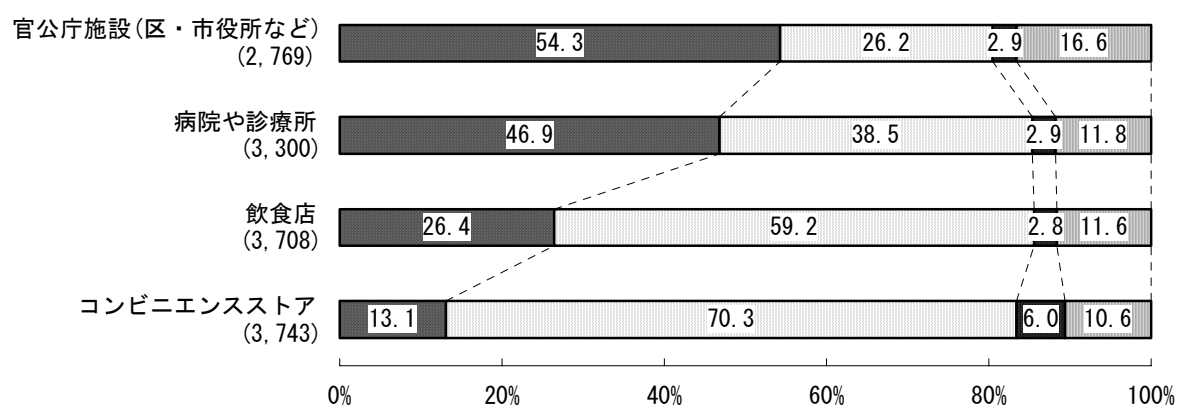


図2-32 障害者用の駐車スペースの整備－建築物別



■ どちらかといえば整備されている □ どちらかといえば整備されていない ■ 整備の必要を感じない □ 無回答

図2-33 手話のできる職員、案内員、店員などの配置—建築物別

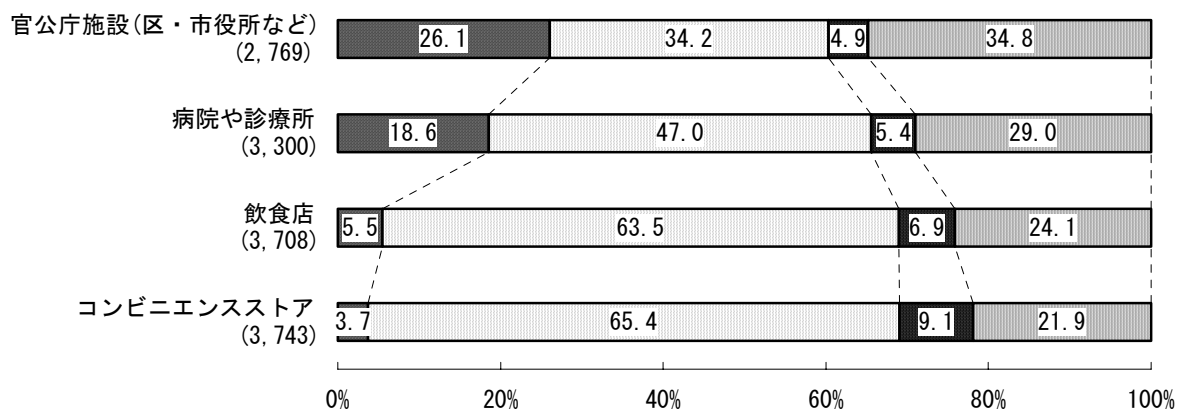
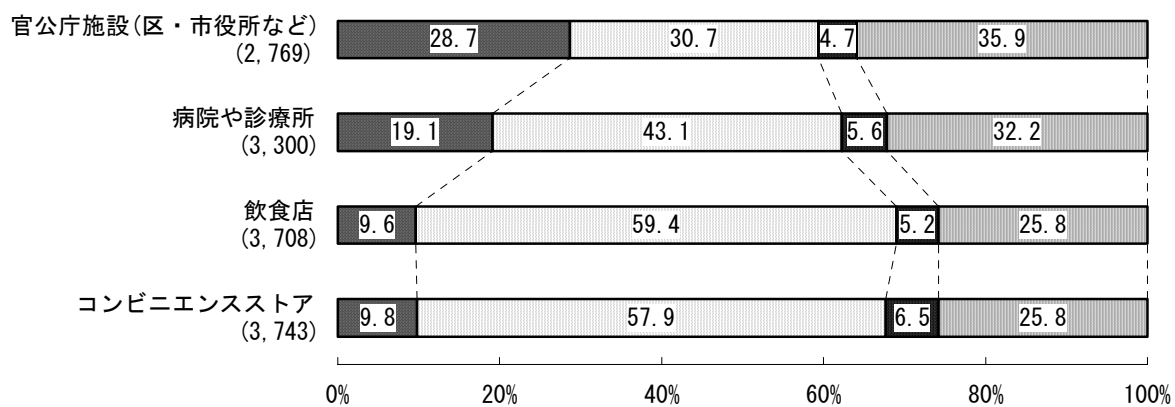


図2-34 補助犬と同伴での入室の配慮—建築物別



■どちらかといえば整備されている □どちらかといえば整備されていない ■整備の必要を感じない □無回答

建築物の整備状況についての主な意見は、以下のとおりであった。(自由意見欄の記述より)

- 病院への通院の時に、出入り口のスロープが急なので、車いすでひとりでは登れない。ただスロープがあればいいというのではなく、本当に使う人の身になった設備をつくってほしい。(女性・60代)
- コンビニエンスストアや病院の駐車場は、まだまだ整備されていません。私の母は障害者ですが、足が痛いときには、たった1センチの段差でもつまずきそうになるそうです。(男性・20代)
- 飲食店では、自動ドアでない所がほとんどだ。手で押して入らなければならないので、車いすの人はひとりでは利用できない。(男性・60代)
- 「補助犬と同伴で入れるか」「手話のできる職員、店員がいるか」等は、障害のある人は情報を得ようとするだろうが、一般の人は自分にとって必要がないのでまったく気にしていない。特に公共の施設などでは、広く一般にも知ってもらえるように、入り口などに絵や大きな文字で標示してほしい。(男性・30代)
- 健康で不自由のない人には、快適な暮らしができる今日ですが、車いすやベビーカー利用者、高齢者には、あまりにもきつい状況が多い建物ばかりで嫌になる。バリアフリーといいながら、設計している人間がデザイン重視で見た目や流行感、高さばかりを気にして、使う人の気持ちを考えていない。(女性・20代)
- 古い校舎の学校等では、教室と廊下の間に段差があったり、スペースがないという理由で障害のあるお子さんの使用するエレベーターが設置されていなかったりします。そのようなところから改善していったら、子ども達の福祉に関する意識も高まるのではないかと思います。(女性・30代)
- 私は障害者を多数採用している企業の総務の仕事をしています。設備等は障害者自身の使い勝手のよさを(意見を)聞きながら整えてきました。民間でも1つのフロアをバリアフリーにすることにより、他のフロアや事業所に影響を与えて、ビル全体がバリアフリーになってきて、従業員の気持ちも優しくなってきました。このような輪が広がってほしいと思います。(男性・40代)

#### (4) 施設等を整備するための費用負担

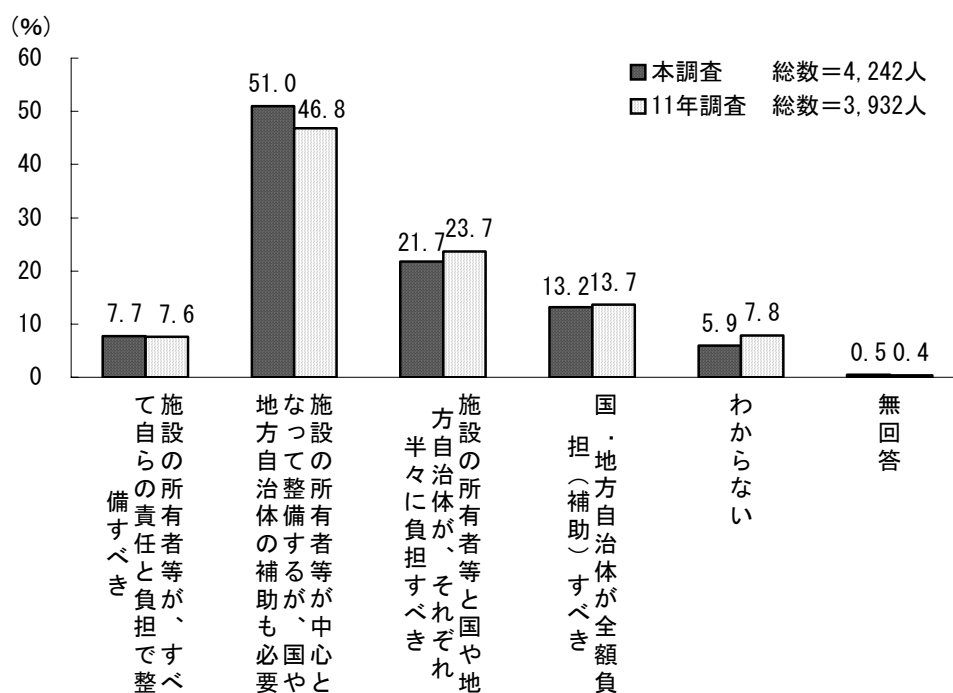
施設の所有者が中心となって整備するが、国や地方公共団体の補助も必要、という考え方が5割を超える。

駅、デパート、映画館、病院など不特定多数の人が利用する施設や公共交通機関を、高齢者や障害のある方をはじめ全ての人々が、安全で快適に利用できるように整備するための費用負担のあり方について聞いたところ、「施設の所有者等が中心となって整備するが、国や地方自治体の補助も必要」が51.0%と5割を超え、最も多くなっている。次いで「施設の所有者等と国や地方自治体が、それぞれ半々に負担すべき」21.7%、「国・地方自治体が全額負担（補助）すべき」13.2%と続く。

11年調査と比べると、順位も割合もほぼ同様となっているが、「施設の所有者等が中心となって整備するが、国や地方自治体の補助も必要」が4.2ポイント増加している。

(図 2-35)

図 2-35 施設等を整備するための費用負担について－11年調査との比較



性別にみると、特に大きな差はみられない。年齢階級別にみると、すべての年齢階級で、上位3項目の順位は同様となっている。(表2-14)

表2-14 施設等を整備するための費用負担について—性、年齢階級別

		総 数	す べ て 自 ら の 責 任 と 負 担 者 が 、 整 備 す	施 設 の 所 有 者 や 管 理 者 が 、 中 心 と な つ て 整 備 す べ き だ が 、 中 心 や 地 方 自 治 体 の 補 助 も 必 要	施 設 の 所 有 者 や 管 理 者 が 、 中 心 と な つ て 整 備 す べ き だ が 、 中 心 や 地 方 自 治 体 の 補 助 も 必 要	施 設 の 所 有 者 と 半 々 に 負 担 す べ き	国・地方自治体が全額負担(補助)すべき	わからない	無 回 答
総 数		100.0 (4,242)	7.7	51.0	21.7	13.2	5.9	0.5	
性 別	男	100.0 (1,892)	9.9	50.6	21.2	13.7	4.0	0.5	
	女	100.0 (2,350)	5.8	51.4	22.1	12.8	7.4	0.5	
年 齢 階 級 別	18～29歳	100.0 (590)	4.2	52.7	24.6	13.9	4.4	0.2	
	30～39歳	100.0 (895)	8.6	51.3	23.0	13.0	3.9	0.2	
	40～49歳	100.0 (682)	6.9	50.4	23.5	14.5	4.3	0.4	
	50～59歳	100.0 (707)	8.1	53.7	19.5	13.3	4.8	0.6	
	60～69歳	100.0 (699)	8.6	54.8	18.7	11.7	5.3	0.9	
	70～79歳	100.0 (505)	8.9	45.7	22.0	13.5	9.7	0.2	
	80歳以上	100.0 (164)	8.5	34.8	18.9	11.6	24.4	1.8	
	65歳以上 (再掲)	100.0 (991)	8.8	47.7	19.6	12.0	11.3	0.6	

### 3 ソフト面（心のバリアフリー）

#### (1) 外出時に誰かの手助けをした経験

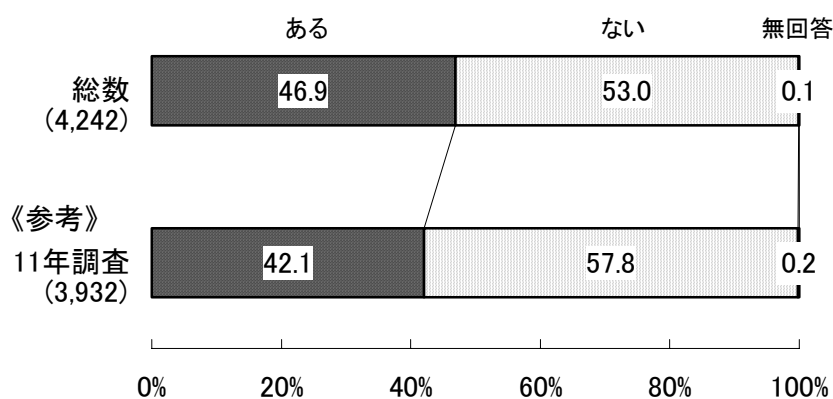
外出時に困っている人を見かけたときに、積極的に手助けをした人は5割。  
一方、何もしなかった人は24%と、前回調査よりも増加。

##### ① 困っている人を見かけたり、出会ったりした経験の有無

調査基準日から過去一年くらいの中に、外出の際、高齢者・障害のある方・妊産婦・乳幼児を連れた方などが困っているのを見かけたり、出会ったりしたことがあるかを聞いたところ、「ある」は46.9%、「ない」は53.0%であった。

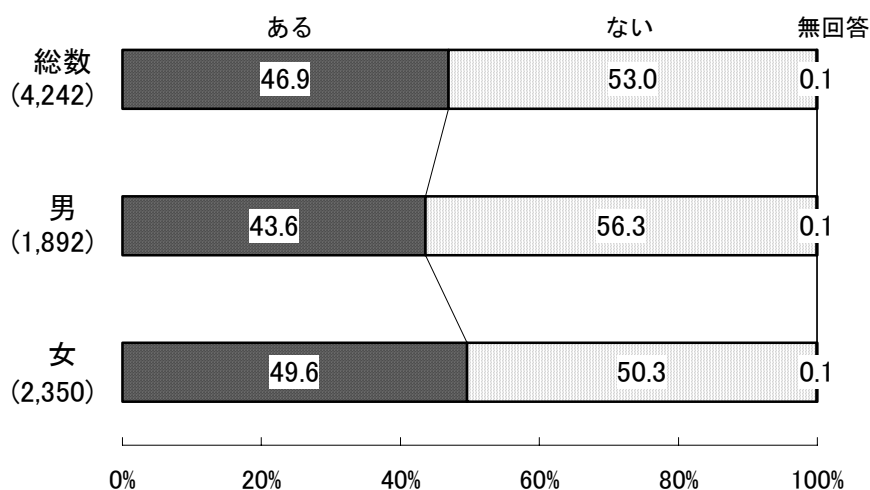
11年調査と比べると、「ある」と答えた人が4.8ポイント増加している。（図3-1）

図3-1 困っている人を見かけたり、出会ったりした経験の有無－11年調査との比較



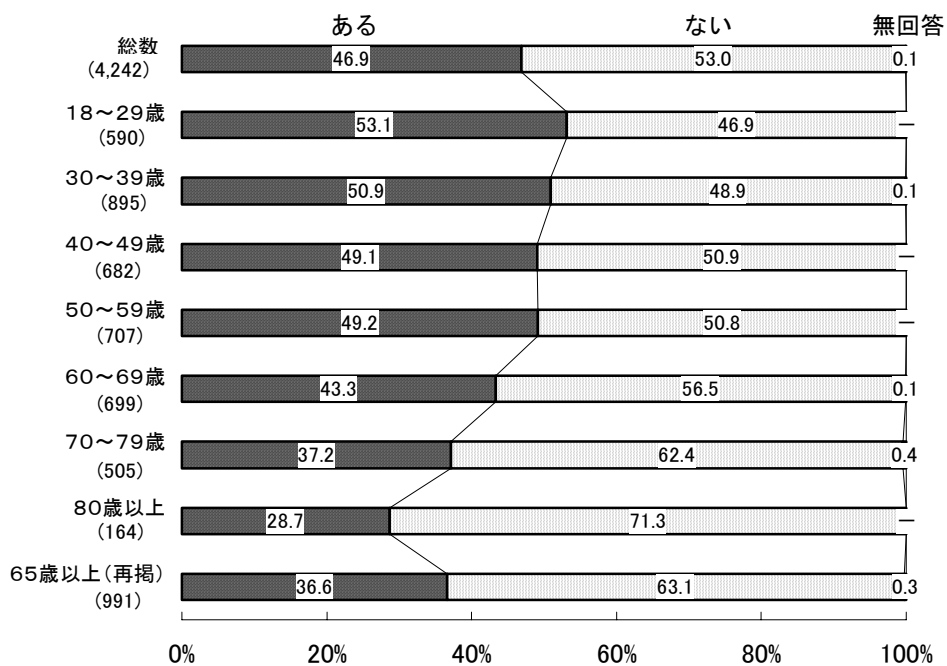
性別にみると、「ある」と答えた男性は43.6%、女性は49.6%であり、女性のほうが6.0ポイント高くなっている。(図3-2)

図3-2 困っている人を見かけたり、出会ったりした経験の有無—性別



年齢階級別にみると、「ある」は18～29歳が53.1%と最も多く、次いで30～39歳が50.9%と続き、ほぼ年齢の低い順となっている。(図3-3)

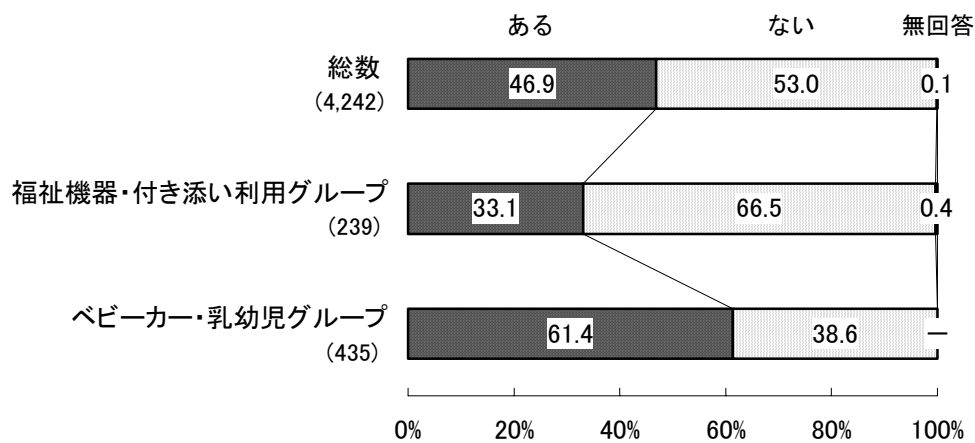
図3-3 困っている人を見かけたり、出会ったりした経験の有無—年齢階級別





外出時の状況（グループ比較）別にみると、福祉機器・付き添い利用グループで「ある」と答えた人は 33.1%であり、総数に比べて 13.8 ポイント低くなっている。一方、ベビーカー・乳幼児グループで「ある」と答えた人は 61.4%であり、総数に比べて 14.5 ポイント高くなっている。（図 3-4）

図 3-4 困っている人を見かけたり、出会ったりした経験の有無  
 -外出時の状況（グループ比較）別



(注) 福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表 1-5を参照。

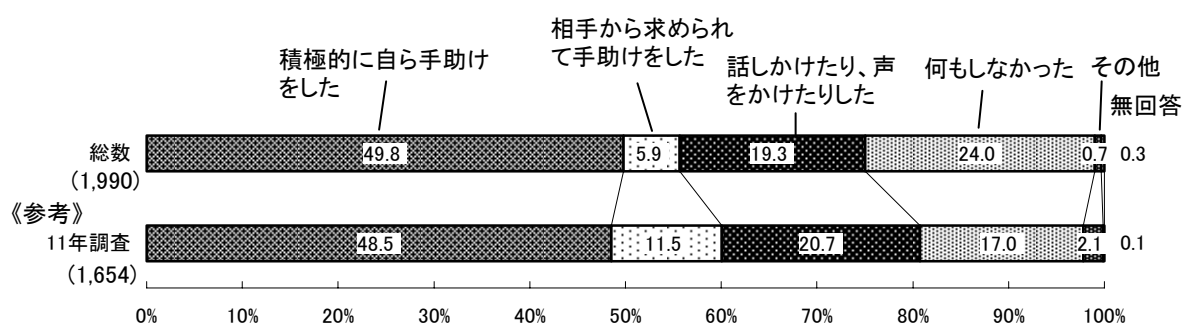
## ② 困っている人を見かけたときに自分がとった行動

調査基準日から過去一年くらいの間に、外出の際、高齢者・障害のある方・妊産婦・乳幼児を連れてきた方などが困っているのを見かけたり、出会ったりしたことが「ある」と答えた人に、そのときどのように行動したかを聞いた。

「積極的に自ら手助けをした」が49.8%と最も多いが、24.0%は「何もしなかった」と答えている。

11年調査と比べると、「何もしなかった」が7.0ポイント増加しており、「相手から求められて手助けをした」が5.6ポイント減少している。(図3-5)

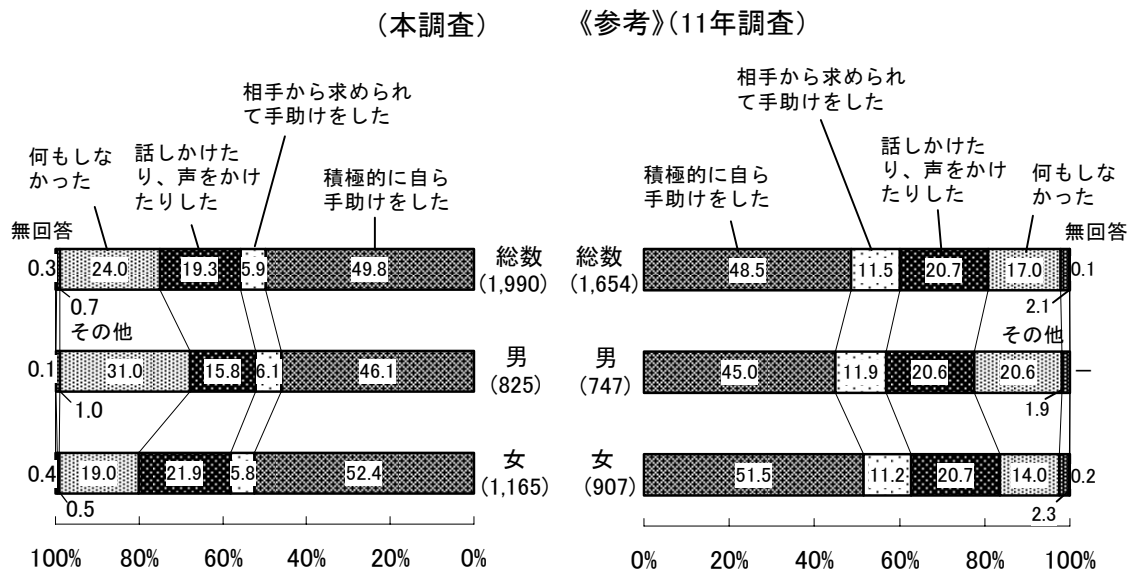
図3-5 困っている人を見かけたときに自分がとった行動－11年調査との比較



性別にみると、「積極的に自ら手助けをした」と答えた男性は46.1%、女性は52.4%で、女性が6.3ポイント高い。対して、「何もしなかった」と答えた男性は31.0%、女性は19.0%で、男性が12.0ポイント高い。

11年調査と比較すると、「何もしなかった」と答えた人の割合は、男性は10.4ポイント（11年調査20.6%→本調査31.0%）、女性は5.0ポイント（11年調査14.0%→本調査19.0%）増加している。（図3-6）

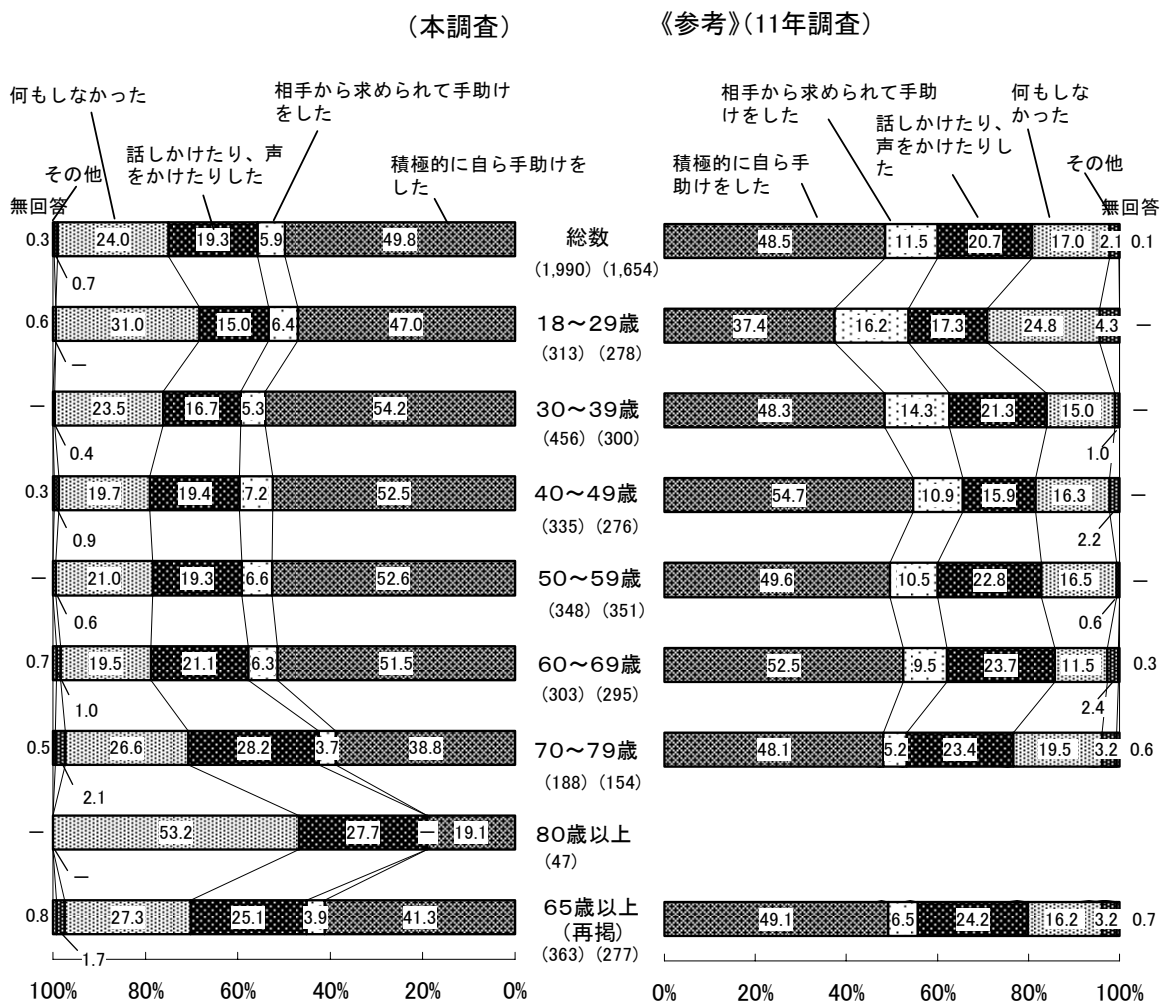
図3-6 困っている人を見かけたときに自分がとった行動—性別、11年調査との比較



年齢階級別にみると、30代～60代では過半数の人が「積極的に自ら手助けをした」と答えている。しかし70歳以上では、30代～60代に比べて、「積極的に自ら手助けをした」の割合が減り、「話しかけたり、声をかけたりした」と「何もしなかった」の割合が増えている。また、18～29歳でも、30～39歳に比べると、「積極的に自ら手助けをした」は47.0%で7.2ポイント低いのに対して、「何もしなかった」は31.0%で7.5ポイント高くなっている。

11年調査と比べると、「何もしなかった」はすべての年齢階級で増加しており、特に30～39歳が8.5ポイント（11年調査15.0%→本調査23.5%）、65歳以上（再掲）が11.1ポイント（11年調査16.2%→本調査27.3%）増加している。この一方で、「積極的に自ら手助けをした」も、18～29歳で9.6ポイント（11年調査37.4%→本調査47.0%）、30～39歳で5.9ポイント（11年調査48.3%→本調査54.2%）増加するなど、30代以下で行動の二極化が進行していることもうかがえる。（図3-7）

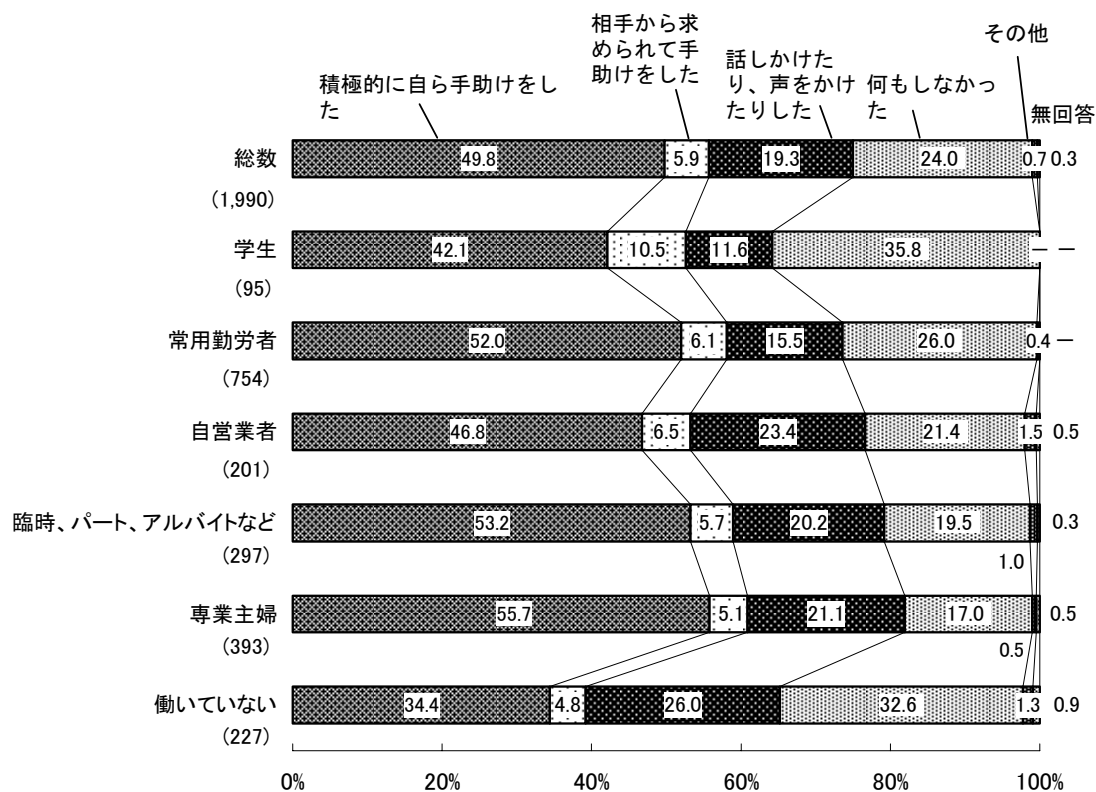
図3-7 困っている人を見かけたときに自分がとった行動—年齢階級別、11年調査との比較



(注) 11年調査では「70～79歳」と「80歳以上」を分けずに「70歳以上」として集計していたため、「70～79歳」の欄の数値は、「80歳以上」をあわせた数値となっている。

現在の就労状況別にみると、「積極的に自ら手助けをした」は専業主婦が 55.7%と最も多く、次いで臨時、パート、アルバイトなどが 53.2%、常用勤労者が 52.0%と続いている。「話しかけたり、声をかけたりした」は、働いていない人が 26.0%と最も多くなっている。一方、「何もしなかった」は学生が 35.8%と最も多く、次いで働いていない 32.6%と続き、最も少ないのは専業主婦 17.0%となっている。(図 3-8)

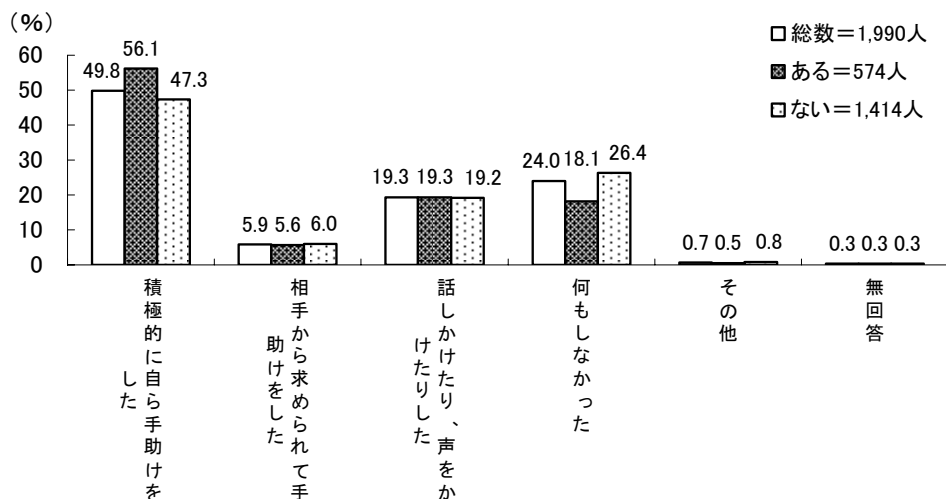
図 3-8 困っている人を見かけたときに自分がとった行動—現在の就労状況別



ボランティア活動の経験の有無別にみると、ボランティア活動の経験が「ある」人は、「ない」人に比べて、「積極的に自ら手助けをした」は 8.8 ポイント高く、「何もしなかった」は 8.3 ポイント低くなっている。(図 3-9)

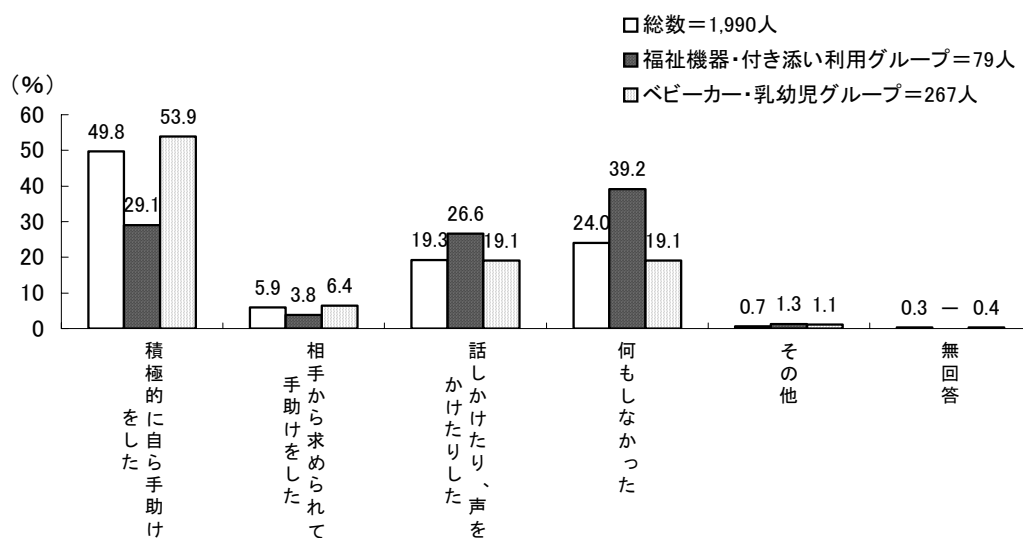
図 3-9 困っている人を見かけたときに自分がとった行動

—ボランティア活動の経験の有無別



外出時の状況（グループ比較）別にみると、福祉機器・付き添い利用グループは、積極的に手助けをすることは難しく、「何もしなかった」の割合も高いが、「話しかけたり、声をかけたりした」の割合は26.6%で、総数よりも7.3ポイント高い。ベビーカー・乳幼児グループは、「何もしなかった」が19.1%と総数よりも4.9ポイント低く、約8割の人が何らかの手助けを行っている。（図3-10）

図3-10 困っている人を見かけたときに自分がとった行動  
—外出時の状況（グループ比較）別



(注) 福祉機器・付き添い利用グループとベビーカー・乳幼児グループの総数は、P17の表1-5のそれぞれのグループ総数のうち、調査基準日から過去一年くらいの間、外出の際、高齢者・障害のある方・妊産婦・乳幼児を連れた方などが困っているのを見かけたり、出会ったりしたことが「ある」と答えた人の人数である。

### ③ 困っている人にした手助けの内容

調査基準日から過去一年くらいの間に、外出の際、高齢者・障害のある方・妊産婦・乳幼児を連れた方などが困っているのを見かけたり、出会ったりしたことが「ある」と答えた人のうち、「積極的に自ら手助けをした」「相手から求められて手助けをした」と答えた人に、その手助けの内容について聞いた。

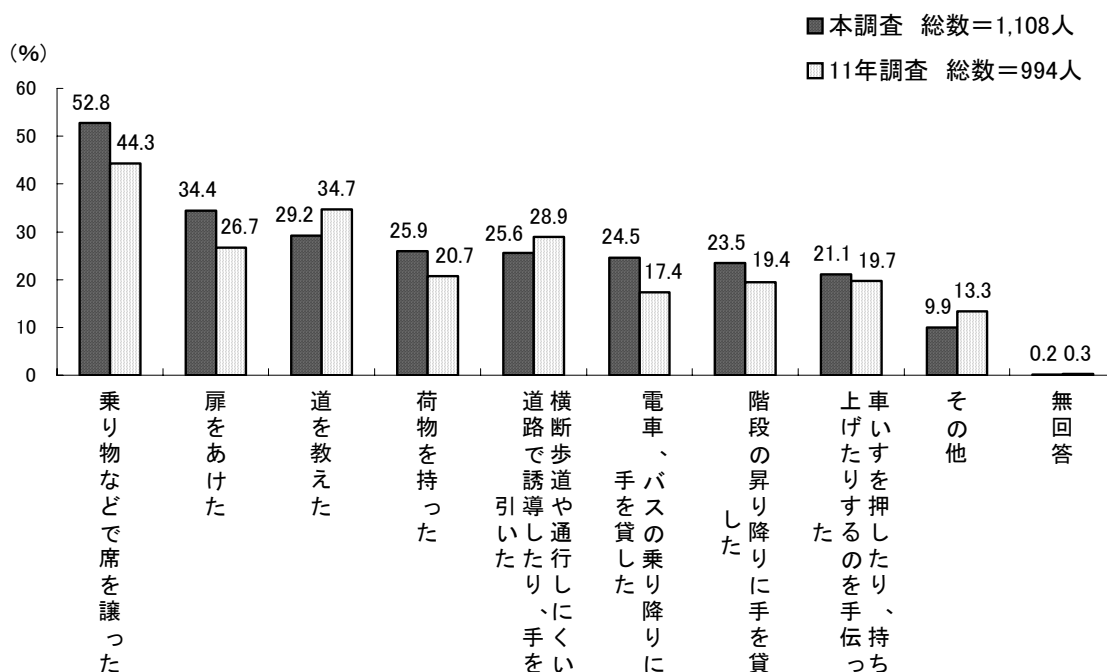
「乗り物などで席を譲った」が52.8%で最も多く、次いで「扉をあけた」が34.4%、「道を教えた」が29.2%となっている。

11年調査と比較すると、「乗り物などで席を譲った」は8.5ポイント、「扉をあけた」は7.7ポイント増加しているのに対し、「道を教えた」は5.5ポイント減少している。(図3-11)

また、「その他」の主な具体的内容は、以下のとおりである。

- ・ ベビーカーを持って運んであげた 13件
- ・ 目的地まで案内した、同行した 10件
- ・ 駅で切符を買ってあげた 6件
- ・ 救急車を呼んであげた 4件

図3-11 困っている人にした手助けの内容（複数回答）－11年調査との比較



性・年齢階級別にみると、「乗り物などで席を譲った」は男性18～29歳が70.7%で最も多く、次いで女性18～29歳が65.2%、男性30～39歳が61.3%の順となっており、50代以下の年齢では、男性40～49歳の47.2%を除いて、男女とも5割以上となっている。

また、65歳以上の高齢者は、「横断歩道や通行しにくい道路で誘導したり、手を引いた」と「階段の昇り降りに手を貸した」で、比較的高い割合を示している。(表3-1)

表3-1 困っている人にした手助けの内容（複数回答）－性・年齢階級別

	総 数	乗 り 物 な ど で 席 を 譲 っ た	扉 を あ け た	道 を 教 え た	荷 物 を 持 っ た	横 断 歩 道 や 通 行 し に く い 道 路 で 誘 導 し た り 、 手 を 引 い た	電 車 、 バ ス の 乗 り 降 り に 手 を 貸 し た	階 段 の 昇 り 降 り に 手 を 貸 し た	車 い す を 押 し た り 、 持 ち 上 げ の 手 伝 っ た	そ の 他	無 回 答
総 数	100.0 (1,108)	52.8	34.4	29.2	25.9	25.6	24.5	23.5	21.1	9.9	0.2
男 総数	100.0 (430)	55.8	33.0	28.4	25.8	23.5	24.2	22.1	24.9	7.0	0.2
男 18～29歳	100.0 (75)	70.7	37.3	29.3	24.0	9.3	16.0	16.0	22.7	5.3	—
男 30～39歳	100.0 (93)	61.3	28.0	22.6	25.8	21.5	19.4	21.5	23.7	5.4	—
男 40～49歳	100.0 (72)	47.2	31.9	29.2	19.4	19.4	27.8	20.8	25.0	11.1	1.4
男 50～59歳	100.0 (83)	59.0	36.1	25.3	30.1	25.3	26.5	22.9	26.5	7.2	—
男 60～69歳	100.0 (73)	43.8	32.9	34.2	31.5	37.0	31.5	28.8	28.8	6.8	—
男 70～79歳	100.0 (27)	48.1	33.3	37.0	22.2	33.3	22.2	25.9	22.2	3.7	—
男 80歳以上	100.0 (7)	28.6	28.6	28.6	14.3	42.9	42.9	14.3	14.3	14.3	—
男 65歳以上（再掲）	100.0 (63)	33.3	28.6	34.9	23.8	34.9	22.2	28.6	27.0	6.3	—
女 総数	100.0 (678)	50.9	35.3	29.8	26.0	27.0	24.8	24.3	18.7	11.8	0.1
女 18～29歳	100.0 (92)	65.2	38.0	26.1	14.1	12.0	18.5	18.5	6.5	9.8	—
女 30～39歳	100.0 (178)	52.8	42.1	28.1	23.0	20.8	15.7	17.4	19.1	11.8	—
女 40～49歳	100.0 (128)	52.3	36.7	32.0	27.3	23.4	25.0	28.9	27.3	12.5	0.8
女 50～59歳	100.0 (123)	50.4	31.7	33.3	34.1	35.8	35.0	22.8	19.5	14.6	—
女 60～69歳	100.0 (102)	50.0	28.4	32.4	27.5	38.2	32.4	32.4	17.6	9.8	—
女 70～79歳	100.0 (53)	20.8	26.4	22.6	32.1	39.6	28.3	35.8	18.9	9.4	—
女 80歳以上	100.0 (2)	—	—	50.0	—	50.0	—	—	—	50.0	—
女 65歳以上（再掲）	100.0 (101)	36.6	28.7	29.7	28.7	40.6	27.7	30.7	14.9	9.9	—



#### ④ 困っている人を見かけたときに何もしなかった理由

調査基準日から過去一年くらいの間に、外出の際、高齢者・障害のある方・妊産婦・乳幼児を連れてきた方などが困っているのを見かけたり、出会ったりしたことが「ある」と答えた人のうち、「何もしなかった」と答えた人に、その理由を聞いた。

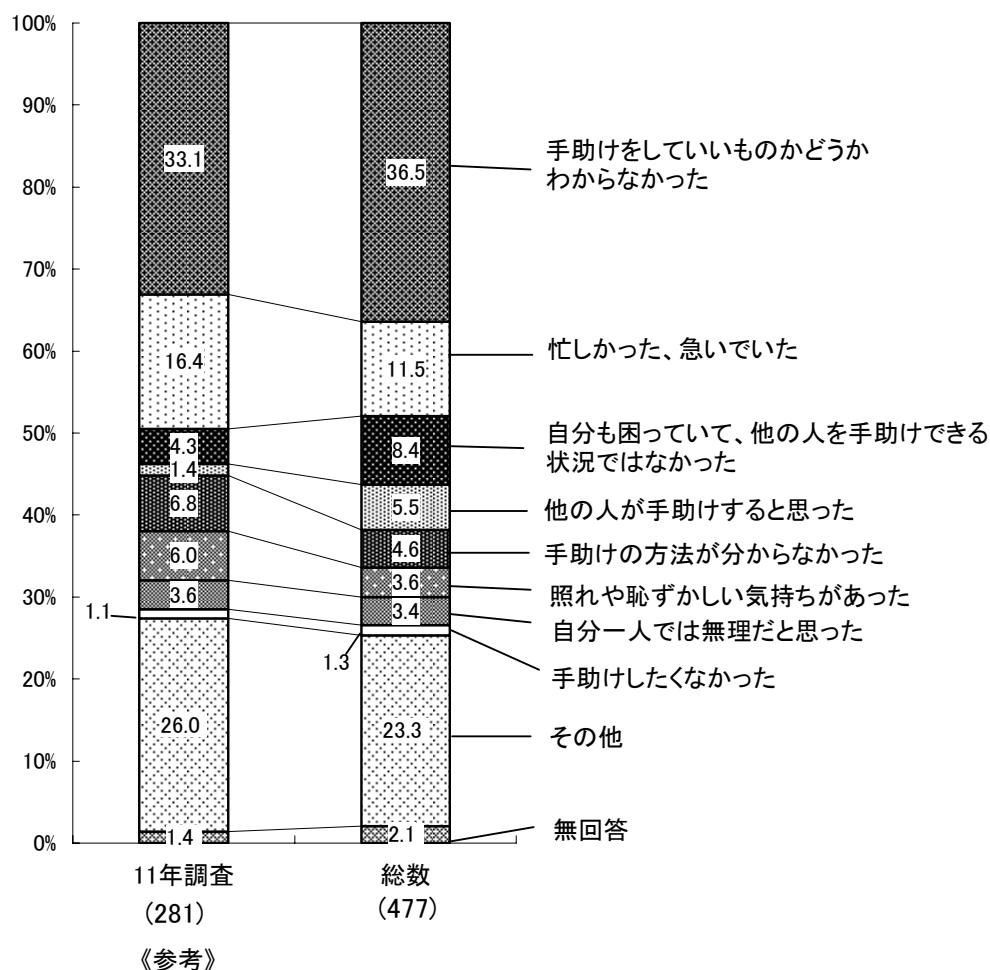
「その他」を除くと、「手助けをしていいものかどうかわからなかった」が 36.5%で最も多く、次いで「忙しかった、急いでいた」が 11.5%となっている。

11年調査と比較すると、「自分も困っていて、他の人を手助けできる状況ではなかった」と「他の人が手助けすると思った」がともに 4.1ポイント増加している。一方、「忙しかった、急いでいた」は 4.9ポイント減少している。(図 3-12)

また、「その他」の主な具体的内容は、以下のとおりである。

- ・ 他の人がすでに手助けをしていた
- ・ 手助けをするほどではなかったので見守っていた
- ・ 遠くにいた、車から見たなど、離れていて手助けできなかった

図 3-12 困っている人を見かけたときに何もしなかった理由－11年調査との比較



性・年齢階級別にみると、「手助けをしていいものかどうかわからなかった」は男性 50～59 歳が 46.3%で最も多く、次いで男性 60～69 歳が 45.5%、女性 18～29 歳が 43.4%の順となっている。

「忙しかった、急いでいた」は男性 30～39 歳が 24.1%で最も多く、「自分も困っていて、他の人を手助けできる状況ではなかった」は女性 60～69 歳が 23.1%で最も多い。また、「照れや恥ずかしい気持ちがあった」は男性 18～29 歳が 11.4%で最も多い。(表 3-2)

表 3-2 困っている人を見かけたときに何もしなかった理由—性・年齢階級別

	総 数	わ 手 か ら な か つ た	忙 し か つ た、 急 い で い た	自 分 も 困 つ て い て、 他 の 人 を 手 助 け で き る 状 況 で は な か つ た	他 の 人 が 手 助 け す る と 思 つ た	手 助 け の 方 法 が 分 か ら な か つ た	た 照 れ や 恥 ず か し い 気 持 ち が あ つ た	自 分 一 人 で は 無 理 だ と 思 つ た	手 助 け し た く な か つ た	そ の 他	無 回 答
総 数	100.0 (477)	36.5	11.5	8.4	5.5	4.6	3.6	3.4	1.3	23.3	2.1
男 総数	100.0 (256)	37.9	14.1	4.7	5.1	4.3	4.7	3.5	2.3	21.9	1.6
18～29歳	100.0 (44)	38.6	15.9	4.5	2.3	2.3	11.4	4.5	4.5	13.6	2.3
30～39歳	100.0 (54)	40.7	24.1	1.9	5.6	3.7	3.7	—	—	18.5	1.9
40～49歳	100.0 (43)	32.6	11.6	—	4.7	9.3	4.7	—	2.3	34.9	—
50～59歳	100.0 (41)	46.3	12.2	—	4.9	4.9	2.4	2.4	2.4	22.0	2.4
60～69歳	100.0 (33)	45.5	6.1	3.0	9.1	3.0	3.0	—	—	30.3	—
70～79歳	100.0 (29)	31.0	10.3	20.7	6.9	3.4	3.4	6.9	3.4	10.3	3.4
80歳以上	100.0 (12)	8.3	8.3	16.7	—	—	—	33.3	8.3	25.0	—
65歳以上(再掲)	100.0 (51)	31.4	9.8	17.6	5.9	2.0	2.0	11.8	3.9	13.7	2.0
女 総数	100.0 (221)	34.8	8.6	12.7	5.9	5.0	2.3	3.2	—	24.9	2.7
18～29歳	100.0 (53)	43.4	13.2	9.4	3.8	5.7	5.7	1.9	—	13.2	3.8
30～39歳	100.0 (53)	28.3	7.5	11.3	9.4	9.4	1.9	3.8	—	26.4	1.9
40～49歳	100.0 (23)	39.1	13.0	13.0	4.3	4.3	—	4.3	—	21.7	—
50～59歳	100.0 (32)	28.1	12.5	6.3	6.3	3.1	3.1	—	—	34.4	6.3
60～69歳	100.0 (26)	38.5	3.8	23.1	—	—	—	—	—	34.6	—
70～79歳	100.0 (21)	33.3	—	19.0	14.3	—	—	—	—	28.6	4.8
80歳以上	100.0 (13)	30.8	—	15.4	—	7.7	—	23.1	—	23.1	—
65歳以上(再掲)	100.0 (48)	33.3	—	20.8	6.3	2.1	—	6.3	—	29.2	2.1

現在の就労状況別にみると、「手助けをしていいものかわからなかった」は自営業者が48.8%と最も多く、次いで常用勤労者が42.9%となっており、最も少ないのは専業主婦の20.9%となっている。

「忙しかった、急いでいた」と「照れや恥ずかしい気持ちがあった」は学生が最も多く、それぞれ17.6%、14.7%となっている。また、「自分も困っていて、他の人を手助けできる状況ではなかった」は、専業主婦が22.4%と最も多くなっている。(表3-3)

表3-3 困っている人を見かけたときに何もしなかった理由－現在の就労状況別

	総数	かの手助けを かたどけて かいて かいらなも	忙 し か つ た、 急 い で	他 の 人 も 困 つ て い て、 手 助 け が な か つ た	自 分 も 困 つ て い て、 手 助 け す る	他 の 人 が 手 助 け す る	手 助 け の 方 法 が 分 か ら な か つ た	持 照 れ が あ つ た あ つ た あ つ た あ つ た あ つ た	自 分 一 人 で は 無 理 だ と 思 つ た	手 助 け し た く な か つ た	そ の 他	無 回 答
総数	100.0 (477)	36.5	11.5	8.4	5.5	4.6	3.6	3.4	1.3	23.3	2.1	
学生	100.0 (34)	35.3	17.6	2.9	5.9	—	14.7	—	—	23.5	—	
常用勤労者	100.0 (196)	42.9	13.8	1.5	5.6	7.7	4.1	1.5	1.5	19.4	2.0	
自営業者	100.0 (43)	48.8	7.0	7.0	4.7	4.7	—	—	4.7	20.9	2.3	
臨時、パート、 アルバイトなど	100.0 (58)	32.8	15.5	10.3	5.2	1.7	3.4	—	—	25.9	5.2	
専業主婦	100.0 (67)	20.9	4.5	22.4	7.5	3.0	1.5	6.0	—	32.8	1.5	
働いていない	100.0 (74)	31.1	9.5	16.2	4.1	2.7	1.4	12.2	—	21.6	1.4	

外出先で困っている人への手助けについての主な意見は、以下のとおりであった。(自由意見欄の記述より)

- 東京の人は冷たい人が多く、人助けをしようとしないう人が多すぎる。もっと公共機関など(電車など)で弱者を手助けするようアピールすべきだと思う。(女性・30代)
  
- 高齢者や障害者に、手を貸したいと思っても、実際には何を手助けしたらよいものか判断できないことがしばしばです。これも身近にそういった人たちに接する機会があまりなく、健常者と隔離されたような状況が、以前にはあったためかと思います。子どもの頃より自然なふれあいができれば、もっとあたりまえに手が差し伸べられるのではないのでしょうか。(男性・40代)
  
- バリアを理解すべき教育は小さい時から教える。子どもの通う幼稚園で障害者を受け入れているので子どもも理解し、いろいろ手助けしている。(女性・30代)
  
- 仕事をしていて、平日の日中に外出する機会が少ないためかも知れませんが、日常の中で高齢者や障害のある方を見かけることが少ないと感じています。活動時間の違いということもあるのですが、外出することに不自由を感じ、必要最低限の用事以外は家にこもってしまっているのではないかと心配になります。  
また、障害のある方や生活弱者に対して(自戒も含め)無関心な人が多いように思います。一人一人の心のバリアフリーがまず一番なのではないかと思います。(女性・30代)